

南原

—緊急発掘調査報告書—

1977

南信土地改良事務所  
駒ヶ根市教育委員会



## 序 文

今回ここに刊行の運びとなった報告書は、県営は場整備事業に伴い昭和50年に実施された緊急発掘調査の報告であります。

北は大田切川、南は中田切川を境界とする赤穂地区は、広い扇状台地上に展開し、その間には、古田切川・上穂沢川・辻沢川などの小河川が東流し、田切地形を形成しており、遺跡は中央アルプス山麓や小河川の沿岸に集中して見られ、その濃密な遺跡群は古くから学界の注目するところでした。

本調査会は、これらの遺跡群を対象に、昭和45年以来県営は場整備事業に先行しつつ藤助畠・舟山・羽場下・大城林・北方・富士山遺跡など縄文時代中期を主とする遺跡の発掘調査を行ってきましたが、その後、事業の進展に伴い工区も国道東に移り、今回の南原遺跡の発掘調査を実施したわけであります。

発掘調査の詳細は報告書の各項にみられるとおりであります。とりわけ石器の加工場という貴重な資料を発掘できましたことは、すばらしい成果だったと思います。

このたび、長期間にわたって発掘調査にご指導いただいた友野良一先生を始め、調査団の先生方、快く発掘作業に参加して下さった地元の方々、事業に深いご理解をいただいた大田切土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々等、多くの皆さまのご厚志によって、無事に発掘調査を終了することができました。

ここに関係の方々に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第です。

昭和52年2月15日

県営は場事業大田切区埋蔵文化財調査会

会長・市教育長 宮下 清計

## 凡　　例

1. 今回の調査は昭和50年度に実施し、大田切Ⅲ地区県営は場整備事業に伴うものである。
2. 事業は南信土地改良事務所の委託により、県営は場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内（昭和51年度）にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はでき得る限り簡略し、資料の再検討は後日の機会にゆすることにした。
4. 本書の構成は、遺跡・石器の特殊性ゆえ、石器は遺構と遺物の項においては、扱わずあらためて石器の項をもうけた。
5. 遺構関係の図面は気賀沢進が製図した。焼土はドットで表し、炉内埋設土器は○で表示し、柱穴の深さは床面からの深さをcmで表している。縮尺は各図に示してある。
6. 土器・石器の実測は気賀沢が製図は気賀沢・宮下喜代子が担当した。
7. 土器の復元は和田武夫が担当した。
8. 石器実測図に伴う記号は石器の項において説明を行ってある。
9. 写真撮影は気賀沢が担当した。土器写真の小数字は各住居址博図中の番号を意味する。
10. 本文は、気賀沢がまとめは友野良一が執筆した。
11. 本報告書の編集は気賀沢があたった。
12. 遺物及び実測図類は市立駒ヶ根博物館に保管してある。

## 目 次

序 文	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
図表目次	
図版目次	
第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査会の組織	1
第 3 節 発掘作業経過	2
第 II 章 遺跡の環境	3
第 1 節 位置及び地形	3
第 2 節 歴史的環境	3
第 III 章 発掘調査	7
第 1 節 調査概要	7
第 2 節 造構と遺物	10
第 3 節 石 器	40
第 IV 章 まとめ	85
図 版	89

## 挿 図 目 次

第 1 図 丸山南遺跡位置図	4
第 2 図 遺跡の地形図	5
第 3 図 付近の遺跡分布図	6
第 4 図 遺構グリット図	8
第 5 図 遺構全体図	9
第 6 図 第 1 号住居址実測図	10
第 7 図 第 1 号住居址覆土出土土器	12
第 8 図 第 1 号住居址覆土出土土器	13

第9图	第1号住居址床面出土土器.....	14
第10图	第1号住居址床面出土土器.....	15
第11图	第1号住居址床面出土土器.....	16
第12图	第2号住居址实测图.....	17
第13图	第2号住居址覆土出土土器.....	18
第14图	第2号住居址炉内埋設土器.....	19
第15图	第3号住居址实测图.....	20
第16图	第3号住居址覆土出土土器.....	21
第17图	第3号住居址床面出土土器.....	21
第18图	第4号住居址实测图.....	22
第19图	第4号住居址覆土出土土器.....	23
第20图	第4号住居址床面出土土器.....	24
第21图	第5号住居址实测图.....	25
第22图	第5号住居址覆土出土土器.....	26
第23图	第5号住居址床面出土土器.....	27
第24图	第5号住居址床面出土土器.....	28
第25图	第6号住居址实测图.....	28
第26图	第6号住居址埋設土器.....	29
第27图	第7号住居址实测图.....	29
第28图	第7号住居址床面出土土器.....	30
第29图	第7号住居址床面出土土器.....	31
第30图	第8号住居址实测图.....	32
第31图	第8号住居址床面出土土器.....	33
第32图	第9号住居址实测图.....	34
第33图	第9号住居址覆土出土土器.....	35
第34图	第9号住居址覆土出土土器.....	36
第35图	第9号住居址床面出土土器.....	37
第36图	特殊遗物实测图.....	38
第37图	土壤实测图.....	38
第38图	土壤出土土器.....	39
第39图	打製石斧( a.b類 )实测图 .....	53
第40图	“ ( b類 ) ” .....	54
第41图	“ ( b.c類 ) ” .....	55
第42图	“ ( d.加工中類 ) ” .....	56
第43图	磨製石斧实测图.....	59
第44图	石匙实测图.....	61

第45図	石器実測図	62
第46図	石鍬実測図	63
第47図	敲打器（a類）実測図	67
第48図	敲打器（b類）実測図	68
第49図	敲打器（c類）実測図	69
第50図	特殊敲打器実測図	72
第51図	石皿実測図	73
第52図	凹石実測図	74
第53図	磨石実測図	74
第54図	磨き石実測図	75
第55図	石棒実測図	76
第56図	石核状石器	76
第57図	ハンマーストーン実測図	77
第58図	石核実測図	78
第59図	石核実測図	79
第60図	横刃型石器実測図	82
第61図	横刃型石器実測図	83

## 図 表 目 次

図表1	第1号住居址出土石器一覧表	41
図表2	第2号住居址出土石器一覧表	42
図表3	第3号住居址出土石器一覧表	43
図表4	第4号住居址出土石器一覧表	44
図表5	第5号住居址出土石器一覧表	45
図表6	第7号住居址出土石器一覧表	46
図表7	第8号住居址出土石器一覧表	47
図表8	第9号住居址出土石器一覧表	48
図表9	住居址出土石器総計表	49
図表10	石器組成表	50
図表11	石器種類別出土比率表	51
図表12	打製石斧の刃部幅と頭部幅相関表	52
図表13	打製石斧分類別・石質別表	57
図表14	打製石斧の最長と最大幅・最大厚相関表	58

図表15	大形粗製石匙分類表	62
図表16	石鍬元長と幅と厚さの相関図	64
図表17	石鍬元長と現長の相関図	65
図表18	石鍬元長と重量の相関図	65
図表19	敲打器（a類）計測表	70
図表20	敲打器（b類）計測表	71
図表21	敲打器（c類）計測表	72
図表22	住居址別横刃型石器と剥片一覧表	80
図表23	横刃型石器と剥片の比率表	81
図表24	横刃型石器と剥片石質別相関表	81

## 図 版 目 次

図版1	南原遺跡遠景
図版2	発掘風景
図版3	第1号住居址
図版4	第1号住居址炉
図版5	第1号住居址炉内埋設土器
図版6	第1号住居址出土土器
図版7	第2号住居址
図版8	第2号住居址炉内埋設土器
図版9	第3号住居址
図版10	第3号住居址炉
図版11	第3号住居址出土土器
図版12	第4号住居址
図版13	第4号住居址炉と炉内埋設土器
図版14	第4号住居址出土土器
図版15	第5号住居址
図版16	第5号住居址炉
図版17	第5号住居址炉内埋設土器
図版18	第5号住居址出土土器
図版19	第7号住居址土器出土状態
図版20	第7号住居址
図版21	第7号住居址炉
図版22	第7号住居址炉内埋設土器
図版23	第7号住居址出土土器
図版24	第8号住居址
図版25	第9号住居址
図版26	発掘参加者

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

県営は場整備事業大田切地区第Ⅲ換地工区内の遺跡の調査を委託された場合には、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託したい旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市当局と市教育委員会とが協議した結果、市立博物館を中心にして県営は場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

昭和50年11月15日南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結、また市長と調査会との間で再委託契約を行った。一方、県教育委員会に発掘調査の着工について連絡し、友野良一氏を団長とする調査団を編成し、11月17日から調査を開始した。

### 第2節 調査会の組織

#### ○県営は場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会

会長	宮下清計	(市教育長)
理事	小池金義	(市教育次長) <会長職務代理>
"	木下義男	(市文化財調査委員会委員長)
"	下村忠比古	(市文化財調査委員会副委員長)
監事	小出幸一	(市文化財保存会会長)
"	佐藤雪洞	(駒ヶ根郷土研究会会长)
幹事	松崎勝治	(市社会教育係長)
	氣賀沢進	(市立博物館)
	井上かほる	( " )

#### ○調査団

団長	友野良一	(日本考古学协会会员) <発掘担当者>
調査員	氣賀沢進	(長野県考古学会会员・市立博物館) <発掘担当者>
"	和田武夫	(長野県考古学会会员)
"	北沢雄喜	( " " )
"	田中清文	( " " )
"	吉沢文夫	( " " )

調査員	伊藤修	(長野県考古学会会員・飯島町教育委員会)
指導	桐原健	(県指導主事)
"	丸山敏一郎	( " )
"	樋口昇一	( " )
"	今村善興	( " )
"	宮沢恒之	( " )
"	山田端穂	( " )
"	伴信夫	( " )
"	岡田正彦	( " )
"	林茂樹	(日本考古学協会会員)
"	武藤雄六	(井戸尻考古館)

### 第3節 発掘作業経過

昭和50年11月17日、発掘器材の運搬を行い、発掘調査区域の設定グリット杭打ちを行う。翌18日、現地にて調査開始にあたって鍛入式を行い、市教育長(調査会会長)・友野団長のあいさつのあと、今後の調査日程と調査方法について説明を行い、テント設営と杭打ちを行う。

昔に遺物を探集しているとはいえるが、量も少なく現地地形が水田ということで正確に発掘地点をおさえることができず、試掘など試みては、遺跡の中心部の確認を行ったが、なかなか思うにまかせず、10日間ほどは、土器片が数片発見されたのみで、毎日毎日あせりの連続であった。

調査地区が東に伸びるにつれて、遺物の量も多くなり、大望の住居址を確認することができ、その後、更に8軒の住居址を確認して、12月24日に発掘調査を終了した。

発掘調査にとっては決していい時期でなかったわけでしたが、調査団員、土地改良区関係者・南信土地改良事務所・地主の方々・発掘調査に参加して下さった地元の協力者をはじめ、多くの方々のご協力とご配慮によって、ここに初期の目的を果し、調査を終了することができました。心から感謝の意を申し上げる次第です。

寒風の吹きすさぶ中、また期間中には雪にも降られ条件の悪い発掘でしたが、快く発掘に参加していただきました皆さまに改めてお礼申し上げます。

#### ○発掘調査協力者(順不同)

小町谷元 宮沢かつえ 佐藤俊子 堀沢美江子 気賀沢一郎 林重成 気賀沢智子 中山萬長谷部重一 池上ちとし 池上洋介 宮沢玉江 洪谷利子 倉田正義 宮沢久子 熊沢良子 酒井良人 新井美津ゑ 新井由美子 森田志ん 気賀沢まつゑ 気賀沢とみゑ

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 位置及び地形

当遺跡は駒ヶ根市赤穂上赤須字下原地蔵に所在する。国鉄飯田線伊那福岡駅より東へ3km、天竜川の右岸段丘上端に位置する。標高595m前後である。

伊那谷は長野県の南部にあたり、東に赤石山脈、中央構造線をはさんで、戸倉山・高島谷山を始めとする前山の伊那山脈が並行して走る。西には木曾山脈があり、天竜川をはさんで南北に並走する。

伊那盆地は、沖積世以前にこの高峻な両側の山地からの過剰堆積により山麓に大小いくつかの扇状地を形成している。駒ヶ根市赤穂地区は、北の大田切川、南の中田切川によって形成された二つの大きな扇状地の複合した地域である。これらの両河川にはさまれた中を更にいくつかの小河川が東流して田切地形を造っている。当遺跡はその末端に位置し、北には上穂沢、南には孫ヶ沢・中田切川が深いV字谷を形成している。天竜川の第一段丘面上に位置する当遺跡は天竜川との比高は約70mを測る。

北を流れる上穂沢川は赤穂地区を南北に分断する河川で、源は中央アルプスに発し、国道153号線付近より深い渓谷を形成し、当遺跡北で川と合流して天竜川に注ぐ。南を流れる孫ヶ沢は付近の雨水を集めた小河川で遺跡の西方800mよりV字谷を形成している。天竜川段丘崖には湧水があり立地条件は良好である。

### 第2節 歴史的環境

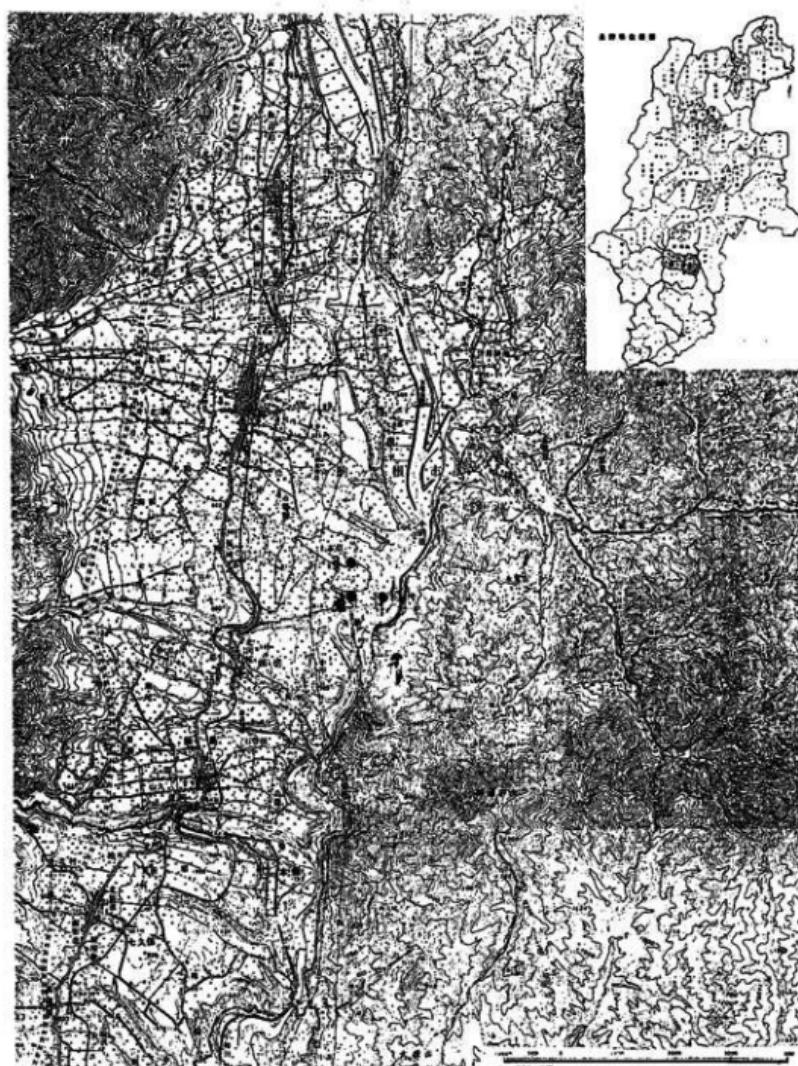
昭和28年に行った赤穂地区の遺跡の分布調査によると、遺跡数77か所、遺物出土地点230か所に及んでいる。近年分布調査が進むにつれて遺跡数も増加する傾向にある。

赤穂地区における遺跡の分布状態をみると、大部分が東流する小河川に沿ってある。

中でも先に述べた上穂沢川沿岸は大遺跡群を形成している。山麓からみると中山原・春日・北方・四分一・八幡原・大城林・羽場下・舟山・如来寺・荒神沢・小平・中通り上・中通り下・丸山北・丸山南などがある。また孫ヶ沢さらに中田切川との間を流れる辻沢川沿岸も非常に濃密な遺跡分布を示しており、大徳原・辻沢・辻沢丸山・馬住の原・水落し・蟹沢などがある。

以上本遺跡を取り巻く遺跡の分布状態をみてきたが、関係の深い遺跡について若干ふれてみたい。

2 丸山南遺跡 本遺跡の西方段丘上に位置し、発掘調査は本調査の一年後の昭和51年に実施した。現在遺物整理中であるが、縄文時代中期後葉の大集落址で、53軒の堅穴住居址を確認している。遺跡は東西200m・南北50~70mの大規模なもので、縄文時代集落研究上



1 ……南原遺跡    2 ……丸山南遺跡    3 ……丸山北遺跡

第1図 南原遺跡位置図 (  $S = \frac{1}{100,000}$  )



第2図 遺跡の地形図 ( $S = \frac{1}{3,000}$ )



- |         |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1 南原遺跡  | 2 丸山南遺跡 | 3 丸山北遺跡 | 4 中通下遺跡 | 5 中通上遺跡 |
| 6 尾崎遺跡  | 7 荒神沢遺跡 | 8 如来寺遺跡 | 9 舟山遺跡  | 10 小平遺跡 |
| 11 水落遺跡 | 12 振沢遺跡 |         |         |         |

第3図 付近の遺跡分布図

貴重な遺跡である。

- 3 丸山北遺跡 昭和28年の分布調査において遺物の散布がみられ丸山南遺跡とあわせて発掘調査を行ったが、開田による破壊が進んでおり、若干の遺物をみたのみで遺構は検出できなかった。
- 4 中通下遺跡 上締沢川の左岸、川にはさまれた所にあり、道路改修中に発見された遺跡である。詳しい出土状態はわからないが、平安時代後半の遺物を多く出土している。灰

- 軸の双耳壺は優品で猿投のものである。他に須恵器の瓶や土師器がある。付近一帯広い範囲にわたって遺跡があると思われ赤穂地区の歴史解明には欠かせない遺跡である。
- 7 荒神沢遺跡 上穂沢川左岸段丘上と低位段丘面上とにまたがる。上段は縄文時代中期の大遺跡で、下段は縄文時代晚期水式の土器を出土する良好な遺跡である。また付近には破壊されたが丸塚古墳があった。
- 8 如来寺遺跡 荒神沢遺跡の対岸上穂沢川の低位段丘面上に所在する。縄文時代晚期の上伊那における標識遺跡として有名である。
- 9 舟山遺跡 如来寺遺跡の西丘陵上に位置する。各時代にまたがる複合遺跡であるが、とりわけ縄文時代早期の条痕文系土器を出土したことで有名である。検出された小堅穴群の性格は今なおはっきりしていない。
- 11 水落し遺跡 辻沢川の流末低位段丘上にある。縄文時代中期加曾利E式・晚期の土器片が採集されている。
- 12 蟹沢遺跡 水落し遺跡の東方500mの地点で中田切川の低位段丘面にあるが、遺跡はそう広くはない。縄文時代晚期から弥生時代初頭にかけての条痕文系土器が多く発見されている。

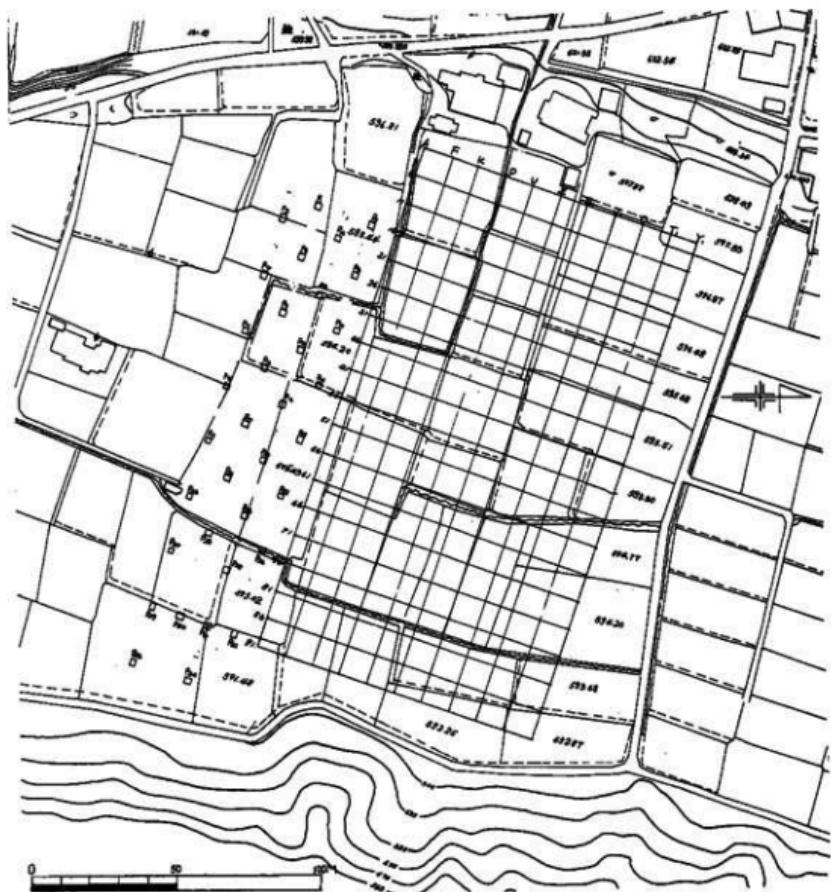
## 第Ⅱ章 発掘調査

### 第1節 調査概要

当遺跡は昭和28年赤穂地区の分布調査のおり、水田の土手から遺物を探集したことで初めて確認されたものである。その当時とまったく様相は変わっていない。広い場所の一箇所からの遺物採集のため発掘地点を決めるのに困ったが、工事区域の西南を基点としてほぼ南北にA B C D E……、東西に1 2 3 4 5……と2mグリットを設定して、最初は遺跡の範囲確認の意味で西から東へと掘り進め、遺構確認をまつて全面発掘へと切り換える方法をとった。

確認された遺構は、縄文時代中期の住居址9基・特殊遺構1基・土塙6基である。これらは20×25mの範囲内にある。周囲は1m四方のピットを設定して広範囲にわたって試掘を行ったが遺物はほとんどみられず、集落はほぼ完全な形と思われる。

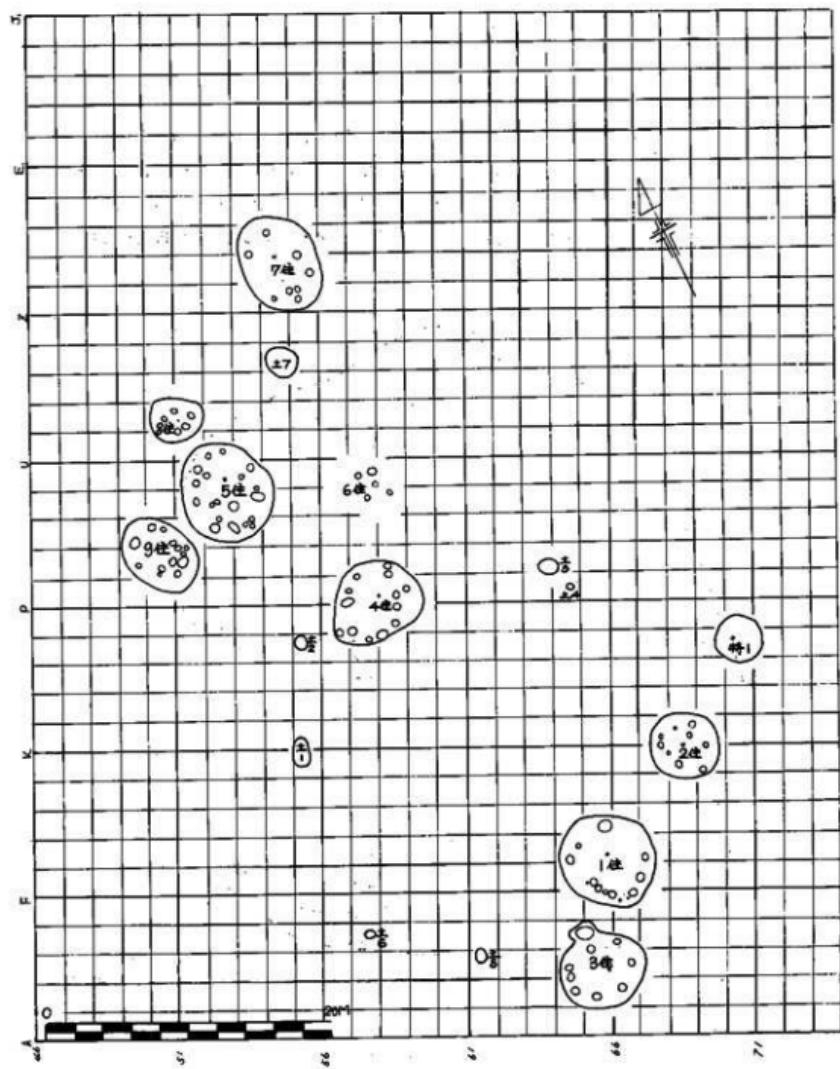
遺跡の層位関係は、水田の客土部分が20~25cmあり、つづいて地場・黒色土・暗褐色の漸移層・黄色軟質ローム層となるのが普通であるが、水田の西側と東側・北側と南側によって層位関係が異なっている。開田のさい削られた部分では、地場の下にハードロームがあるかと思えば、埋土部分では、埋土が厚い所では30cmある所もあり、つづいて黒色土といった複雑な様相をみせている。



第4図 遺跡グリット図 ( $S = \frac{1}{2,000}$ )

水田は客土より下には耕作による破壊がみられず、また埋土部分においては旧地形がそのまま残る状態となり非常に良好な保存状態を示している。

住居内における遺物の取り扱い区分は、床面より10cmほどを基準として床面と覆土とにわけてある。

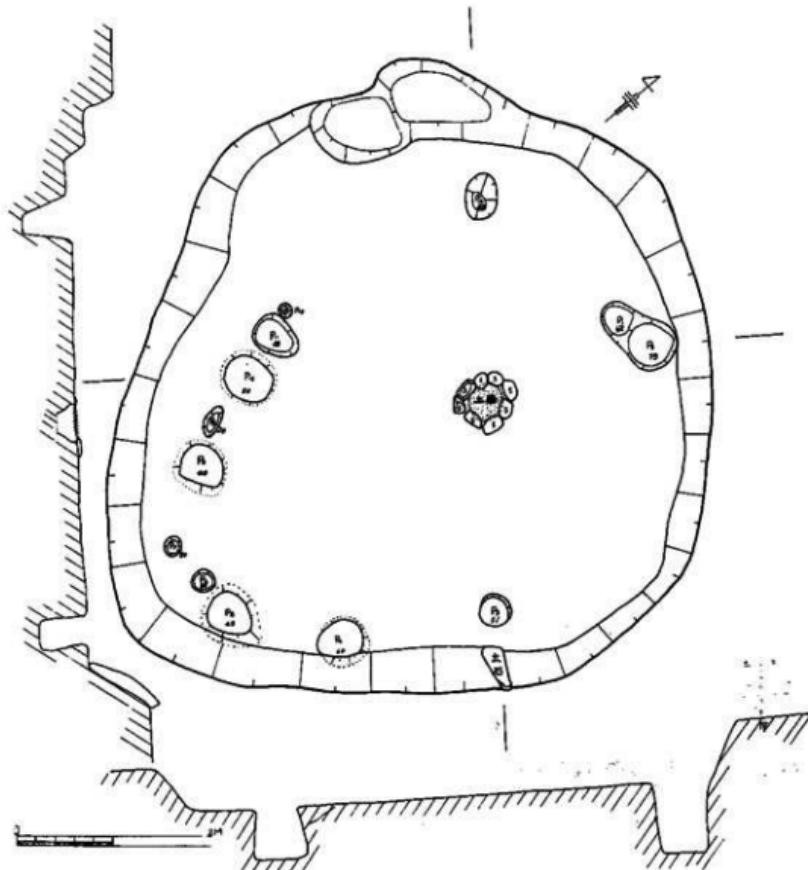


第5図 遺構全体図 ( $S = \frac{1}{400}$ )

## 第2節 造構と遺物

### 1 第1号住居址（第6～11図、図版3～6）

造構（第6図、図版3～5） 本住居址のプランは隅の丸い台形を呈し  $6 \times 6$  m 短い所で  $4.5$  m を測る。壁は北東部は垂直に近いが他のややゆるやかで壁高は60cm前後である。床面はロームを固くつきかめてあり、平坦で良好である。主柱穴は  $P_1$  ( $P_2$ )、 $P_3$  と南側部分を含めて6本と思われるが南側は確定しない。 $P_1$ 、 $P_2$ 、 $P_{10}$ 、 $P_{11}$  などからすると、柱の移動も考えら



第6図 第1号住居址実測図 (  $S = \frac{1}{400}$  )

れるが他にはそれを積極的に裏付けるものはない。 $P_4$ ・ $P_7$ ・ $P_9$ ・ $P_{12}$ は支柱穴であろう。 $P_4$ ・ $P_5$ ・ $P_8$ ・ $P_{10}$ は袋状ビットである。

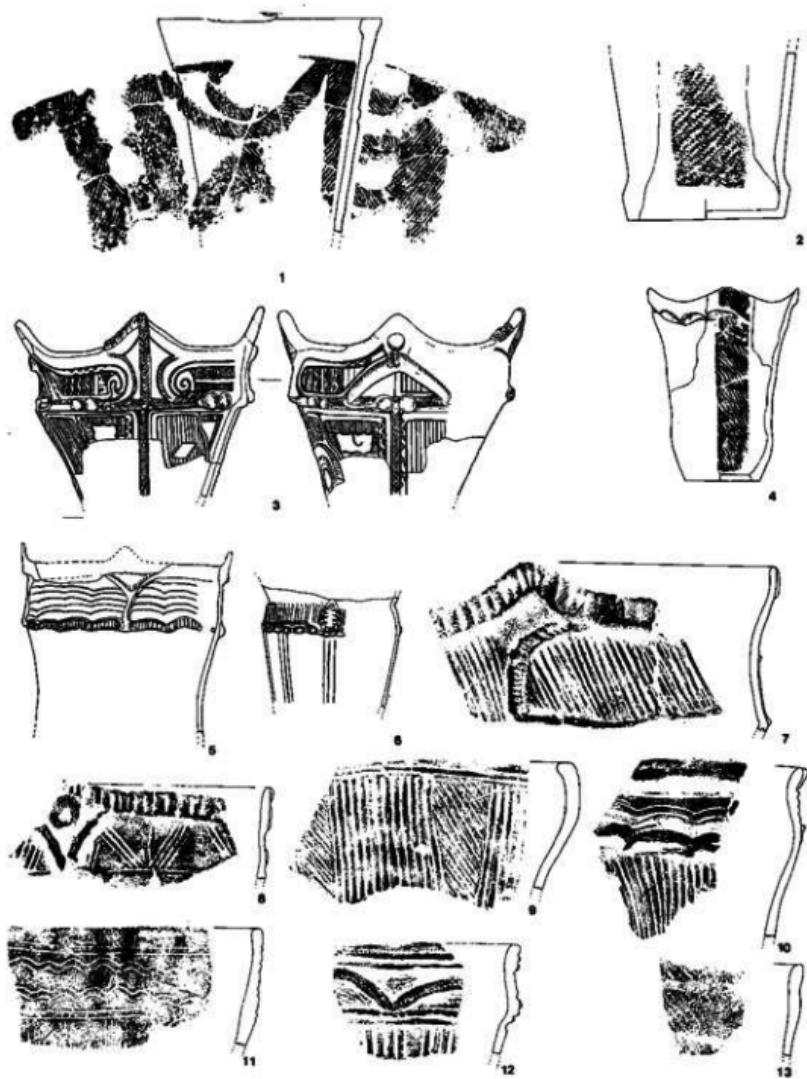
$P_1$ の西の壁には二段のテラスがみられる。床面は非常に軟弱で出入口部の施設を考えるには問題がある。 $P_3$ の東の壁に寄りかかった状態で立石がみられる。花崗岩の自然石で、長さ80cm、幅15cm前後、厚さ15cmで断面三角形の石柱である。住居址の南東部に位置する。

炉は住居址中央北東寄りにあり、8個の自然石からなり60×55cmのはば円形で、内部には胴下半部が抜かれた深鉢が埋設されていた。(第9図-33、図版4・5)

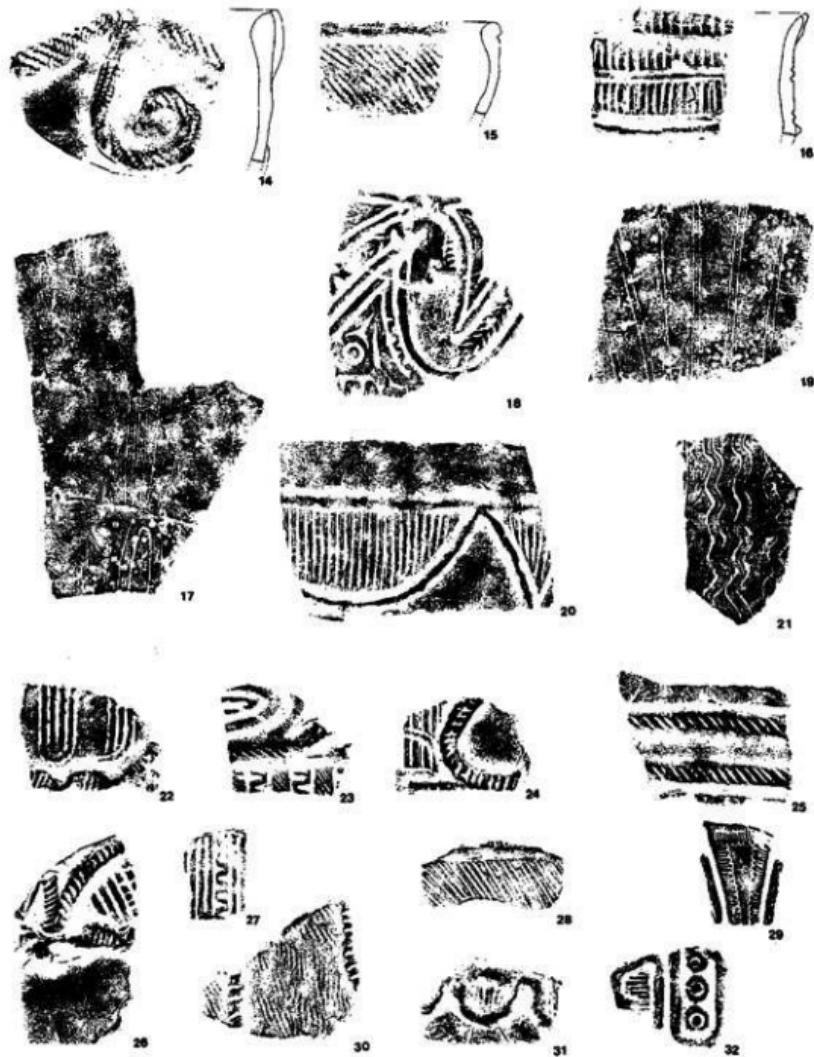
遺物は非常に多く南西部壁ぎわからなだれ込むような状態で覆土から床面まで層をなしており、発掘の時点で器形のわかるものもみられた。石器は覆土にも多くみられ、全体に散在してみられた。

遺物(第7~11図、図版6) 遺物は先に述べたように非常に多い。土器は出土状態からして、層位関係をみると難しい。覆土出土土器と床面出土土器との間にはほとんど形式差がみられない。総じて藤内I式に比定されるものである。覆土出土(第7・8図)のものでは、深鉢が一般的である。浅鉢は3・15である。1は磨り消し繩文で抽象文を描く。把手の痕が一箇所認められる。3は四つの波状を持ち、その口唇内の二箇所に孔がみとめられる。内部は隆帯と平行沈線による区角文である。4は小形深鉢で胴上半部より上はほとんどない。口唇下部に指圧痕をめぐらし、器面全体を繩文で埋める。5は口縁部はほとんど、胴部は半分ほどしかない。山形状突起を四つ持つかは不明である。頸部に隆帯がめぐらし指圧痕とさらに爪形文がほどこされる。口縁部は頸部から伸びるY字文の間を五条の波状沈線が埋める。10も同種である。7・9は口縁部を平行沈線で描くもので16も同様である。5・7・9・10・16は古い様相もみられるが飯島町山溝遺跡においても同様の伴出をみせている。6は頸部のくびれる小形深鉢で三分の一ほどしかなく図上復元である。胴上部に指圧痕をもつ隆帯をめぐらし、細い平行沈線が継走する。平出III類A系統の土器である。これらに含まれるものには8・11・17・19があり、概して薄手である。

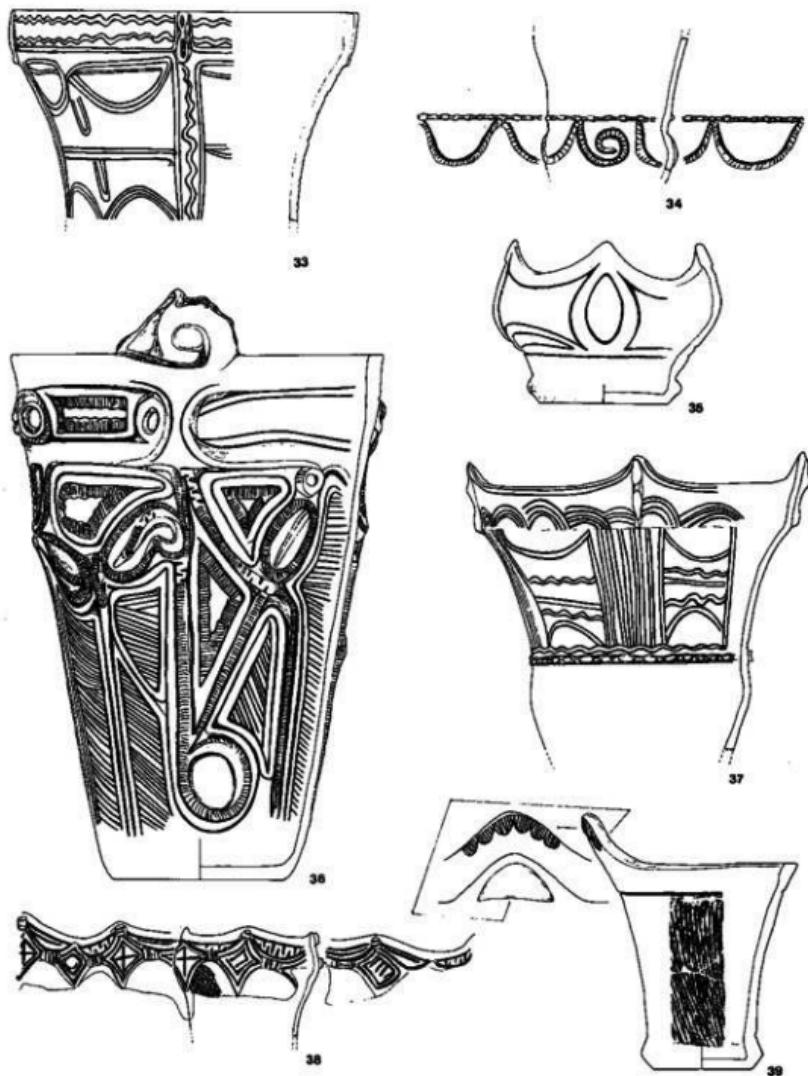
第9~11図は床面出土のものである。33は炉内埋設土器で胴下半部より下が抜かれている。全体に白っぽい感じをうけ焼きは普通である。器面は四区分され、平行沈線によって幾何学文が描かれる。同種のものとしては37がある。全体の半分ほどしかない。46・47・49~55も同じ平出III類A系統の土器である。34は胴部のみの小形深鉢で胴央部に指圧痕を持つ隆帯をめぐらしてその下に半円状にやはり刻みを持った隆帯が走る。その内側には連続字く字文がみられる。35は底部が安定したどっしりした感じの浅鉢で口縁部は半分ほどしかない。胎土はち密で赤褐色ないし黒色に固く焼かれている。器内外面とも丹念にみがかれており研磨技法が知られる。36は大形の深鉢で全体の半分しかない。ヘビを表現した把手がみられ頸部は隆帯と平行沈線によって縦位の区角文が描かれる。内面は研磨されており、藤内期の優品である。38は四つの波状口縁を持つ小形深鉢である。文様は口縁部は隆帯と連続字く字文が幾何学文様を表出し、胴部は繩文で埋められる。新道式要素を持つ土器である。内面には炭化物が付着している。39は一波状を持つ小形深鉢で口縁部を一部を欠くのみではば完形である。波状部には横彫文がみられ



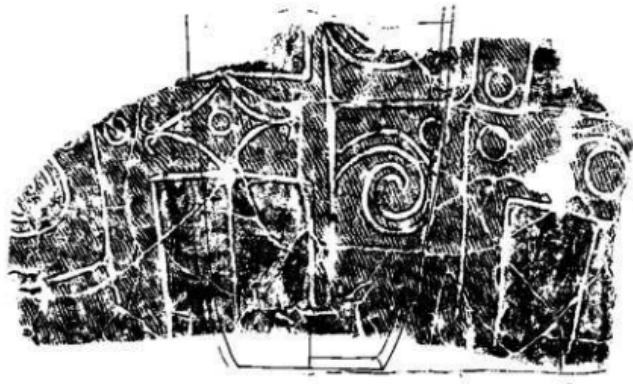
第7図 第1号住居址出土土器（1～6は $\frac{1}{6}$ 他は $\frac{1}{3}$ ）



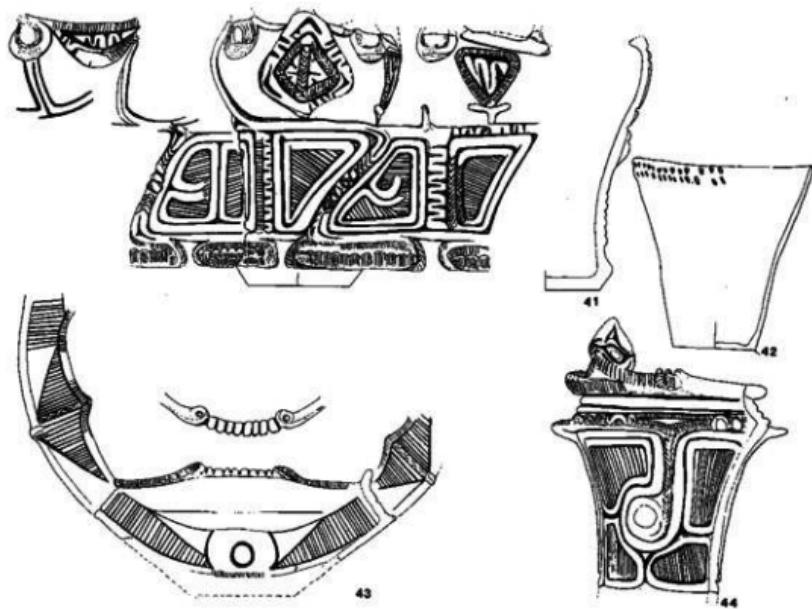
第8圖 第1号住居址覆土出土土器 (1/3)



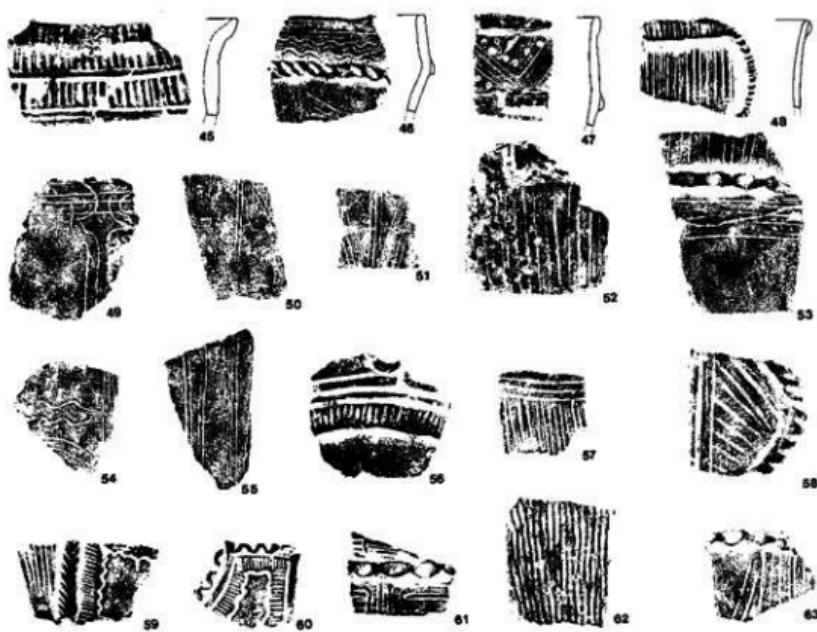
第9図 第1号住居址床面出土土器 ( $\frac{1}{6}$ )、33は炉内埋設土器



40



第10圖 第1号住居址床面出土土器 (1/6)

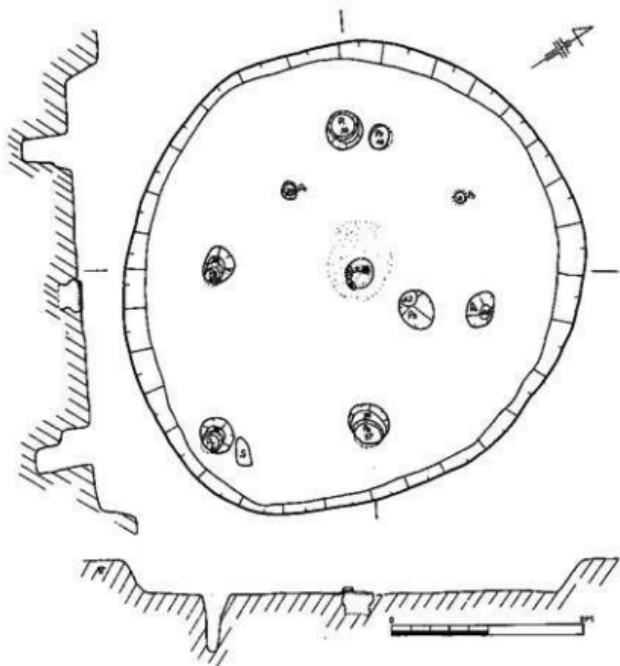


第11図 第1号住居址床面出土土器(1/3)

る。胴部は縦文で埋められる。明るい褐色に焼かれ器面はヘラ調整がみられる。内面と口縁部付近に炭化物が付着している。40は口縁部を欠く大形深鉢である。文様は磨り消し縦文で縦文の間は沈線が円形・渦巻・菱形に走る。焼き調整とも良好である。41は口唇を一部を欠くが完形の深鉢である。口縁は人の顔をモチーフしたのであろうか。胴部は縦位の区角文である。器面調整は良く固く黄褐色に焼かれている。42は口縁部を半分ほど欠く小形深鉢で薄手である。文様は口縁に沿って棒状工具による列点文が二条走るのみである。43は底部を欠く浅鉢である。文様は四区角され平行沈線の走る三角形文が主である。胎土はち密で一部黒いが全体に黄褐色をしている。内面にはヘラ削り調整がみられる。44は底部を欠く深鉢である。口唇部にはひねり上げた把手を持らくの字に外湾する頸部には四つのせり上がりがみられる。胴部は縦位の区角文で内部は深い沈線が埋める。

## 2 第2号住居址(第12~14図、図版7・8)

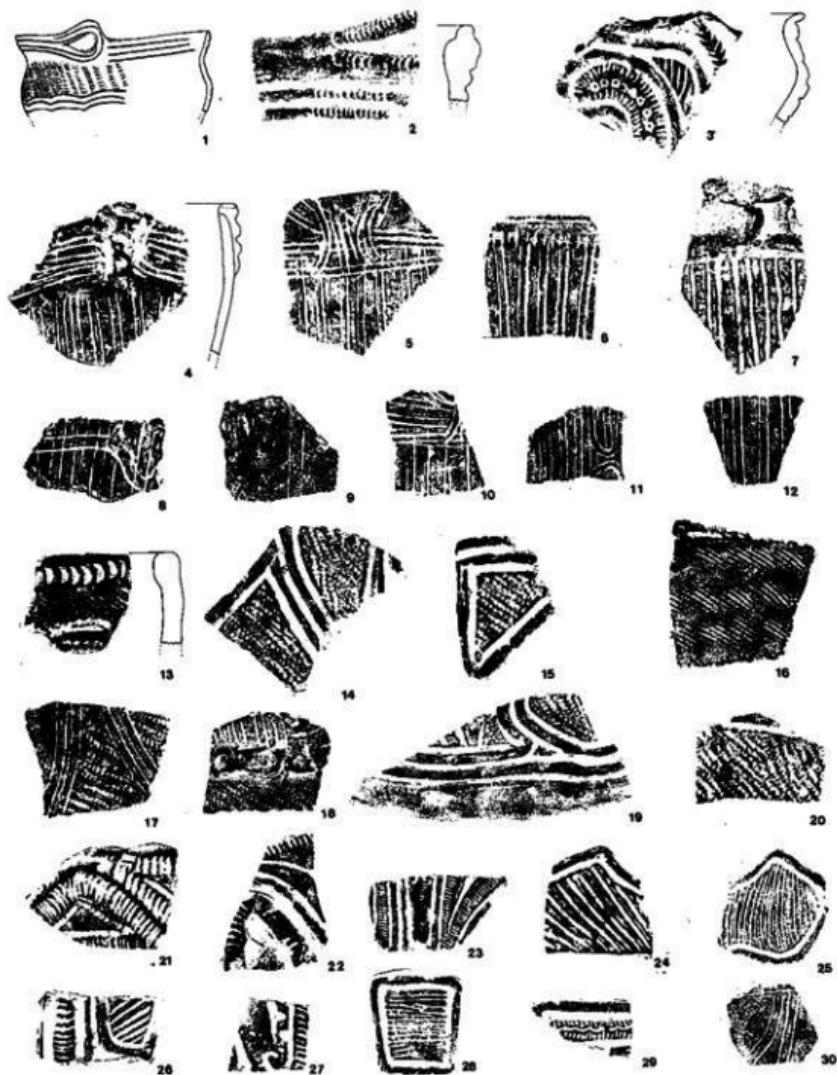
遺構(第12図、図版7) 本住居址は1号住居址の東4mほどの所に発見されたものである。プランはほぼ円形で南北4.8m、東西4.6mを測る。ローム階を掘り込んで壁は全体にややゆ



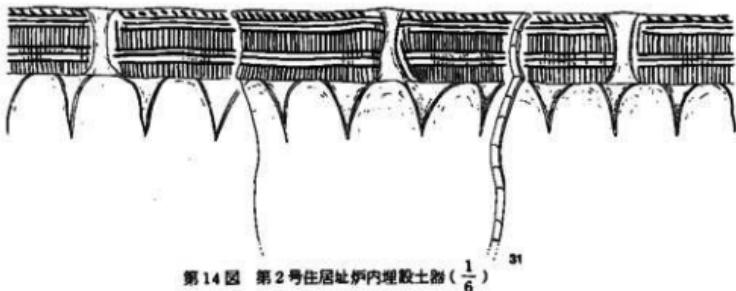
第12図 第2号住居址実測図 ( $S = \frac{1}{60}$ )

るやかである。壁高は35cm前後で壁面は堅く良好である。床面はロームを固くたたきしめてあり平坦である。主柱穴は五本と考えられるがP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>からすると柱の移動が十分うかがわれる。P<sub>3</sub>・P<sub>9</sub>は支柱穴であろう。炉は住居址のはば中央に位置し、そのまわりは幾分かくぼくなっている。小さな自然石を用いた円形の石組み炉で二つの炉石を残すのみで他は抜かれている。炉の内部には底部を抜かれた深鉢が埋設されており、炉石はその上に一部のるような形である。焼土は土器内及び炉の周囲にみられた（図版8）。

遺物（第13・14図、図版8） 土器は非常に少ない。覆土よりの出土はみられたが住居址に所属するものは炉に埋設されていたもの（31）だけである。1～30は覆土中のものであるが、器形を知り得るものは1のみである。1は小形の浅鉢で胴下半部以下を欠く。口縁部に三条の平行沈線を、胴尖部にやはり三条の波状文を走らせ、その間には連続押引文が縦走する。類例をあまり知らない。内面は黒っぽく外は白っぽく焼かれ、薄手である。第1号住居址同様平出III類A系統の土器がかなりみられる。4～12・30はそれである。15～20は縄文のあるもので14



第13図 第2号住居址復土出土土器 (1号 $\frac{1}{6}$  他は $\frac{1}{3}$ )



第14図 第2号住居址炉内埋設土器(1/6)

・15・19は同一固体で太い沈線によって区角される。新道的要素もみられるが総じて藤内I式に比定される。

31は炉内埋設土器で底部は抜かれている。そりぎみの口縁は三区分されフィールドトック様の薄い粘土板が貼り付けられ、内部は平行沈線によるはしご文が埋める。口唇直下には連続刺突文がめぐらされる。頸部から胴部にかけては、11個の薄い粘土板を貼り付けた連続円弧文が描かれる。口縁部黄褐色、胴部暗褐色を呈し、器面全体に指圧痕がみられる。焼きは固い。

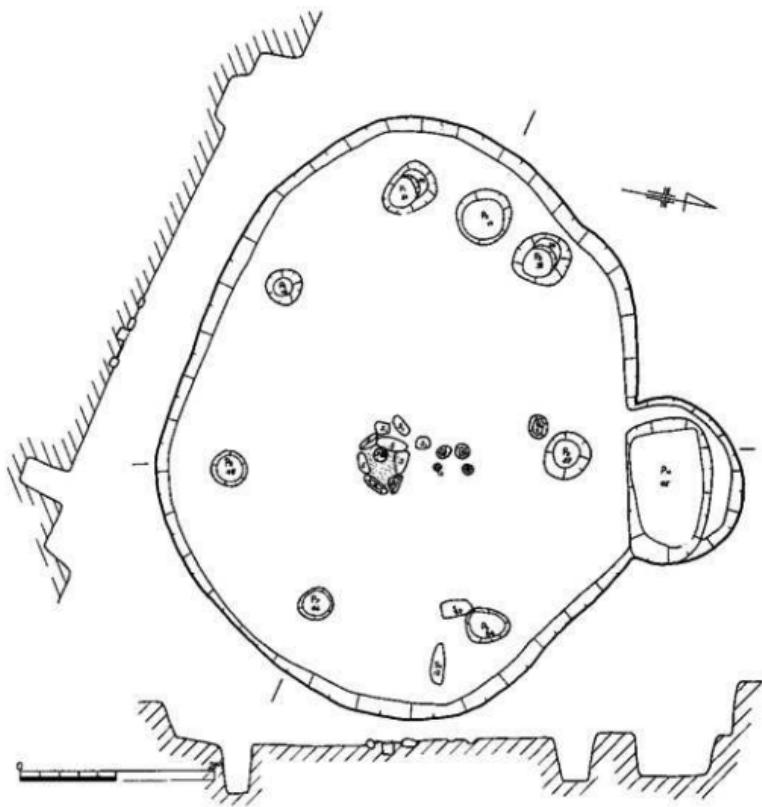
この土器の類例は知らない、口縁部区角文は新道的感じも受けるが、施文方法はそれよりも新しく藤内的である。頸部から胴部にかけての文様構式は平出III類Aの流れをくむと考えられる。時期的には藤内I式に比定でき得るであろう。

### 3 第3号住居址(第15~17図、図版9~11)

遺構(第15図、図版9) 第1号住居址の南西に隣接して発見され、ローム層を掘り込んでいる。プランは不整の楕円形で南北5m、東西6mを測る。壁は垂直に近く壁面は良好で壁高は北で50cm前後を測るが他では35cm前後である。床面はロームをたたきしめ平坦である。住居址北側に張り出した大きなピットがある。一つを新たに切った形で当住居址に伴う貯蔵穴なのか、土壠なのかは判然としない。主柱穴は6本である。炉の付近に4個の小ピットがみられる。P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>は内部が二段になっており、柱の建て直しの可能性もある。炉は石組み炉で住居址中央やや東寄りに位置する。プランはやや五角形ぎみで西寄りに小形深鉢の底部が埋設されていた(第17図-13、図版10)。

炉石はやや長めの石を使っている。炉の西に3個の自然石(S<sub>1</sub>~3)がありS<sub>2</sub>は平らで石皿的役目を持っていたと思われる。P<sub>6</sub>の南と東に大きな自然石がある。S<sub>4</sub>は砂岩で平べったい。使用痕や磨滅痕などははっきりしないが合石であろう。S<sub>5</sub>は細長い硬砂岩で床面に横たわっている。石質からして石器用原石として運ばれてきた可能性が強い。さらに第1号住居址例と同様立石とも考えられる。位置は住居址の東側にあたり出入口部における立石が住居址埋設の過程において倒れたものではなかろうか。

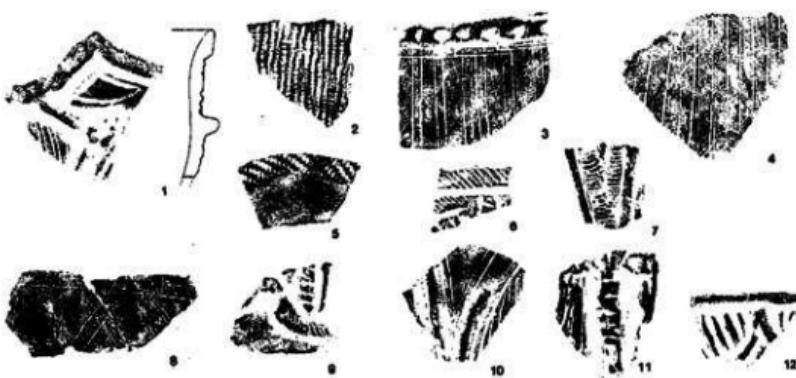
遺物(第16~17図、図版11) 土器は少ない。礫土出土のもの(第16図)はすべて小破片で



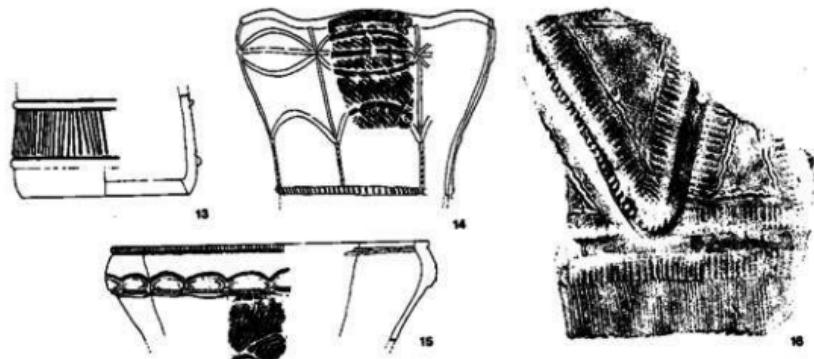
第15図 第3号住居址実測図 (S =  $\frac{1}{60}$ )

器形を知り得るものはない。1などは新道的要素もみられるが絶じて藤内I式に属するであろう。3・4・5は平出Ⅲ類A系統のものである。

床面より出土した土器(第17)は覆土よりさらに少い。13は炉内に埋設されていたもので、小形深鉢の底部で胴部は半分ほどしかない、二条の平行する隆帯をめぐらし、その間を平行の沈綬で埋めている。胎土中には砂を多く含み固く焼かれている。内面には研磨がみられ、炭化物の付着が認められる。14は炉のまわりから出土したもので深鉢で半分ほどしかない。口縁はゆるやかな波状を示す。器面全体は縄文を地文とし、波状の谷から垂れる縦帯で6分割し、そ



第16図 第3号住居址覆土出土土器 (1/3)

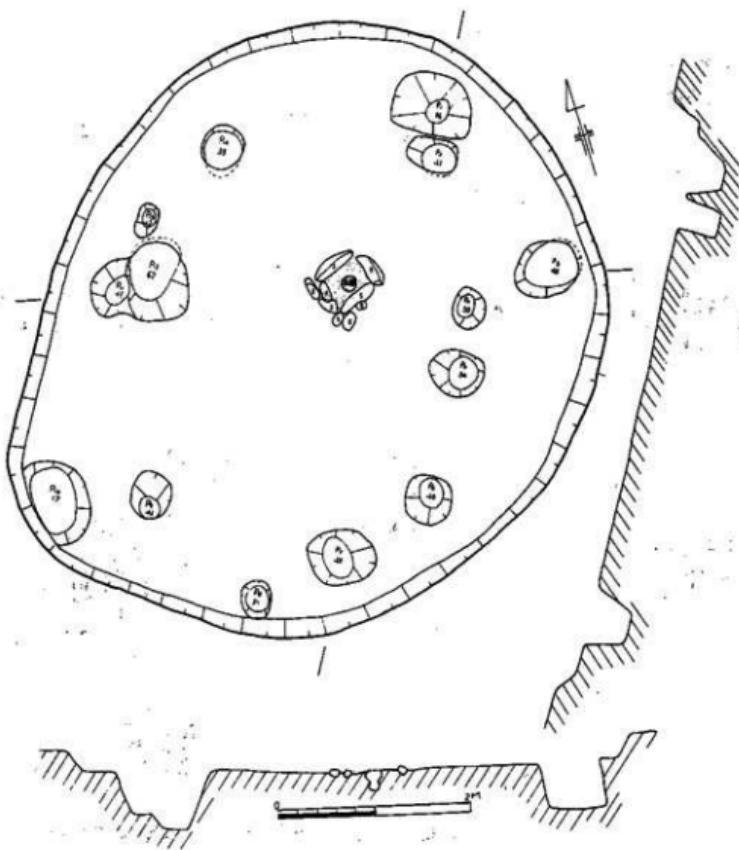


第17図 第3号住居址床面出土土器 (16は1/3 他は1/6, 13は炉内埋設土器)

の間はやはり縦帯の木の葉文が描かれる。薄手造りで胎土には砂粒・綿雲母を多く含む。器内面はざらざらした感じをうける。焼きは普通で褐色を呈している。類例をあまり知らないが、瀬戸内地方の船元式<sup>※2</sup>土器に比定でき得ると思われる。15は浅鉢で三分の一ほどの破片からの図上復元である。ゆるく内湾する口縁には指頭の圧痕による連続梢円文がみられ、胴部は綿文が埋めている。調整は良くヘラ削りの痕がみられる。黒褐色に固く焼かれている。16は深鉢の大形破片である。これらの時期は覆土と大差なく藤内I式に属するであろう。

#### 4 第4号住居址 (第18~20図、図版12~14)

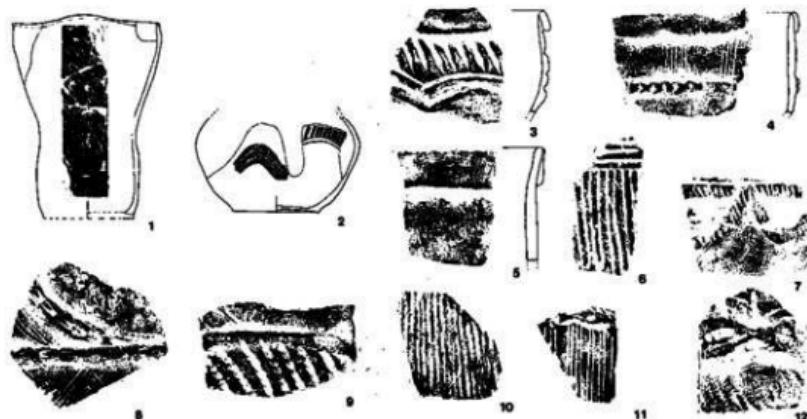
遺構 (第18図、図版12) 本住居址は第1号住居址の北9mほどの所に発見された。プランはほぼ梢円形を示し、南北5.6m東西6.3mを測る。壁はゆるやかでロームの壁面は良好であ



第18図 第4号住居址実測図 ( $S = \frac{1}{60}$ )

る。壁高は20cm前後で北はやや深く30cmほどある。床面は炉の付近で若干くぼむが全体平らで、かたくたかれている。炉は中央やや北東寄りに位置し、方形の石組み炉で三方は細長い石を使い西側はやや小ぶりの石で作ってある。炉の中央に小形の深鉢が埋設されていた(図版13)。焼土は薄く、土器の内部は灰で充満されていた。

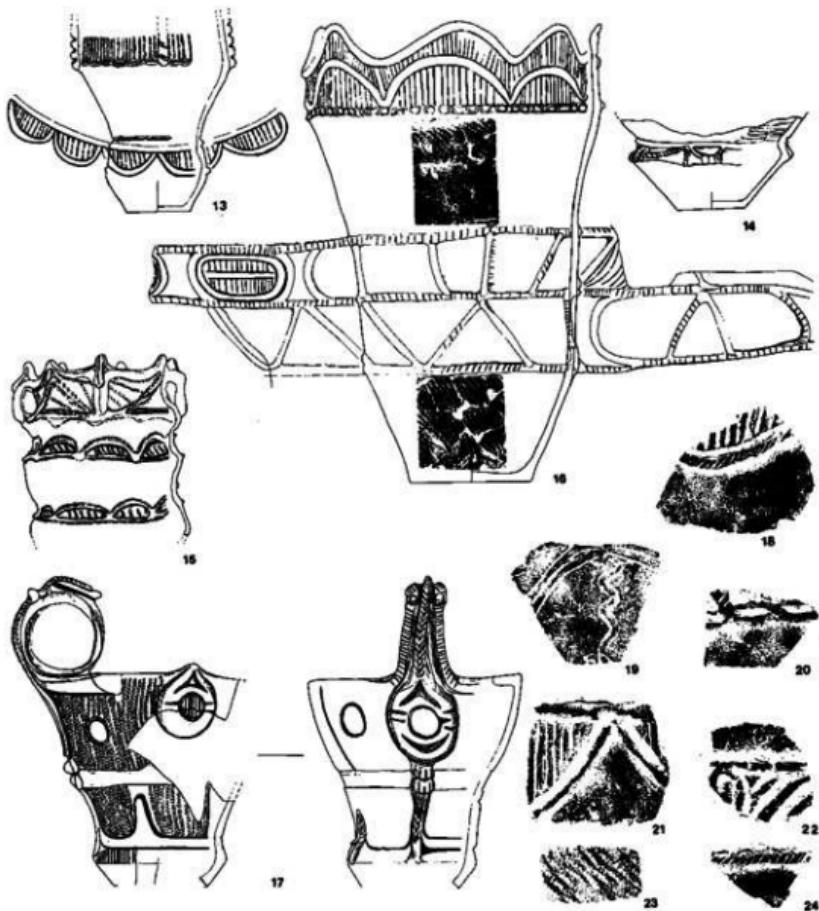
遺物(第19・20図、図版14) 第19図は覆土より出土のものである。器形を知り得るもののは少ない。1は波状口縁の小形深鉢で口縁は半分ほどしかなく、底部もない。器面全体を繩文が埋める。胎土には砂粒・網雲母が多く含み器面は凹凸がみられる。きわめて薄手で褐色に焼が



第19図 第4号住居址出土土器 (1,2は $\frac{1}{6}$ 他は $\frac{1}{3}$ )

れている。第3号住居址(第17図-14)のものに似ている。内器面底部近くに炭化物の付着がみられる。2は胴部が三分の一ほどしかなく図上復元である。小形の壺形土器と思われる。連続するく字押し引き文を平行に走らせて器面を飾っている。1同様薄手で胎土には長石・砂粒が多く含み、白っぽい焼きをみせている。器外面に炭化物の付着がみられる。平出II類A系統のものとしては4・8・11がある。

床面出土のもの(第20図)には完形に近いものが多い。13は炉内埋設土器で小形の深鉢である。口縁に刻みを持った紐帯を懸垂させ、その間は平行する連続刺突文を縦位にそして指頭圧痕文が懸垂する紐帯を結んで口縁に平行して走る。胴下半部には五つの櫛形文がみられる。口縁部文様や櫛形文にみられる連続刺突文技術は路沢・新道・藤内式に盛行するが、伊那谷南部においては井戸尻・曾利期になっても残存される傾向がある。<sup>※3</sup> 16は大形の深鉢ではほぼ完形である。文様は口縁部と胴央部に施され、他は縄文で埋められる。胴央部文様は粘土縁によって、横円文・三角文が描かれる。14は小形の浅鉢で口縁部を欠く。強くはった胴は頸部でつばまり口縁は強く外へ張る。文様は頸部に粘土縁によって描かれる。口縁部器内外面はヘラ削りの痕が残る。そのわりに胴・底部の調整はあまり良くない。15は4個の耳状把手を持ちその間はそり立った突起を配してまさに冠を思わせる。胴部は二段のくびれ部がみられ、完形ではないのがおしまれる。口縁部は連続く字文が三角状に施され、胴のくびれ部には櫛形文様が描かれる。器面は凹凸が激しいが内面には横なぐりの調整がみられ、外面は研磨されている。きわめて薄手で赤褐色に固く焼かれている。器内面と口縁部に炭化物が付着している。17は環状

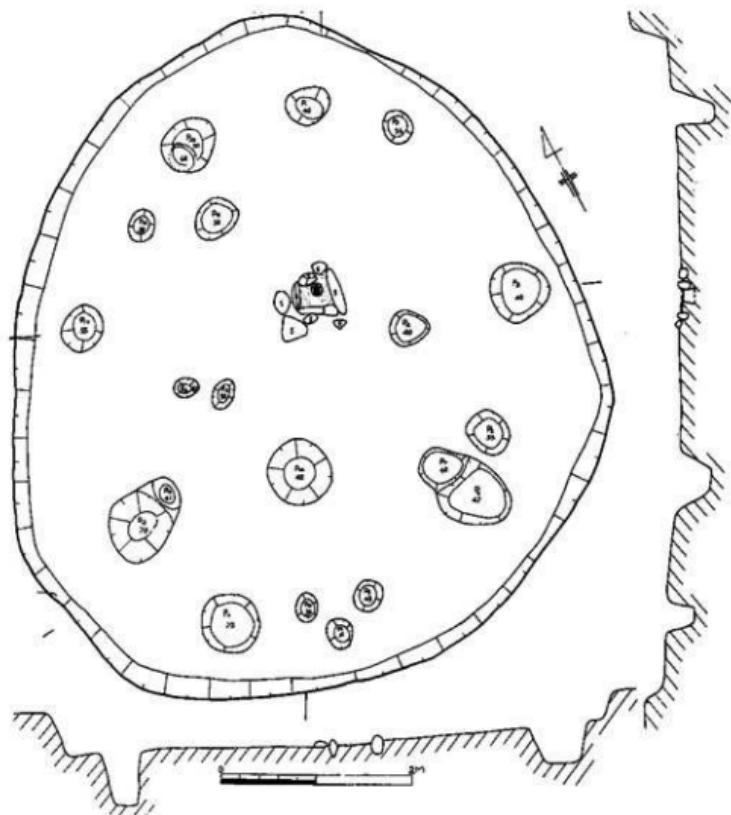


第20図 第4号住居床面出土土器(13~17は $\frac{1}{6}$ 他は $\frac{1}{3}$ ・13は炉内埋設土器)

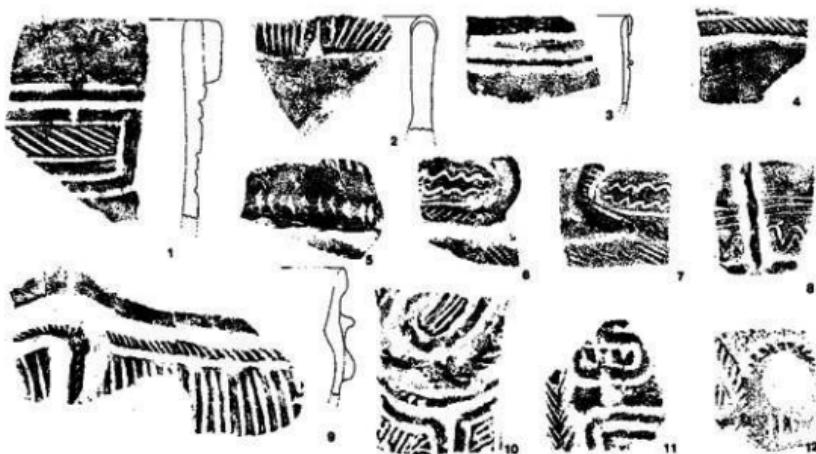
の把手を持つ深鉢で口縁を三分の一ほどと底部を欠く。把手にはヘビの頭を思わせる装飾がみられる。その下には人面のモチーフが配され、胴部は磨り消し繩文で埋められる。さてこれらの土器の時期であるが、施文技術は新道・藤内の要素がみられるが、柳形文の発達・口縁部と胴尖部への文様の集約からすると井戸尻Ⅱ式に比定でき得るであろう。

##### 5 第5号住居址（第21～24図、図版15～18）

遺構（第21図、図版15） 本住居址は第4号住居址より7mほど北に発見されたものである。プランは東が張った梢円形で南北6.7m、東西6.2mを測る。壁は垂直ぎみで南はややゆるやかである。ロームの壁面は良好である。壁高は西が高く45cm、南・東では低くなる。床面はロー



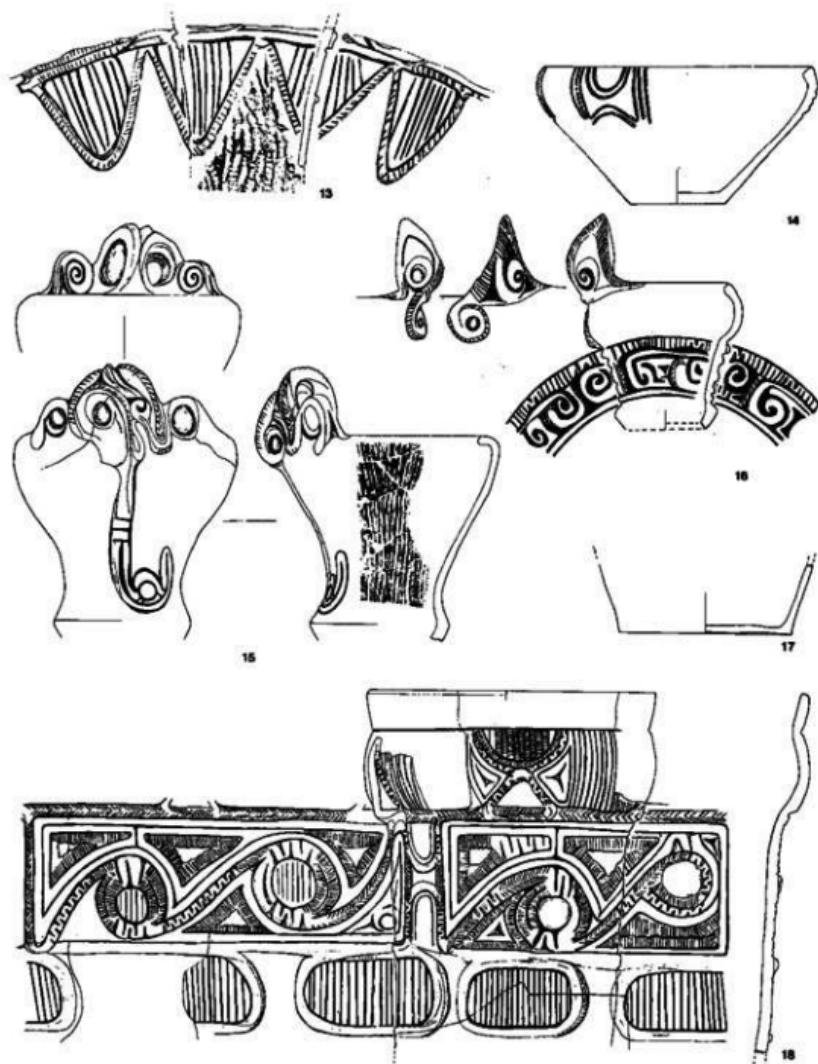
ムが固くたたきしめられ、平坦である。ピットは数多くみられ主柱穴はさだかでないが、P<sub>3</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>6</sub>(P<sub>7</sub>)・P<sub>12</sub>(P<sub>14</sub>)・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>の6本であろう。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>10</sub>からみると柱の移動がうかがわれ、炉も一部二重の所もあり住居址の拡張による建て直しが十分考えられる。炉は住居址中央やや北寄りに位置し、くずれてはいるが、方形の石組み炉である。三方に細長い石を用い一方は小ぶりの石2個で作ってあり第4号住居址と同手法である。炉の中央に胴部のみの深鉢が逆さに埋設されていた。焼土は薄くみられた(図版16・17)。土器の出土状態は炉の南側につぶれた形で床面より2~3cmういて発見されている(図版16)。第23図-16の小形深鉢はそのままの形で発見されている。



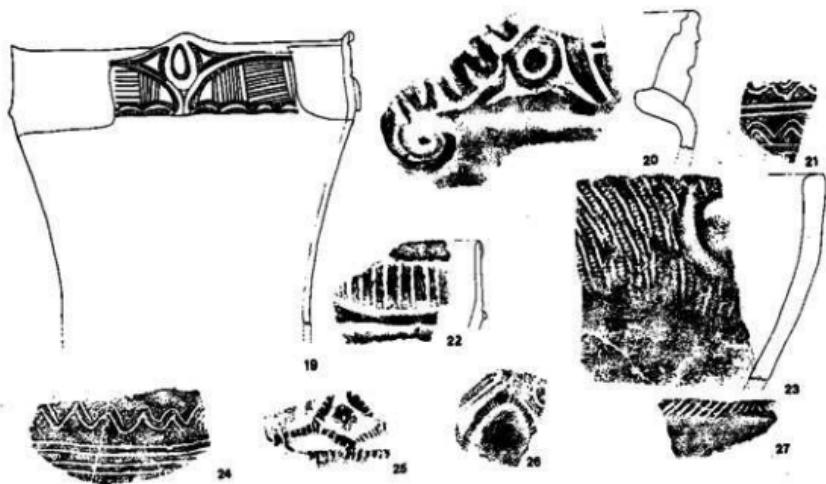
第22図 第5号住居址覆土出土土器(1/3)

遺物(第22~24図、図版18) 覆土よりの出土土器は少ない。全体に厚手のものが多く、藤内要素を持つ。8は平出Ⅲ類Aに属するものである。

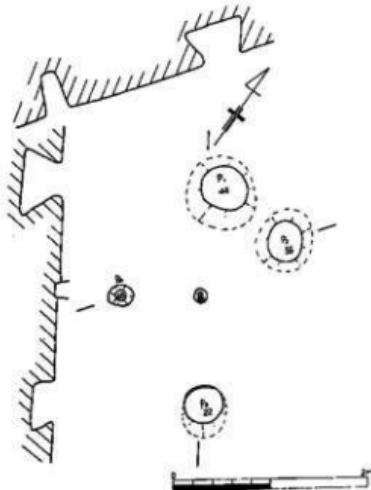
床面からは完形に近いものが多くみられる。(第23・24図)。13は炉に埋設されていたものである。全体を知り得ないが、刻みを持つ縁帯の三角文を配し、内部は太い沈線、外は縦文で埋める。14は若干口縁部を欠く浅鉢である。口縁はわずか内湾する。文様は口縁部にみられ連続刺突文によって描かれる。平出Ⅲ類A的モチーフをみせる。15はミミズク状把手をもつ深鉢で口縁部・胴部は半分ほどと底部を欠く。把手から縦帯が懸垂し、器面は縦文でおおわれる。16は底部を欠く小形深鉢である。口縁部にはひねり上げた把手をもち、文様は胴部にのみみられる。頭部にせり上がり状の突起をもたせた隆帯をつけその下部には、ワラビ手文が半肉彫で描かれる。内器面底部付近に炭化物の付着がみとめられる。17は深鉢の底部である。18は大形の深鉢



第23図 第5号住居址床面出土土器 ( $\frac{1}{6}$ 、13は炉内埋設土器)



第24図 第5号住居址床面出土土器（19は $\frac{1}{6}$ 他は $\frac{1}{3}$ ）

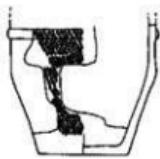


第25図 第6号住居址実測図（S =  $\frac{1}{60}$ ）

で、口縁部の一部と底部を欠く。文様は横位の区角文で三段の構成からなる。口頸部はX字状文をえその間は深い平行沈線がみられる。胴上半部は人体文によって二区分され、その間はワラビ手を基調とした区角文、胴下半部は平行沈線を持つ大きな楕円文が四個配される。19は大形深鉢で図上復元である。平出III類A系統の土器としては21・24がある。23は浅鉢の口縁で円形の磨り消し文がみられる。さてこれらの土器の時期であるが、16からすると井戸尻的要素がみられるが、藤内II式に属すると思われる。

#### 6 第6号住居址（第25・26図）

遺構（第25図） 第4号住居址の北に発見されたものである。埋設土器（第26図）を中心として4個のピットがみられただけで、焼土はまったくない。ところどころ床面は固い所もみられるが住居址の床面ではない。遺構検出中に漸位層に埋められ



第26図

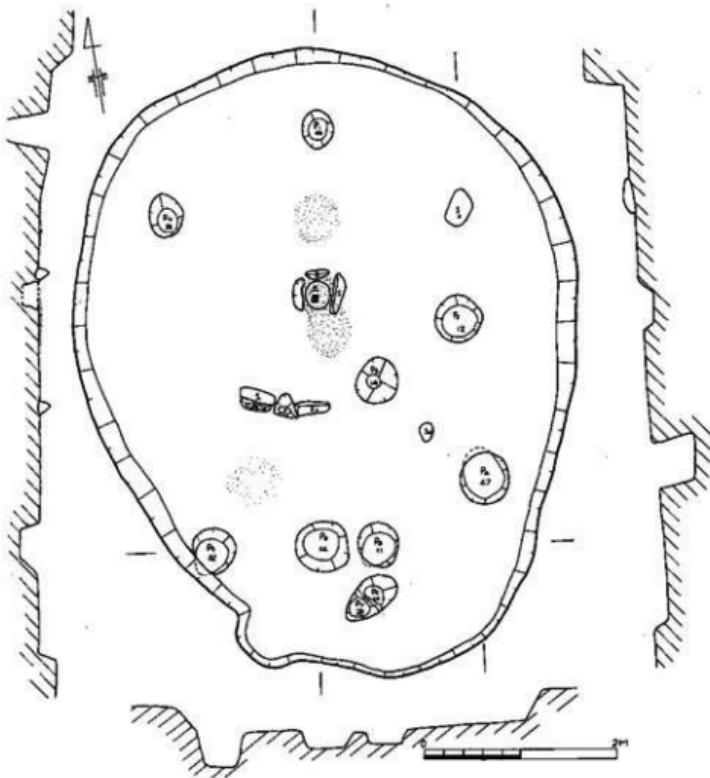
第6号住居址埋設出土器(1/6)

た土器を発見し、拡張した所ピットを確認したものである。焼土などみられないところから住居址というよりは何か特殊な造構と考える方が妥当であろう。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ は共に袋状ピットである。

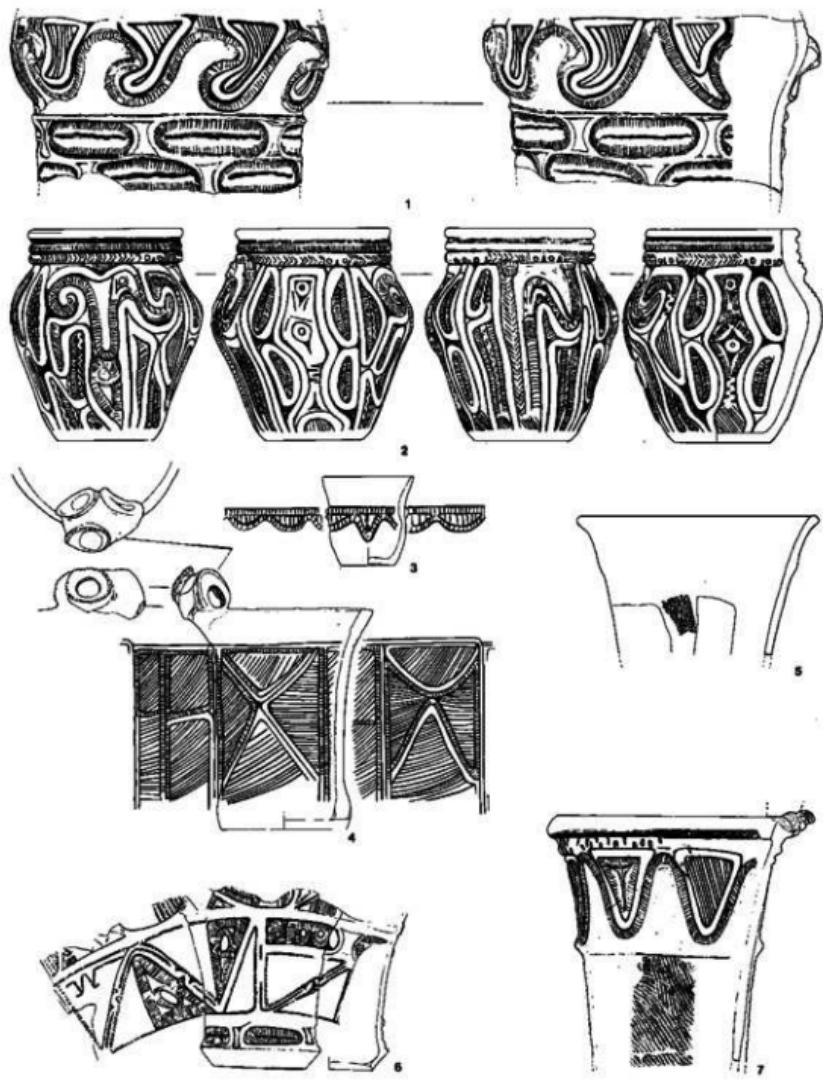
遺物(第26図) 小形の深鉢と思われる。胴部は半分ほどあったが非常にもろく、わずかに器形を知り得るのみである。紐帶を胴央にめぐらし、器面は繩文が施される。時期は不明である。他に出土土器はない。

### 7 第7号住居址(第27~29図、図版19~23)

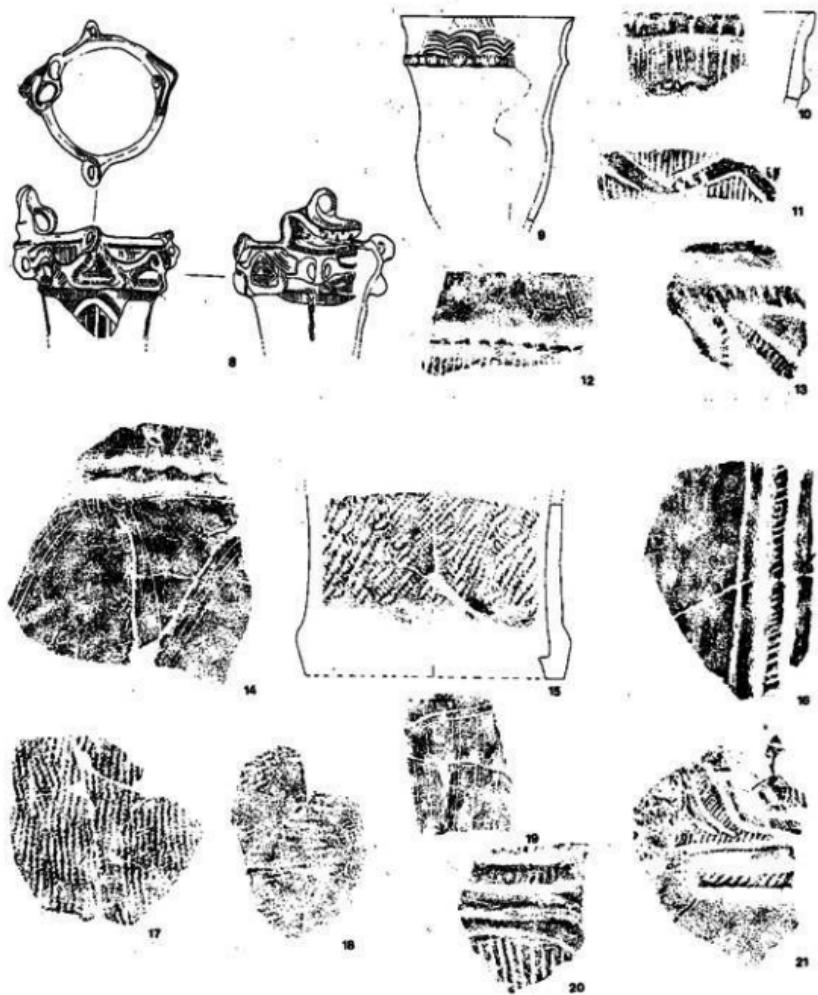
造構(第27図、図版20) 本住居址は第5号住居址の北東



第27図 第7号住居址実測図( $S = \frac{1}{60}$ )



第28図 第7号住居址床面出土土器 ( $\frac{1}{6}$ , 1は炉内埋設土器)

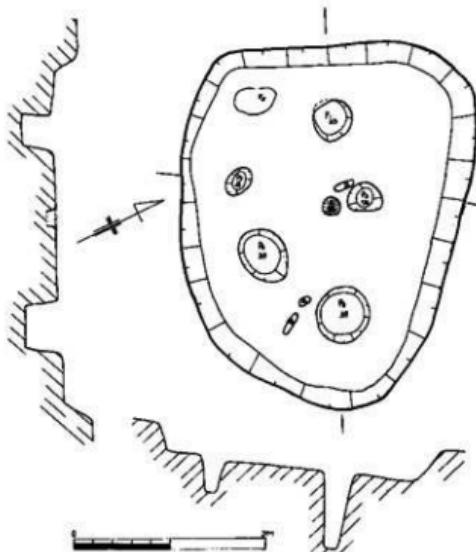


第29図 第7号住居址床面出土土器 (8,9は $\frac{1}{6}$ 他は $\frac{1}{3}$ )

10mほどに発見されたものである。プランは不整梢円で、南北6.5m、東西5.2mを測る。壁は全体にゆるやかで、ローム壁面は良好である。壁高は北で40cm、南に行くに従い低くなり15cm前後である。床面は固くたたかれ南へ傾斜している。主柱穴は4本と考えられる。炉は中央やや北寄りに位置し、コ字形の石組み炉で西側は抜かれている。炉内には口唇と胴下半を欠く大形深鉢が埋設されていた。(図版21・22)。焼土は薄く南側まで薄くみられる。またS<sub>1</sub>とP<sub>1</sub>の間、P<sub>1</sub>と炉との間に薄い焼土の堆積がみられる。P<sub>3</sub>の西(S<sub>1</sub>・S<sub>2</sub>)とP<sub>2</sub>の北(S<sub>3</sub>)、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>との間S<sub>4</sub>に石が床面上におかれている。S<sub>1</sub>は硬砂岩の原石、S<sub>2</sub>は花崗岩、S<sub>3</sub>は砂岩である。第3号住居址からも硬砂岩が出土しており、石器の加工が住居址内において行われた可能性を裏付けるものであろう。さらにその置かれた位置は住居址における間取りをも考えさせるものがある。覆土よりの土器の出土はみられず床面に集中している。しかもその状態は炉とS<sub>1</sub>・S<sub>2</sub>との間に横倒しの状態で床面に密着して発見されている(図版19)。第28図-2例のように器形がわかる状態で発見されており、本住居址に伴う一括資料である。

遺物(第28・29図、図版23) 先に述べたように土器は床面からの出土で完形に近いものが多い。1は炉内埋設土器の大形深鉢である。口唇部と胴下半部を欠くため全体の器形は知り得ない。内湾する口縁部は紐帶によって抽象文を描き内部は沈線を走らす。胴部は梢円文を二段に交互に配している。内部には連続爪形文がみられる。2は短頭の壺形土器である。横倒しで

発見された。口頭部は太い沈線によって段をもたせ、胴部は魚形文などの非常にマジカルな抽象文を配して4分割し、その間を梢円文などで埋める縦位区角文である。器面調整は非常に良好でヘラ削りがみられる。赤褐色を呈し焼きは固い。外面に部分的に炭化物が付着している。3は小形深鉢で上げ底である。文様は中帯文で梯形文が描かれている。4は小形の深鉢口縁部は五分の二ほどない。文様は縦位の区角文である。X字文・矩形文を配して内部は平行沈線で埋める。器面は凹凸が激しい。6は小形深鉢で口縁部を欠き胴部は四分の一ほどない。連続押し引き文を主とした縦位の区角文が胴部に描かれ、底部付近に

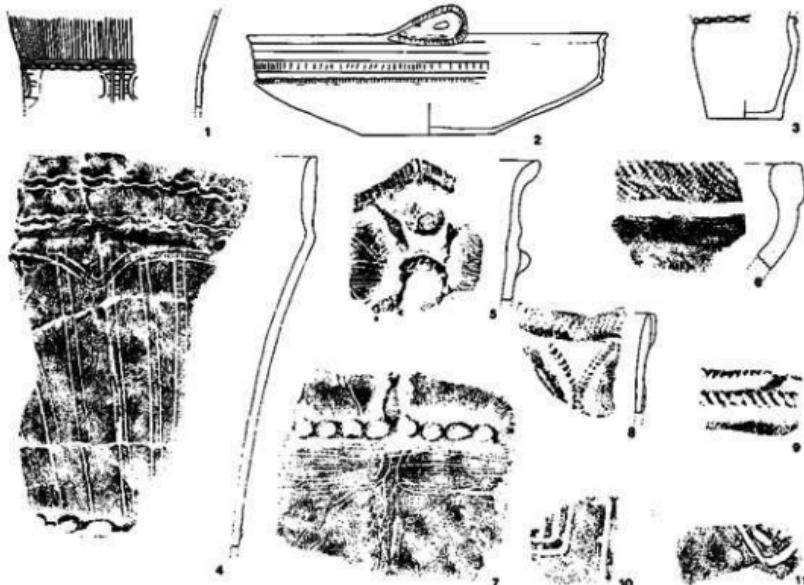


第30図 第8号住居址実測図(S=1/60)

は梢円文が配される。胎土には砂粒・長石を多く含み赤褐色を呈し、薄手に焼かれている。内面にはヘラ削りがみられる。7は深鉢で底部を欠く。把手の痕跡がみられる。縦文を磨り消した胴上半部には、隆帯によって三角文を描き、内部は平行沈線などで埋めている。8はミズク状の把手を持った小形深鉢で胴下半部を欠く。把手正面はヘビの抽象であろうか。口縁には耳状の飾りがみられる。9は図上復元である。頸部には指頭圧痕文を持った粘土紐をめぐらし口縁には連続円弧文を描く。胴部は無文である。14・19は平出Ⅲ類A系統のものである。3は文様構成からすると井戸尻であるが、出土状態からすると他と一括土器と考えられ問題を残す。総じて藤内1式であろう。

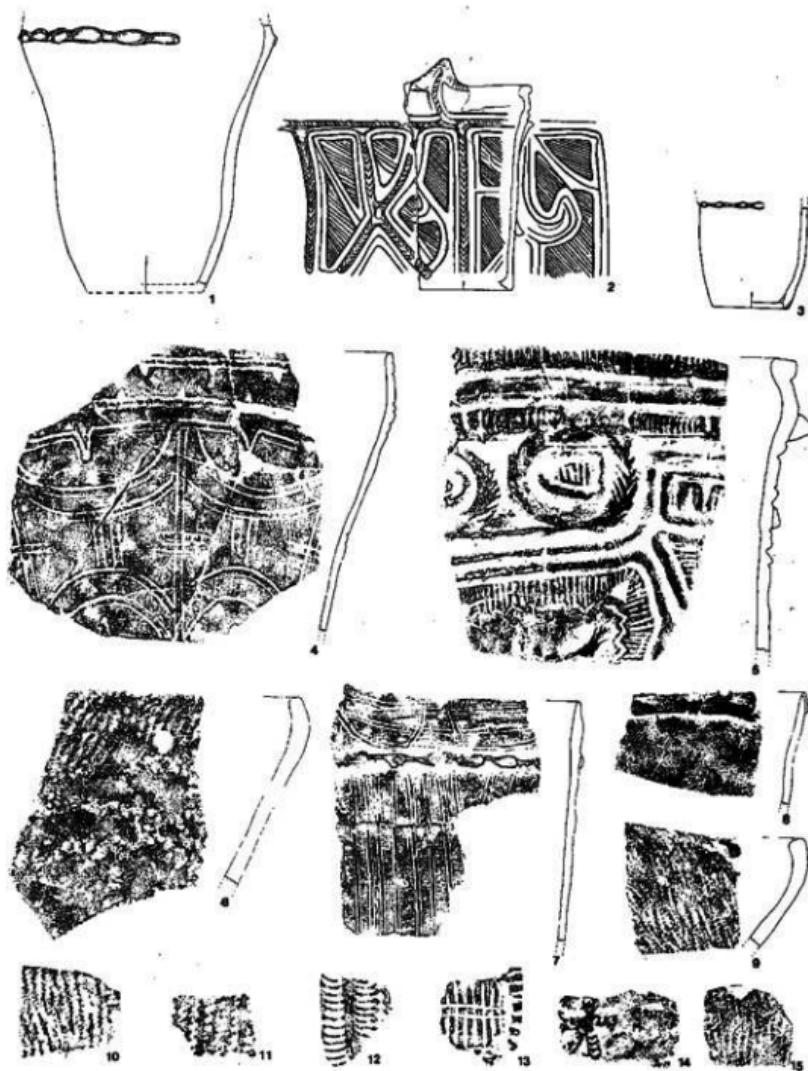
#### 8 第8号住居址（第30・31図、図版24）

遺構（第30図） 本住居址は第5号住居址の北に隣接して発見されたもので小さい。プランは不整梢円形で南北3m、東西3.7mを測る。壁はなだらかで壁高は30cmほどである。床面は固く平坦である。主柱穴は二本か四本かは定かでない。 $P_2$ は深いが炉に近寄りぎみで柱穴とは考えにくい。炉はほぼ中央に位置し、埋甕炉で炉石のあった形跡はみられない。床面上には四



第31図 第8号住居址床面出土土器（1～3は $\frac{1}{6}$ 他は $\frac{1}{3}$ 、1は炉内埋設、3は $P_4$ 内出土土器）

the first time in the history of the world, the  
whole of the human race has been gathered  
together in one place, and that is the  
present meeting of the World's Fair.  
The world is represented here by  
the United States, Great Britain,  
France, Germany, Italy, Spain,  
Portugal, Australia, New Zealand,  
South Africa, Canada, Mexico,  
Brazil, Argentina, Chile,  
Peru, Uruguay, Venezuela,  
Colombia, Ecuador, Costa Rica,  
Panama, Cuba, and the  
Philippines.



第33図 第9号住居址覆土出土土器（1～3は $\frac{1}{6}$ 他は $\frac{1}{3}$ ）

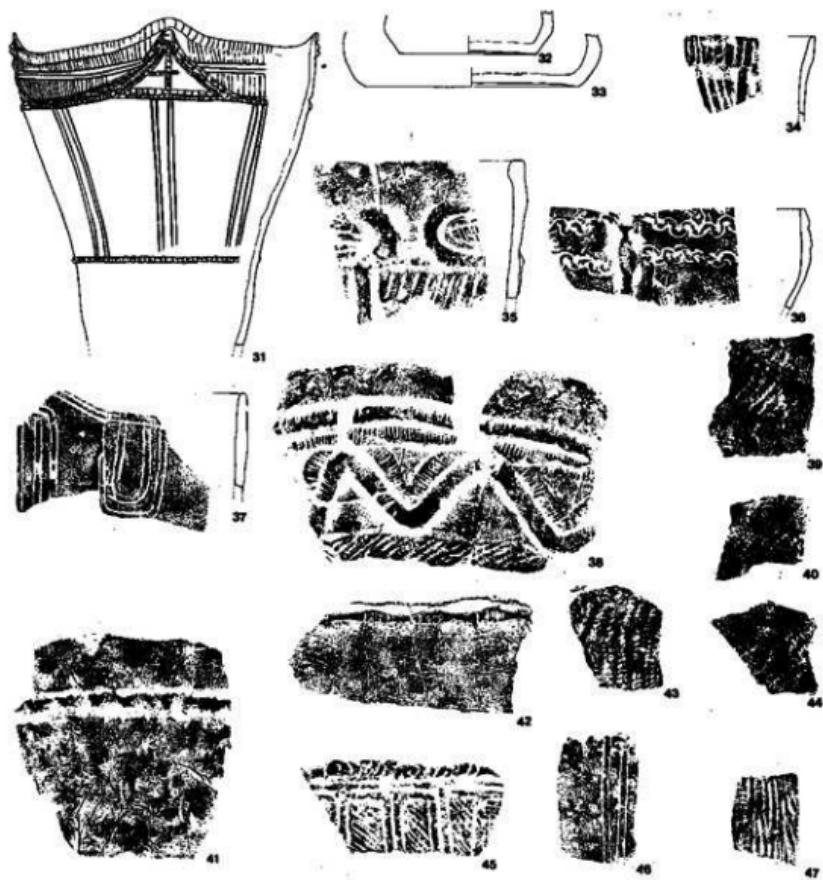


第34図 第9号住居址出土土器 ( $\frac{1}{3}$ )

### 9 第9号住居址 (第32~35図、図版25)

**遺構 (第32図、図版25)** 本住居址は第5住居址西に隣接して発見されたものである。プランは不整の楕円形で南北5.4m、東西4.4mを測る。壁はゆるやかでロームの壁面は良好である。壁高は北で高く50cm、南・東に行くに従い低くなり30cm前後である。床面は固くたたかれ、平坦である。主柱穴は6本と考えられる。炉は中央ほぼ北寄りに位置し、方形の石組み炉である。内部は若干くぼくなり焼土が10cmほど堆積している。 $P_1$ 、 $P_{14}$ は袋状ピットである。

**遺物 (第33~35図)** 出土土器は多く、出土状態は一括廃棄を示している。1は口縁を欠く大形深鉢である。頭部に連続指頭圧痕文を持つ粘土紐を横走させ、胴部は無文である。2は筒状の小形土器で口縁部を欠く。文様は縦位区角文である。3は小形の深鉢で口縁を欠く。頭部



第35図 第9号住居址床面出土土器（31～33は $\frac{1}{6}$ 、他は $\frac{1}{3}$ ）

には連続指頭圧痕文を持つ紐帶が横走する。4・7・18・29は平出Ⅲ類A系統に属する深鉢土器である。6は浅鉢である。藤内I式であろう。

第35図は床面よりの出土のものである。31は大形の深鉢土器で三分の一ほどない。文様は平行沈線によって描かれる。36・37・46とともに平出Ⅲ類Aに属する。時期は覆土同様藤内I式である。

## 10 特殊遺構（第36図）

第2号住居址の東に発見されたものである。ロームを掘り込んだ円形の堅穴内に焼土が確認されただけで、その他の施設は何もない。規模は径3.3mを測る。壁高は15cmほどで床面は平坦であるがたたきはみとめられない。焼土は中央北によって発見されている。2.5cmほどの円形の範囲にみられ、厚さは7cmほどである。遺構の性格は不明である。

当遺構に伴う土器は皆無で時期はわからない。

## 11 土 塚（第37・38図）

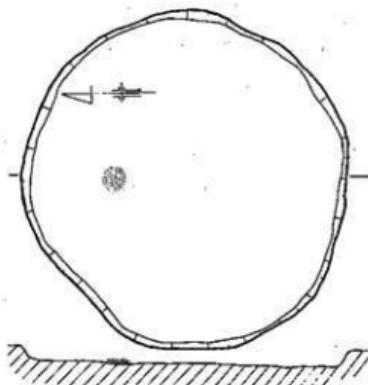
遺構（第37図） 土塚は全部で7基確認された。形態からすると浅いタライ状のもの、ドラム謫状のもの、すり鉢状のものとに分けることができる。

(1) 第1号土塚 第4号住居址の西7mほどの所に発見されたものである。プランは長椭円を呈し浅い。大きさは南北2m、東西1.2mを測る。底面は中央部がくぼく軟弱である。覆土より小形深鉢が出土している（第38図-1）。

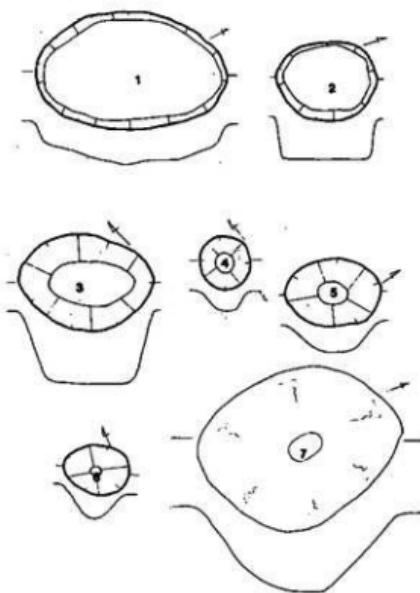
(2) 第2号土塚 第1号土塚の北、第4号住居址西に隣接して発見されたものである。プランは梢円形で南北1.1m、東西0.8mを測る。壁は垂直に近くタライ状である。第1号同様覆土より小形深鉢が出土している（第38図-2）。

(3) 第3号土塚 第4号住居址の東約8mの所に発見されたものである。プランは不整梢円形をしており、1.4×1.0mを測る。底面は平らでドラム謫状である。第1・2号同様深鉢が覆土より出土している（第38図-3）。

(4) 第4号土塚 第3号土塚のすぐ南に発見されたもので小さなものである。プランは円形で径0.5mを測る。壁はな



第36図 特殊遺構実測図 ( $S = \frac{1}{60}$ )



第37図 土塚実測図 ( $S = \frac{1}{60}$ )

だらかですり鉢状である。遺物はまったく出土していない。

(5) 第5号土壙 第3号住居址の北西5mの所に位置する。プランは楕円形で1.0×0.7mを測る。壁はだらかですり鉢状である。出土遺物はまったくない。

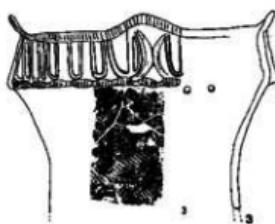
(6) 第6号土壙 当土壙は第5号土壙の北西6mの所に位置する。プランは楕円形で0.7×0.5mを測る。伴出土器はまったくない。

(7) 第7号土壙 第5号住居址と第7号住居址のはば中間に発見されたものである。プランは不整楕円で南北2.2m、東西1.6mを測る。すり鉢状で壁はだらかである。伴出遺物はまったくない。

遺物(第38図) 1は小形の深鉢で口縁部と底部を欠く。胸央部に縦帯を波状させ、その上部には沈線が縱走する。第1号土壙より出土したものである。2は第2号土壙より出土した小形の深鉢で口縁部を欠く。

1同様の文様構成である。3は第3号土壙より出土した大形の深鉢で胸下半部を欠く。口縁部はX字状の隆帯を施し、その間を平行沈線のU字形が埋める。胸部は繩文が施される。補修孔が2個みられる。

1・2は井戸尻II式、3は藤内式である。



第38図 土壙出土土器 (1/6)

\*1 長野県教育委員会 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡飯島町  
その3・駒ヶ根市内」昭和48年

\*2 倉敷考古館「里木貝塚」—倉敷考古館研究集報第7号—昭和46年

\*3 駒ヶ根市教育委員会 「大城林・北方I・II・湯原・射殿場・南原・横前新田・塩木・  
北原・富士山」—県営は場整備事業大田切地区(昭和47・48年度)埋蔵文化財緊急  
発掘調査報告書—昭和49年

長野県下伊那郡松川町教育委員会 「的場」—国道153号線改良工事松川町古町地区昭  
和47年度緊急発掘調査報告書—昭和48年

#### 参考文献(主なもの)

- 1 藤森栄一編「井戸尻」昭和40年
- 2 長野県教育委員会 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—駒ヶ根市その3」  
昭和50年
- 3 関谷市「関谷市史上巻」昭和48年
- 4 長崎元広「ハケ岳西南麓の構文中期集落における共同祭式のありかたとその意義」—信  
濃第25巻4・5号—昭和48年

### 第3節 石 器

第1号住居址を発掘中覆土や床面より硬砂岩を主とした剝片が多く発見された。そこで出土する剝片・礫はすべて採集を試みた。その結果は後に述べるように石器の製作を裏付ける貴重な資料を発見することができた。

この時代における石器製作については、まだまだ十分な研究がなされておらず、また当遺跡のような石器製作的な遺跡もあまり類例がなく、その上時間的に制約された中での整理のため十分な検討を加えることができないので、今後活用できるように基礎的資料に重点をおいて整理を行った。

出土住居址毎に石器を解説するのが一般的であるが、石器全体の中で、各々の性格をつかもうと考え、あえて図版製作にあたっては種類別の方法を採用した。また石器すべてを図版化するのが難しく代表的なものをのせて後は図表等をもって代用した。

石質については、肉眼での鑑定では分類が難しいものもあり、緑色岩類といったように一括したものもある。これは専門用語でなく、三峯川流域を主産地とする緑色を呈する岩石を総称してつけたものであり、細かい分類を行えなかった点を反省している。しかしながら総称した岩石類の中には領家花崗岩類に含まれるものがないことだけはつけ加えておきたい。

石器の内に剝片を加えることは、問題があろうかと思われるが、横刃形石器の母体は剝片を利用したものであり、意識的にそれを目的とした剝片の作出も十分考えられ、また、石器の加工上における重要な要素を持つ所から本報告においてはことわりのない場合は剝片を含めて扱っている。

住居外よりの出土の石器は埋土中のもののみで、遺構とかかわるものはないので省いて報告してある。数量は11点である。

#### 1 石器の組成について

本調査によって出土した石器は全部で1228点、礫は289点である。各位居址の出土状態は図表1~10のとおりである。石器中一番多いものは剝片で約50%を占めている。しかしながら住居址毎にさらに部位関係からみると大分ばらついている。このような状態は他の石器についても同様で住居址の性格を位置づけるものと思われる。つぎに多いのが打製石斧で149点、磨石127点、敲打器98点、特殊敲打器84点、石錐59点、石核30点、大形粗製石匙21点、磨石17点、磨製石斧16点となっている。後は少なく石鐵、砥石、削器及び搔器はまったくみられない。

剝片を除いた場合、打製石斧が多くこれはこの時期の特徴と思われる。敲打器、特殊敲打器磨き石などの多くみられることに比して、石皿、凹石などの少ないことは当遺跡の特徴である。

赤穂地区の山麓遺跡においては石錐の出土は非常に少なく、石錐の存在は当遺跡の立地条件とも併せ考えると漁撈に生活基盤があったことをうかがわせる。しかしこれとても出土分布はかたよっており、住居址の性格の位置づけを物語るものであろう。今後の問題としたい。

图表 1 第 1 号位带新奥土石围一管廊

種類 形態 石 材 質 相 位	打 破 石 斧				磨 擦 石 斧				大 形 粗 鋸 石 斧				小 形 石 斧				石 器							
	短 手 形		長 手 形		分 類 形		小 定 角		始 刀		乳 削		小 定 角		始 刀		乳 削		短 手 形		長 手 形			
	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	完 破 加 工 計	計					
砂岩	2	2					2						2	2			2				1 1			
緑色砂岩																								
砂岩	25	25					2																	
頁岩																								
黒縞石																								
チャート																								
土	2555	2					2																	
小計	15	6					6						2	2			2				1 1			
緑色砂岩	27	9					9																	
緑色砂岩	12	3					3	1	1				1								1 1			
砂岩	1	1					1																	
頁岩																								
黒縞石																								
チャート																								
土	31	1					1																	
小計	430	14					14	1	1				1								1 1			
総計	535	20					20	1	1				12	2	1	2					2 2			
種類 形態 石 材 質 相 位	石 鋸				鉄錐頭打頭				磨 き 石				石 棱				新 片				總			
	圓頭小		小		a		b		小		a		b		c		d		a		b		c	
	圓頭小	鉄錐頭打頭	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	計		
砂岩	1	1	1	1					2	1	3							1	1	2	3	5 16 4		
緑色砂岩			2	2					1	1	2											4 2		
砂岩																						2		
頁岩																								
黒縞石																								
チャート																								
瓦飾岩																						2		
土																								
小計	12	3	1	1					3	2	6							1	1	2	3	8 24 8		
砂岩			1	2	2	2	7		2	1	2	4	7	1				2	2	7	16	23 52 6		
緑色砂岩	4	4	2	2					6	1	1	6						1	3	4	22	3		
砂岩																						1		
頁岩																								
黒縞石																						1		
チャート																								
瓦飾岩																						6		
土																						1 1 2		
小計	4	4	3	2	2	2	6		2	7	1	2	6	16	1			2	2	8	19	27 78 18		
総計	52	73	32	219					2	10	1	2	7	20	1			2	3	10	22	32 100 16		

図表2 第2号住居出土石器一覧表

種類 形 状 性 質	打 磨 石 器					磨 磨 石 器					大形磨石器					小 悪 石 器					石 銅							
	鋸 形		機 形		分類系	小 定 角		始 万		乳 槌	小 機 形		研 形		小 機 形		研 形		小 機 形		研 形		小 機 形					
	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中	完 破	加工 中				
石 質	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計				
砂岩	25	7					7								1		1	1	1	2				1	1			
緑色岩	11	2					2								1	1	1											
砂岩	11	2					2																					
頁岩																												
黒縞石																												
チャート																												
土																												
その他の																												
小計	3	7	11				11				1	1	1	1		1	1	1	1	1	2			1	1			
灰砂岩																												
緑色岩																												
砂岩																												
頁岩																												
黒縞石																												
チャート																												
その他の																												
小計	3	7	11				11				1	1	1	1		1	1	1	1	1	2			1	1			
種類 形 状 性 質	石 儀	石 儀	磨 打 器	磨 打 器	特種磨石器		磨 磨 石	石 儀	石 儀	石 儀	石 儀	石 儀	石 儀	石 儀	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器	研 磨 状 石 器			
石 質	完 破	小	a	b	c	小	a	b	c	d	小	a	b	c	d	小	a	b	c	小	a	b	ハ ン マ ー	小				
形態	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計	形態	計		
砂岩	2		2	2	4	1	7				4	3	2	1	10						1	2	3	10	29	39	71	5
緑色岩	1	3	1	5	2	2					2	2	2	2	6								3	3	6	22	4	
砂岩											1		1													3	3	
頁岩																												
黒縞石																												
チャート																												
花崗岩											2																	
その他の																												
小計	3	3	1	7	2	6	1	9			2	7	5	2	3	17					1	2	3	13	34	47	100	15
灰砂岩																												
緑色岩																												
砂岩																												
頁岩																												
黒縞石																												
チャート																												
花崗岩																												
その他の																												
小計	3	3	1	7	2	6	1	9			2	7	5	2	3	17					1	2	3	13	34	47	100	15

图版3 第3号住居址出土石器一览表

種類 形態 部位	打製石斧						磨製石斧						大形粗製石器				小形石器				石器			
	輪形			角形			分類形			小形			輪形			角形			小形			種類		
	元 形	破 形	加工 計	元 形	破 形	加工 計	元 形	破 形	加工 計	元 形	角 形	分類 計	元 形	破 形	加工 計	元 形	破 形	加工 計	元 形	角 形	分類 計	種類	計	
便 砂 岩	3	6	9				9															26	26	
緑 色 岩	7	2	9				9	2	13													2	2	
砂 岩	1	2	3				3																	
貝 岩																								
風 磨 石																								
チャート																								
土 その他の																								
	小 計	11	10	21			21	2	13				3									120	29	
便 砂 岩	1	2	3				3															8	8	
緑 色 岩	1	5	6				6			3	3	1	1	4								1	1	
砂 岩	2	1	3				3															2	2	
貝 岩																								
風 磨 石																								
チャート																								
面 その他の																								
	小 計	4	8	12			12			3	3	1	1	4								12	12	
	総 計	15	18	33			33	2	13	3	3	2	2	4	7								141	41
種類 形態 部位	石錐						磨製石器						大形粗製石器				小形石器				石器			
	石錐			磨製石器			特種磨製石器			磨合石			風石			磨耗石			ハンドル			新片		
	形 状	輪 形	角 形	小 形	中 形	大 形	a b c	a b c	d	小 石	中 石	大 石	a b c d	小 石	中 石	大 石	a b c d	小 石	中 石	大 石	ハ ン ド ル	新 片		
便 砂 岩	3	3	1	2	1	4			6	2	1	10	11					2	2	18	96	14	189	
緑 色 岩	1	4	2	7	2	1	3		5	2	4	11								3	29	29	62	
砂 岩	3	3	1				1		1											3	3	13	4	
貝 岩																								
風 磨 石																								
チャート																								
花崗岩							2	2				1	1									5	4	
土 その他の							知	1				用	1								1	1	4	
	小 計	4	4	2	10	3	7	1	10	3	2	13	4	1	6	24	11		2	2	21	125	47	284
便 砂 岩	1	1	1	1					1	1	2								2	38	40	55	9	
緑 色 岩	1	5	1	7	1	1			1	1	2	11							10	10	32	4		
砂 岩																				3	3	8		
貝 岩																								
風 磨 石																								
チャート																								
花崗岩																								
面 その他の																								
	小 計	2	5	1	8	1	1	2				3	1	3	7	11			2	51	53	99	18	
	総 計	6	9	3	18	3	5	1	13	3	2	16	5	1	9	31	21		2	23	177	206	353	59

石器類大部石器1例あり

図表4 第4号住居跡出土石器一覧表

種類 形態 石質 等級		打削石斧						磨削石斧						大形研製石器						小形石器						石器							
		粗削形			細削形			分離形			粗削形			細削形			粗削形			細削形			粗削形			細削形			小刀	鉋			
		元加工計	粗加工計	完加工計	元加工計	粗加工計	完加工計	元加工計	粗加工計	完加工計	元加工計	粗加工計	完加工計	元加工計	粗加工計	完加工計	元加工計	粗加工計	完加工計	小刀	鉋												
■	砂岩	3	1	3				3												1	1	2		2									
■	緑色砂岩	1	1	1				1																									
■	砂岩																																
■	頁岩																																
■	風化石																																
■	チャート																																
■	その他																																
■	小計	3	1	4				4												1	1	2		2									
■	緑色砂岩	3	1	4				4																								1	
■	緑色砂岩	3	3	6				6	1	1		3	1	2	3					1	1	1											
■	砂岩																														1	1	
■	頁岩																																
■	風化石																																
■	チャート																																
■	その他																																
■	小計	6	4	10				10	1	1		1	1	2	3														2	2			
■	総計	9	5	14				10	1	1		1	1	2	3	1	1	2	1	1	1	1					2	2					
種類 形態 石質 等級		石錐						石錐打器						磨き石						石核						新片		總					
		粗削小			小			粗削小			小			磨き石			石核			粗状石器			ハンマー			小		使用したもの		小			
		a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	石核	磨き石	粗状石器	ハンマー	石核	磨き石	粗状石器	ハンマー	小	b	c	A	B	使用したもの	小	總	總			
■	便砂岩	2	2	2	2	2	2	1	1	2				1	1	2		2	2	3	16	19	32	3									
■	緑色砂岩	6	6	2	2	2	2	3	3	1				3	1	1		2	2	4	16	3											
■	砂岩																											2	2	2	4		
■	頁岩																																
■	風化石																																
■	チャート																																
■	花崗岩																																
■	その他																																
■	小計	2	9	10	4	4	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	20	35	60	10							
■	便砂岩							2	3	3				1	1	1	3				2	1	3	2	32	34	46	17					
■	緑色砂岩	1	1	2	1	1	1	1	1	1				1										6	6	20	11						
■	砂岩																																
■	頁岩																																
■	風化石																																
■	チャート																																
■	花崗岩																																
■	その他																																
■	小計	1	1	2	3	1	4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	45	47	77	39							
■	総計	2	9	12	4	3	1	6	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	7	65	72	127	49						

図表5 第5号住居並出土石器一覧表

種類 形態 石 質 相 位		打 破 石 片						磨 擦 石 片						大 小 磨 擦 石 片						小 小 磨 擦 石 片						石 離														
		直 角 形			圓 形			分 銀 形			小 完 整 形			角 刃 形			刀 乳 形			小 完 整 形			直 角 形			圓 形			小 完 整 形			小 チコ								
		完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	完 整	加 工	計	小 チコ	大 チコ										
板	砂 岩	2	2					2												1	1	1																		
板	綠色岩類	1	1					1			1	1	1							1	1	1																		
板	砂 岩																																							
板	頁 石																																							
板	鐵 鑄 石																																							
板	チャート																																							
土	その他の																																							
土	小 計	1	2	3					3			1	1	1						3	3	3																		
底	砂 岩	1	2	3					3																															
底	綠色岩類																																							
底	砂 岩	1	1	2					2																															
底	頁 石																																							
底	鐵 鑄 石																																							
底	チャート																																							
底	その他の																																							
土	小 計	2	3	5					8																															
土	総 計	3	5	8					8			1	1	1						3	3	3																		
種類 形態 石 質 相 位		石 鋸						敲 打 机						磨 擦 石 片						石 鋸						調 片						總 計								
		石 鋸	敲 打 机	特殊敲打机		磨 擦 石 片						石 鋸						石 鋸						調 片						總 計										
		先 整	小	a	b	c	s	b	c	d	計	石 鋸	粗 石 鋸	石 鋸	a	b	c	d	計	石 鋸	粗 石 鋸	石 鋸	a	b	c	ハ ン マ ー	小 チコ	小 チコ	小 チコ	大 チコ	計									
板	砂 岩																																							
板	綠色岩類			3	2	5						2	2	1	1	1	1	2													3	16	19	27	2					
板	砂 岩																																							
板	頁 石																																							
板	鐵 鑄 石																																							
板	チャート																																							
土	花崗岩								1			4		2	2																		3	3	10	2				
土	その他の																																							
土	小 計	3	2	5	2	2	1	1	4	3	2	1	0																	5	26	31	37	7						
土	総 計				3	3						1		2	2																		14	14	23	4				
底	砂 岩																																		5	5	6	6		
底	綠色岩類																																		3	2	4	2		
底	砂 岩																																							
底	頁 石																																							
底	鐵 鑄 石																																							
底	チャート																																							
底	花崗岩																																							
底	その他の																																							
底	小 計	1	1	3	3				1			2	2																								21	21	33	8
底	総 計	4	2	6	5	5	1	1	4	4	4	2	3																					5	47	62	98	18		

図表 6 第7号佐原式凸土石器一覧表

種類 形態 状況 部位	打製石斧					打製石斧					大形粗製石器					小形石器					石器			
	短角形		長角形		分類形	小刀		鉈		乳頭	小刀		鉈		乳頭	大形粗製石器		小形石器		石器				
	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	計	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	計	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	計	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	完 成 度 合 計	未 完 成 度 合 計	計	石器			
砂岩																								
緑色岩類																								
砂岩																								
灰岩																								
黒曜石																								
チャート																								
土																								
その他																								
小計																								
硬砂岩																								
緑色岩類	2	1	3																					
砂岩																								
灰岩																								
黒曜石																								
チャート																								
面																								
その他																								
小計	2	1	3																					
総計	2	1	3																					
種類 形態 状況 部位	石錐 鉄打器					特種鉄打器					磨き石					石錐 鉄打器					石器			
既存 部位	完 成 度 合 計	小 計	小 計	小 計	計	完 成 度 合 計	小 計	小 計	小 計	計	a	b	c	d	小 計	石錐 鉄打器	小 計	小 計	計	ハ ン ド a b c d e	片			
硬砂岩											1	1									1	6	7	9
緑色岩類	1	3	4																		1	2	3	8
砂岩																								
灰岩																								
黒曜石																								
チャート																								
花崗岩																								
土																								
その他																								
小計	1	3	4	1	1						1	1									2	8	10	17
硬砂岩																					1	4	5	6
緑色岩類																					2	2	5	
砂岩																					2	2	2	
灰岩																								
黒曜石																								
チャート																								
花崗岩																								
土																								
その他																								
小計	1	3	4	1	1																1	8	9	15
総計	1	3	4	1	1																3	16	19	30

図表7 第8号住居出土石器一覧表

断面 部位	打 破 石 片			磨 磨 石 片			大 部 粗 雕 石 片			小 形 石 片			石 粉					
	板 板 形			块 形			小 定 角 刀 乳 槌			小 块 板 形			小 块 板 形			石 粉		
	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	完 硬 加 工 花 镂	石 粉		
砂 岩	2	5	7				3										1	
绿色岩砾	2	2					2										1	
砂 岩													1	1	1			
瓦 砖																		
盖 石																		
チヤート																		
その他の	完	1					1											
小 计	4	6	10				10						1	1	1		1	
灰 砂 岩	1	3	4				4										1	
绿色岩砾																	1	
砂 岩	1	1					1						2	2	2			
瓦 砖																		
盖 石																		
チヤート																		
その他の	完	1					1											
小 计	2	4	6				6						2	2	2		1	
総 計	6	10	16				16						1	1	2	2	2	
断面 部位	石 僅			敲 打 器			特 残 敲 打 器			劈 き 石			石 粉			剥 片		
	完 硬	小	小	完 硬	小	小	完 硬	小	小	石 粉	石 粉	石 粉	剥 片	剥 片	剥 片	剥 片	剥 片	
	加 工 花 镂	花 镂	花 镂	a b c	a b c d	計	石 粉	石 粉	石 粉	石 粉	石 粉	石 粉	ハ・ソ	ハ・ソ	ハ・ソ	ハ・ソ	ハ・ソ	
硬 砂 岩	1	1						4	1	1	2	6		1	1	2	4	31 35 54 5
绿色岩砾	1	2	3					2	2		4							2 2 11 2
砂 岩				1	1			2		2								5 5 9 1
瓦 砖																		
盖 石																		
チヤート																		
花 岩 岩								1										
その他の																		
小 计	2	4	6	3	1		1	6	3	1	2	14		1	1	2	4	38 42 76 10
灰 砂 岩	3	3									2	2		5	2	7	3	21 24 41 5
绿色岩砾	2	2									1	1						
砂 岩	1	1							5		5							2 2 11 5
瓦 砖																		
盖 石																		
チヤート																		
花 岩 岩																		
その他の																		
小 计	4	2	6	3	3			1	5	2	4	11		5	2	7	4	27 31 66 14
総 計	6	6	12	6	4			2	13	3	3	26		6	3	9	8	65 73 146 24

图版 8 第 9 号住居址出土石器一套

種類 石 灰 岩	打 破 石 片						磨 擦 石 片						大 事 亂 裂 石 片						小 形 石 片						石 銀				
	粗 鋸 形			後 刷 形			分 削 形			定 角 刃 乳 様			小 定 角 刃 乳 様			橫 形			縱 形			小 定 角 刃 乳 様			橫 形			小 大 小	
	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	小 大 小		
硬砂岩	1534	49	1	1			50			52	7	4	411															32 234	
綠色岩類	14	5	120	1	1		21	2	2	4	1	1	1	6			1	1	1									3 3	
砂 岩	2	5	7				7						1	1	1	1	2												
頁 岩																													
風 鑿 石																													
チャート																													
土																													
硬砂岩	1320	53	1	1			34			5	3		3															13 114	
綠色岩類	914	23					22	2	2	3	4	1	3	4	10	1	1	1	2									2 2	
砂 岩	6	2	7				7						2	2	2													4 4	
頁 岩																													
風 鑿 石																													
チャート																													
面																													
その他	92	95					50																						
小 計	2799	66	1	1			67	2	2	1	3	4	1	3	4	10	1	3	4	2	1	3	7				20 121		
総 計	8085	1346	3	3			48	4	2	6	2	3	5	2	3	5	18	7	5	12	8	1	921	1	1		156 339		
種類 石 灰 岩	打 破 石 片						磨 擦 石 片						大 事 亂 裂 石 片						小 形 石 片						石 銀				
	粗 鋸 形			後 刷 形			分 削 形			定 角 刃 乳 様			小 定 角 刃 乳 様			橫 形			縱 形			小 定 角 刃 乳 様			橫 形			小 大 小	
	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	完 剥 加 工	完 剥 加 工	計	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	橫 形	小 大 小			
硬砂岩	13	13	4	16	3	427	1	24	5	5	641	115		4	711	45	259	304	493	49									
綠色岩類	1531	551	3	7	10			10	7	7	124			1			10	42	52	166	28								
砂 岩		6	6	6	6	1	6	6	6									16	17	42	24								
頁 岩																													
風 鑿 石																													
チャート																													
花崗岩								1	2	9	2	1	3															18	
土																													
その他	1	1	32	46	46																								
小 計	2633	588	731	3	446	1	4	941	13	71478	111		1	4	711	56	324	386	734	122									
硬砂岩	6	6	1	17	6	125		2	9	4	31127	1		1	11	718	18	163	181	311	69								
綠色岩類	913	325	2	4	3	130		1	9	1	313	116		1	1	1	4	32	36	125	31								
砂 岩	1	1	1	1	1	1		2	6	6										17	18	41	27						
頁 岩																													
風 鑿 石																													
チャート																													
花崗岩																	3	1	2	2	5								8 28
面																													
その他								93	95																				
小 計	1613	382	324	10	239			8	26	5	6	1658	111	1	1	11	1	719	23	213	286	494	167						
総 計	4466	898	1055	13	684	1	4	17	67	18	12	30173	121	1	2	35	114	30	79	537	916	1226	289						

図表9 住居城内生土石基盤対表



層 位 番 号	層 名	打 探 孔 番 号	鑿 石 厚 度	大 理 岩 質 量	小 形 石 塊	石 塊	鐵 行 鐵	鐵 礦	石 塊	鐵 石	鐵 礦	石 塊	鐵 石	鐵 礦	片 狀					
1 岩 土	18.1(27)		19.1 (4)		10.2 (6)	21.4 (21)	16.7 (14)					39 (6)			50 (1)	13 (1)	51 (4)	129 (69)	124 (152)	
1 岩 土	11.4(17)	12.6 (2)	19.1 (4)		6.5 (5)	11.2 (11)	26.2 (22)					17.6 (3)	9.4 (12)		50 (1)	23.3 (7)	7.6 (5)	7.8 (42)	107 (132)	
計	28.5(46)	12.5 (2)	28.1 (8)		18.6(11)	32.7(32)	42.9(36)					17.6(3)	13.4(17)		100 (1)	26.7 (8)	127 (10)	207 (111)	221 (284)	
2 岩 土	4.0 (6)	8.5 (2)		1.7 (1)	3.1 (3)	1.2 (1)						3.9 (5)				3.3 (1)	2.5 (2)	0.6 (3)	2.0 (24)	
2 岩 土	9.4(18)	6.3 (1)		1.7 (1)	4.1 (4)	10.7 (9)						11.8 (2)	11.8 (19)		100 (1)		6.7 (2)	16.1 (8)	3.5 (19)	
計	13.4(20)	6.3 (1)	9.5 (2)		3.4 (2)	7.1 (7)	11.9 (10)					11.8 (2)	15.7 (23)		100 (1)		10 (3)	127 (10)	4.1 (122)	
3 岩 土	7.4(11)	6.3 (1)	9.5 (2)		1.7 (1)	7.1 (7)	10.7 (9)					11.8 (2)	13.4 (17)				10 (3)	16.5 (13)	5.3 (34)	
3 岩 土	7.4(11)	6.3 (1)	9.5 (2)		1.7 (1)	7.1 (7)	10.7 (9)					11.8 (2)	13.4 (17)				10 (3)	16.5 (13)	5.3 (34)	
4 岩 土	14.1(21)	15.8 (3)		1.00 (1)	49.2(29)	10.2(60)	13.1(11)					75 (3)	11.8 (2)	18.9(24)			6.7 (2)	26.6 (21)	23.5 (28)	
4 岩 土	8.1(12)	25 (4)			20.3(12)	8.2 (8)	2.4 (2)					5.5 (7)	50 (1)				2.5 (2)	9.5 (51)	8.1 (99)	
計	22.1(33)	43.8 (7)		100 (1)	66.5(41)	18.4(18)	15.5(13)					76 (3)	11.8 (2)	24.4(31)	100 (2)		6.7 (2)	26.1 (23)	33.0 (377)	28.7 (353)
5 岩 土	2.7 (4)		8.5 (2)			10.2(10)	4.8 (4)					2.4 (3)					6.7 (2)	6.3 (5)	3.7 (20)	4.1 (50)
5 岩 土	6.1(10)	18.8 (3)	4.8 (1)		3.4 (2)	2.0 (2)	4.8 (4)					11.8 (2)	2.4 (3)				10 (3)	2.5 (2)	8.4 (45)	6.3 (73)
計	9.4(14)	18.8 (3)	4.8 (3)		3.4 (2)	12.2(13)	9.1 (8)					11.8 (2)	4.7 (6)				16.7 (5)	8.9 (7)	12.1 (65)	10.3 (127)
6 岩 土	2.0 (3)	6.3 (1)	14.3 (3)			5.1 (5)	2.1 (2)	100 (1)	25 (1)			23.5 (4)	4.7 (6)				6.3 (5)	4.8 (26)	4.6 (57)	
7 岩 土	3.4 (5)					1.0 (1)	3.6 (3)					2.4 (3)						3.9 (21)	27 (33)	
計	5.6 (8)	6.3 (1)	14.3 (3)			6.1 (6)	4.0 (5)	100 (1)	25 (1)			23.5 (4)	7.1 (9)				6.3 (5)	8.6 (47)	7.3 (90)	
8 岩 土		6.3 (1)				4.1 (4)	1.2 (1)					0.8 (1)					2.5 (2)	1.5 (8)	0.8 (10)	
計	2.0 (3)	6.3 (1)				4.1 (4)	1.2 (1)					0.8 (1)					1.3 (1)	1.5 (8)	0.7 (9)	
9 岩 土	6.1(10)	4.8 (1)		1.7 (1)	6.1 (5)	1.2 (1)						1.6 (2)					3.8 (3)	3.0 (18)		
9 岩 土	4.0 (6)	9.5 (2)		1.7 (1)	6.1 (5)	3.6 (3)						5.9 (1)	9.7 (11)				6.7 (2)	5.1 (4)	5.0 (27)	5.5 (69)
計	10.7(16)	14.3 (3)		3.4 (2)	12.2(12)	4.8 (4)						11.8 (2)	19.7 (23)				30 (9)	16.1 (8)	12.1 (65)	11.9 (146)
10 岩 土	55.0(2)	37.6 (6)	66.7(14)	100 (1)	64.4(38)	67.3(68)	53.6(16)	100 (1)	100 (4)	52.8 (9)	50.8 (78)	50 (1)	50 (1)	50 (1)	36.7 (11)	76.9 (58)	60.3 (36)	59.4 (74)		
10 岩 土	45.0(67)	62.5(10)	33.3 (7)		35.6(21)	32.7(32)	45.7(59)					47.1 (6)	40.6(52)	50 (1)	100 (1)	50 (1)	63.3(19)	23 (32)	39.7(213)	43.2(69)
計	100 (149)	16.1 (16)	(21)	(1)	(59)	(64)	(1)					(4)	(17)	(1)	(1)	(2)	(36)	(79)	(537)	(1229)

図表 11 石炭層帶別に分類された岩相とその面積率 (1) (1)は面積率

## 2 石器の出土分布について

石器の組成同様住居址によって大分異なっている。石器を一番多く出土したのは4号住居址であるが床面出土にかぎると1号住居址が最も多く逆転をしている。3号住居址は床面よりの出土のものは全く全部覆土からの出土となっている。床面より10cm内外を基準として出土層位をわけてみたが、覆土出土中にも完形品がみられ、また全体の6割を覆土出土のものが占めていることなどを考えるとこの両者の関連をいかに処理するかが問題である。住居址に伴う石器については、住居址内の生活面ともかかわる重要な問題であり、各住居址の石器組成を考える上で大切なことである。各石器の出土分布をみると石器全体の分布に比例していない。これは石器組成とも密接な関係を持っていることである。

## 3 打製石斧(第39~42図、図表12~14)

発見された打製石斧は全部で149点である。そのうち換形は3点のみである。量も少なく機能的に差はないの

でここでは一諸に述

べていきたい。149

点のうち、完形品は

63点、破損品85点、

加工中のもの1点と

なっている。ほとん

どのものに使用痕が

みられないわりには

破損が多い。破損の

部所が刃部か頭部か

きめがたい所もある

が、形態的に判断し

てみると、頭部欠損

32点、刃部欠損32点、

頭部のみのもの15点、

側面欠損6点である。

打製石斧の製作方

法について最近いく

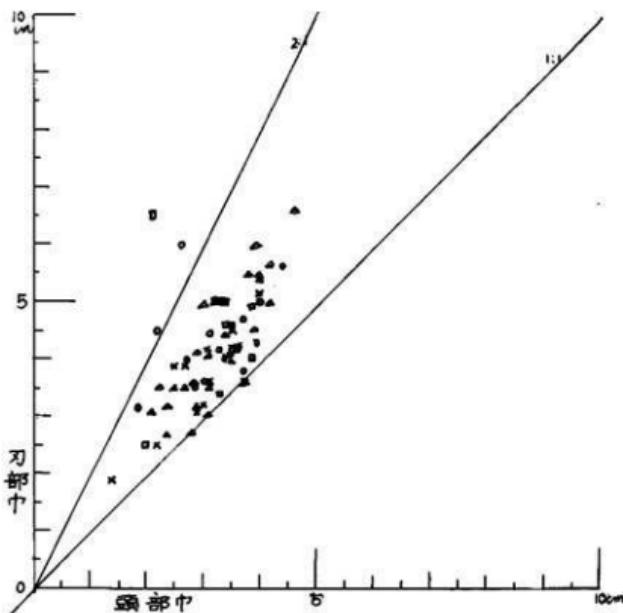
つかの研究がなされ

ている。これらを参

考にしながら打製石

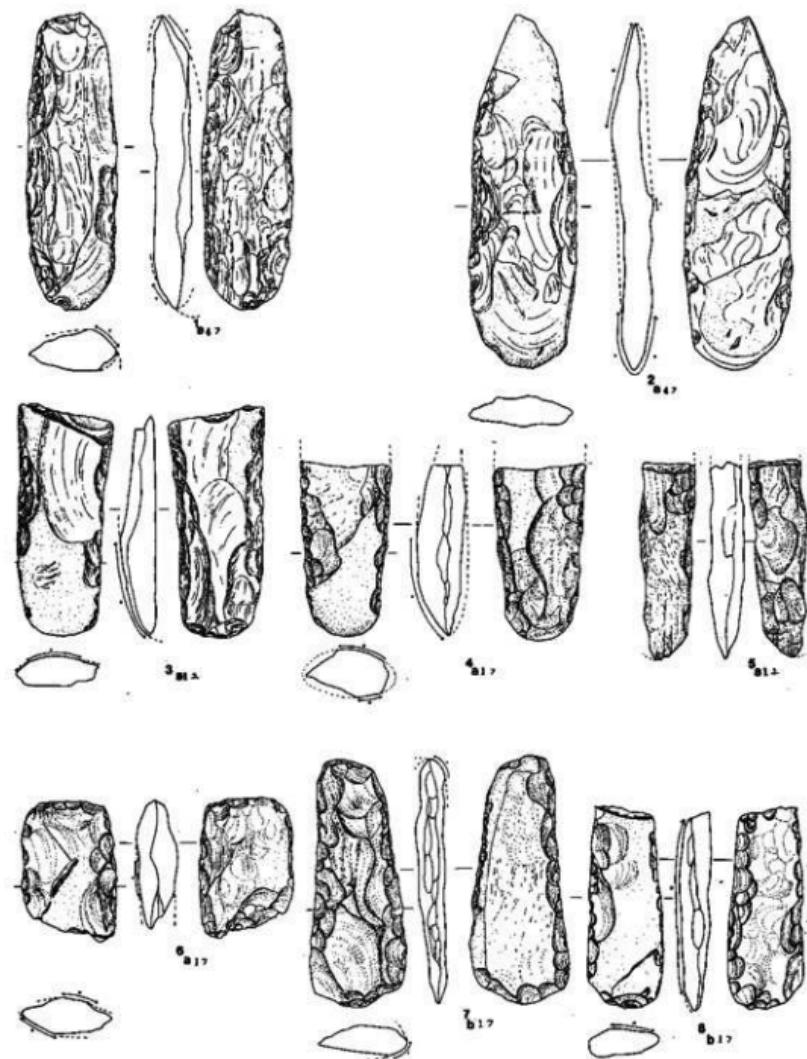
斧の製作方法を考え

てみたい。



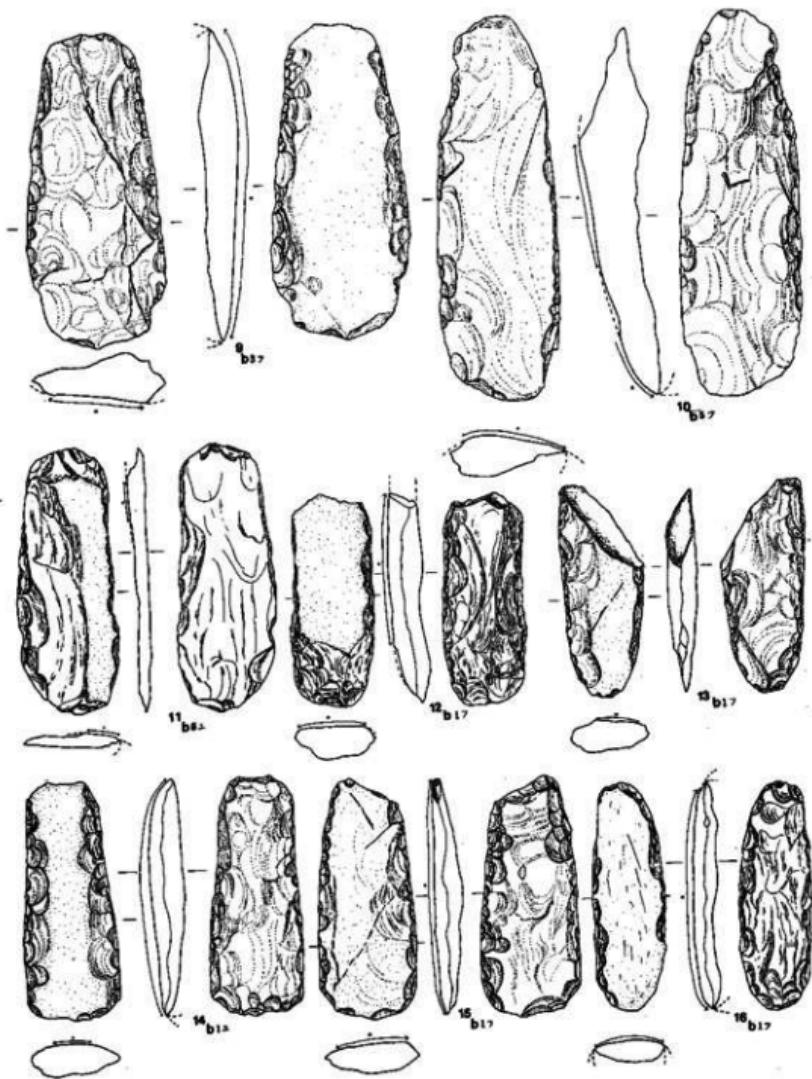
図表12 打製石斧刃部幅と頭部幅相関表（検可資料 63点）

(○—a, △—b, ×—c, □—d類を示す)

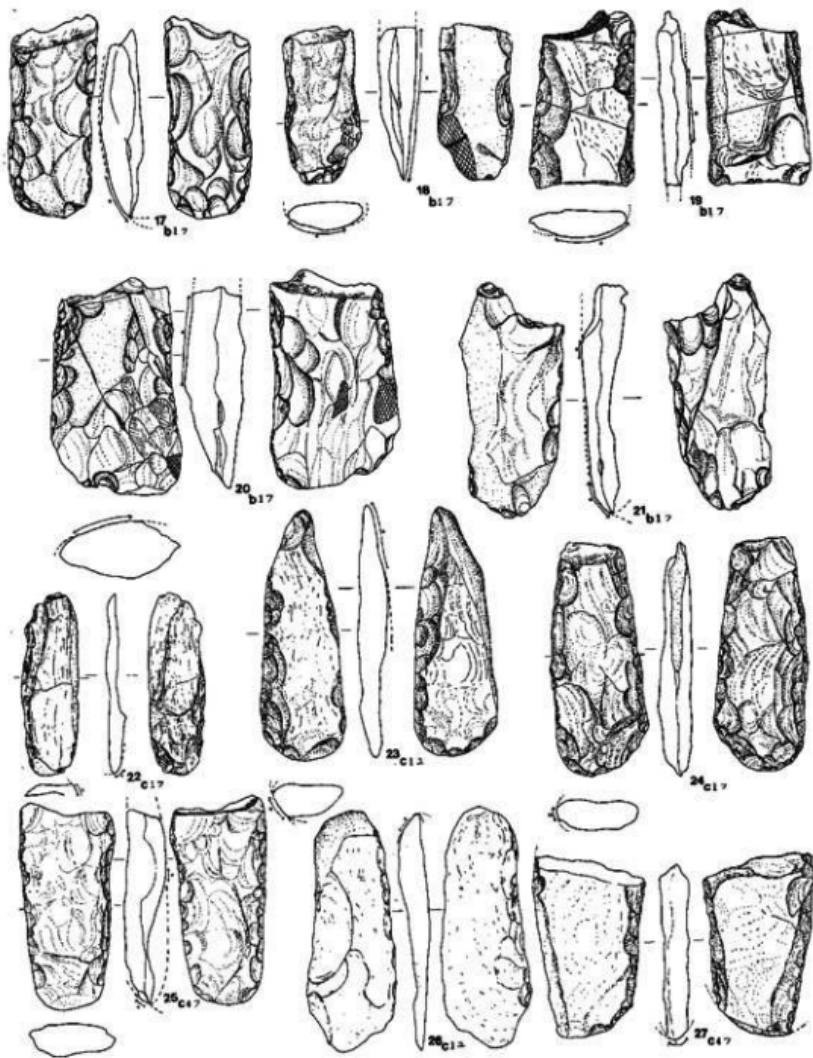


第39図 打製石斧 (a・b類) 実測値 ( $\frac{1}{3}$ )

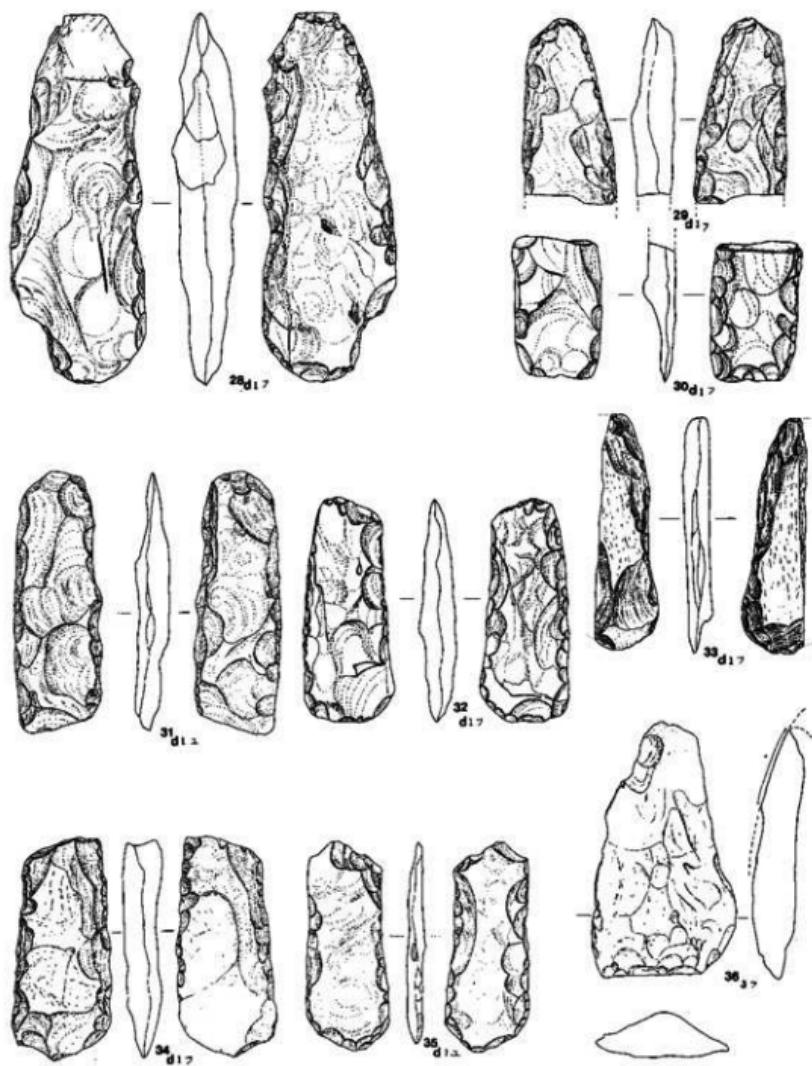
(図中 → は裏表皮、それに伴う破線は推定線を示す。ユは床面フは製土出土。以下同じ)



第40図 打製石斧（b類）実測図 ( $\frac{1}{3}$ )



第41図 打製石斧 (b. c.類) 実測図 ( $\frac{1}{3}$ )



第42圖 打製石斧 ( d-類加工中 ) 實測圖 ( $\frac{1}{3}$ )

石器製作にあたって一番大事な事は原石の入手である。作出しようとするものにあった原石を手に入れることができが最初の仕事である。打製石斧はどのような素材から作出されたかを考えるために、打製石斧を礫表皮の残存状態によって4分類してみた。

a類-両面に礫表皮を残すもの (第39図1~6)

b類-片面に礫表皮を残すもの (第39図7, 8, 第40図, 第41図17~21)

c類-側面及び刃部に礫表皮をもの (第41図22~27)

d類-まったく礫表皮が残らないもの (第42図28~35)

a類は偏平大の礫から作成されることはあきらかである。礫表皮の残り具合の多い少ないはあるが、両側面からの1~3回の打撃によってプロポーションが整えられている (第1次調整と呼ぶ)。この時点での石斧もあると考えられる。その後細かい第2~3次の調整によって刃部が作り出される。頭部ないし刃部からの打撃による第1次調整例はみられない。

b・c類は礫表皮の残り具合からでは素材が礫からなるものか、礫の一部を打ち欠いたものからなるかは不明である。b・c類をみると第1次調整の打撃方向のはっきりしないもの (8, 9, 11, 13, 15, 16, 18~27) と両側面からの打撃による第1次調整が行われるもの (7, 10, 12, 17) がある。a類から推測するに後者は偏平大の礫を利用したものと考えられる。さて前者についてであるが、この製作手法からだけでは素材を考えることは難しい。後で述べる剝片の中に礫表皮を持つものが非常に多いことなど今後の課題である。

d類は第1次調整面を多く残し、第2~3次の調整によって刃部を作出している。

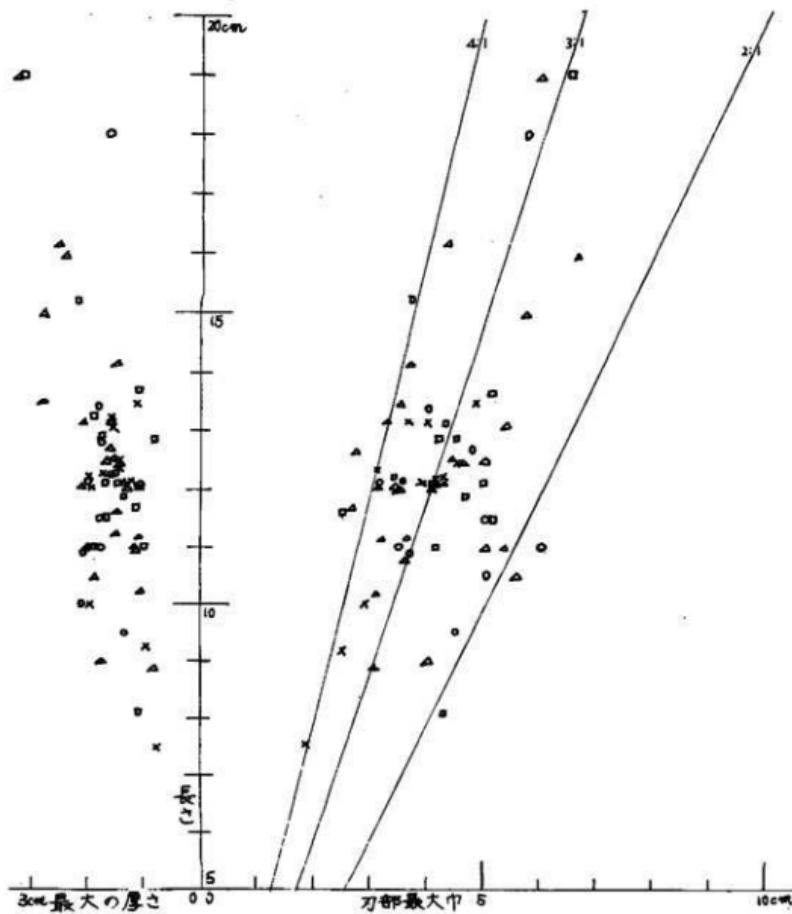
打製石斧をa~dの4類にわけてみたが、かくとした結論は導き出せなかつたが偏平大の礫を利用したものと、礫の一部を打ち欠いた剝片を利用したものとがあり、これが先に述べたような製作手法を生んでいるのではないだろうか。

図表13は分類別の数と石質をしたものである。石質は硬砂岩が一番多く、ついで緑色岩となっている。これを分類別にみると硬砂岩はb・d類に緑色岩はa・b類に集中する傾向をみせている。これは石質によって必ずしも石斧の製作手法の相違を生み出しているものと考えられる。

つぎに打製石斧の形状はどのようであるかみてみたい。図表14は刃部幅と頭部幅を調べたものである。頭部幅は2~4cm、刃部幅は2.5~6cmの間に入るもののが一般的で、この両者の比率をみると楔形の3点を除くと1:15を示すものが多い。1:1を示すものも4点みられる。楔点の形態基準を2:1としてみたが、はっきりと相違していることがわかる。分類別にはそう大差はみられないが、b類に大ぶりなもの、c類に小ぶりなものが集中している。打製石斧の長さと最大幅及び厚さの関係をみたものが図表14である。厚さは1.5~2cmの間のものが最も多い。厚みのあるものは長くなり、薄いものは短くなるといった比例の関係をみることができる。長さと幅の関係であるが、ここでは先ほどみたとおり、頭部幅と刃部幅の比率がほぼ一定しているので刃部幅 (最大幅) と長さの関係を

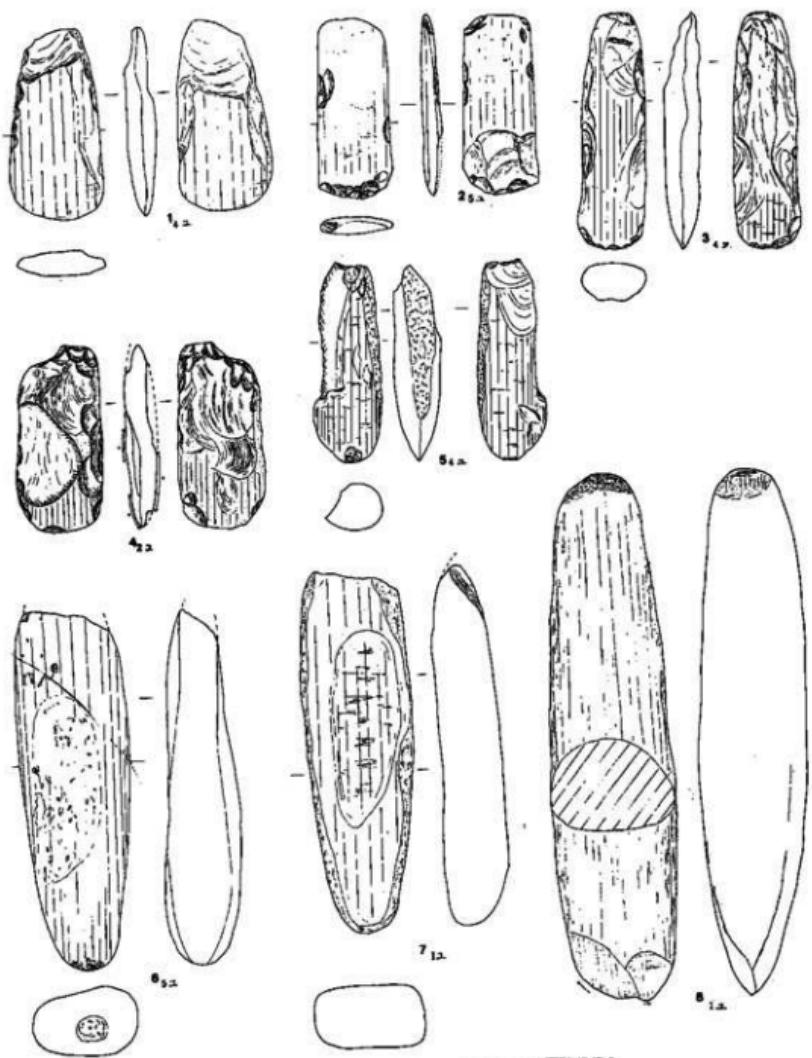
図表13打製石斧分類別・石質別数量表

	a	b	c	d	計
硬砂岩	3	35	15	31	84
緑色岩	13	22	6	2	43
砂岩	2	3	1	8	14
安山岩	1	1	3	5	
粘板岩	2				2
総計	20	61	23	44	148



図表14 打製石斧の最長と最大幅・最大厚相関表（検可資料63点）  
 (○—a, △—b, ×—c, □—d 類を示す。)

調べることとした。長さは10~14cmのものが一番多くついで9cm前後、16cm前後となっている。中には19cm前後のものもある。図にみるとおり、長さと幅の関係は一定していない。



第43図 磨製石斧実測図 (1/3)

打製石斧の刃部がくの字なり彎曲するものが良くみられる。これは原石の自然のカーブを巧みに利用したもので、機能的に相違を持つものと考えたい。

石器の製作にあたって最も基本的なことは石の目を考えることである。石の目にさからって取られた素材による石器は力学的に使用に耐え得ることはできないわけで、原石からの素材の取り方に一定の方法があったことは確かに縄文人の石器製作技術を知るには石の目を確実に知ることから始める必要がある。

\*1 上川名昭 「日野吹上遺跡」 日野吹上遺跡調査団一昭和45年 所収

J.E. キダー・小田静夫編「中山谷遺跡」国際基督教大学考古学研究センター一昭和50年 所収

小田静夫「縄文中期の打製石斧」季刊「どるめん」10号 所収

これらの中に打製石斧の製作技術についてふれられている。

#### 4) 打製石斧 (第43図)

磨製石斧は16点発見されている。内訳は定角6点、蛤刃5点、乳棒状5点である。石質はすべて緑色岩類である。

1~4は定角のものである。形状は一応のこすが、片面がはがれたものが多い。2は刃部に打撃痕と思われる使用痕がみられる。これらからみると頭部に何らかの力を加えた使用方法、たとえば“くさび”などに使われたものと考えられる。

5~8は蛤刃のもの。5点のうち完形品は2点ですべて頭部を欠損している。5は側面に敵打痕を残し、製作過程が知られる。8は大形の完形品で、全体をむらなく磨き上げたものである。頭部は敵打器の役割りを持っていたのであろう。

6~7は乳棒状のものである。後に述べる敵打器aと形態を同じくするが、自然面を敵き磨きが欠けられているところから磨製石斧の一類とした。6は全体を磨いてあるが、7は両面を磨くのみで側面は敵いただけである。機能は敵打器aと同様木の実などをくだしたり、すりつぶすためのものであろう。

#### 5) 石匙 (第44、45図第15表)

石匙は全部で22点発見されている。大形粗製石匙が一般で21点と多く、小形精製石匙は1点のみである。

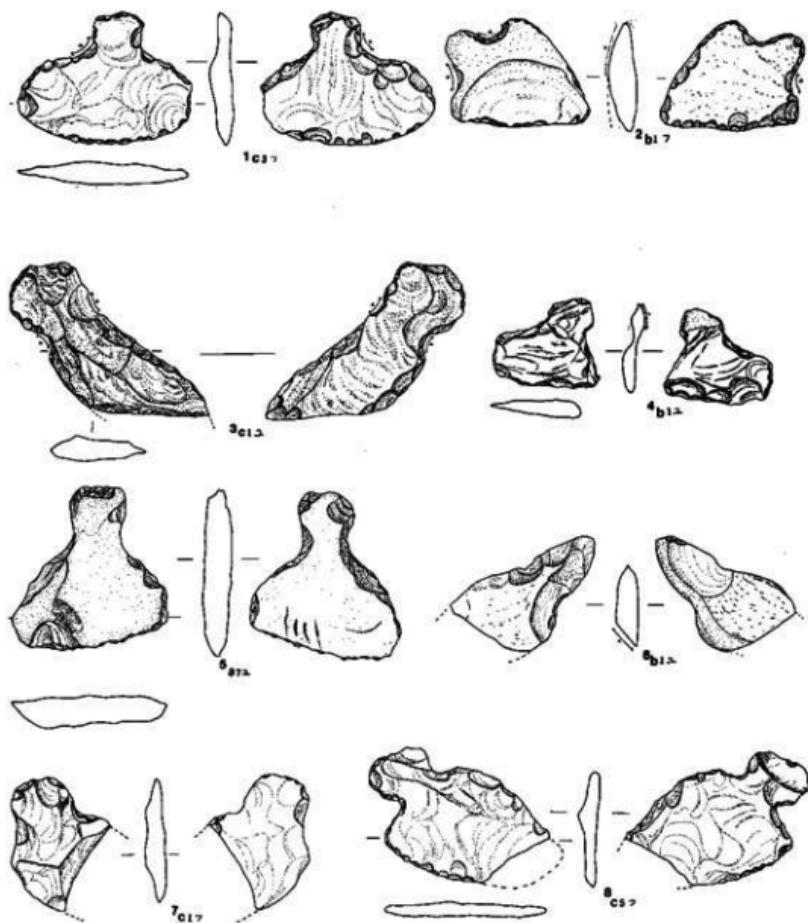
石匙の形態分類は横形と縱形とに分けることができる。なかには明確になし得ないものもある。また縱形のなかには打製石斧と区別しにくいものもみられる。横形のもの12点、縱形のもの9点である。

大形粗製石匙について礫表皮の残り具合からつぎのように三つに分類してみた。

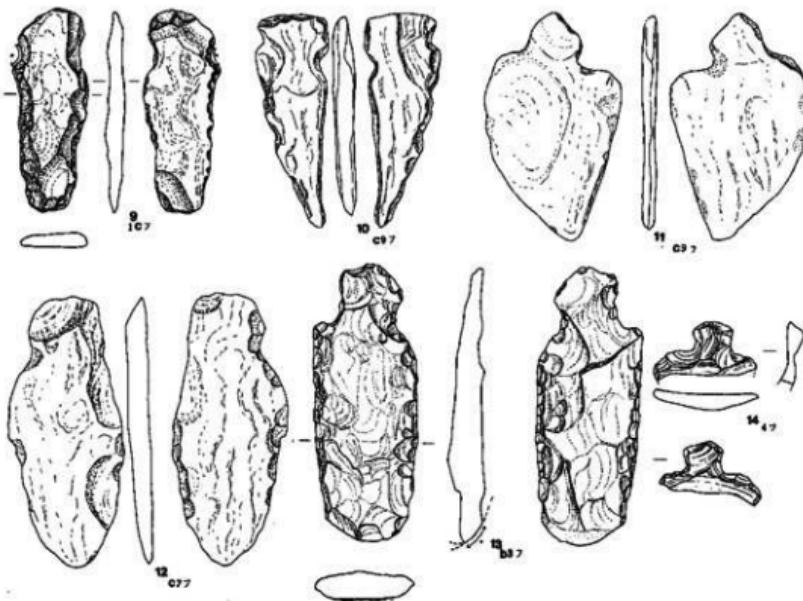
aは両面に自然面を残すもの、bは片面に自然面を残すもの。cはまったく自然面がみられないものである。

これは打製石斧と同様に製作過程及び素材となる母体を見るためのものである。

第15表にみる通り、横形、縱形を通じてa種は1点しか出土していない。全体にc種が多い



第44図 石匙実測図 ( $\frac{1}{3}$ ) ♂ 唐城を表わす



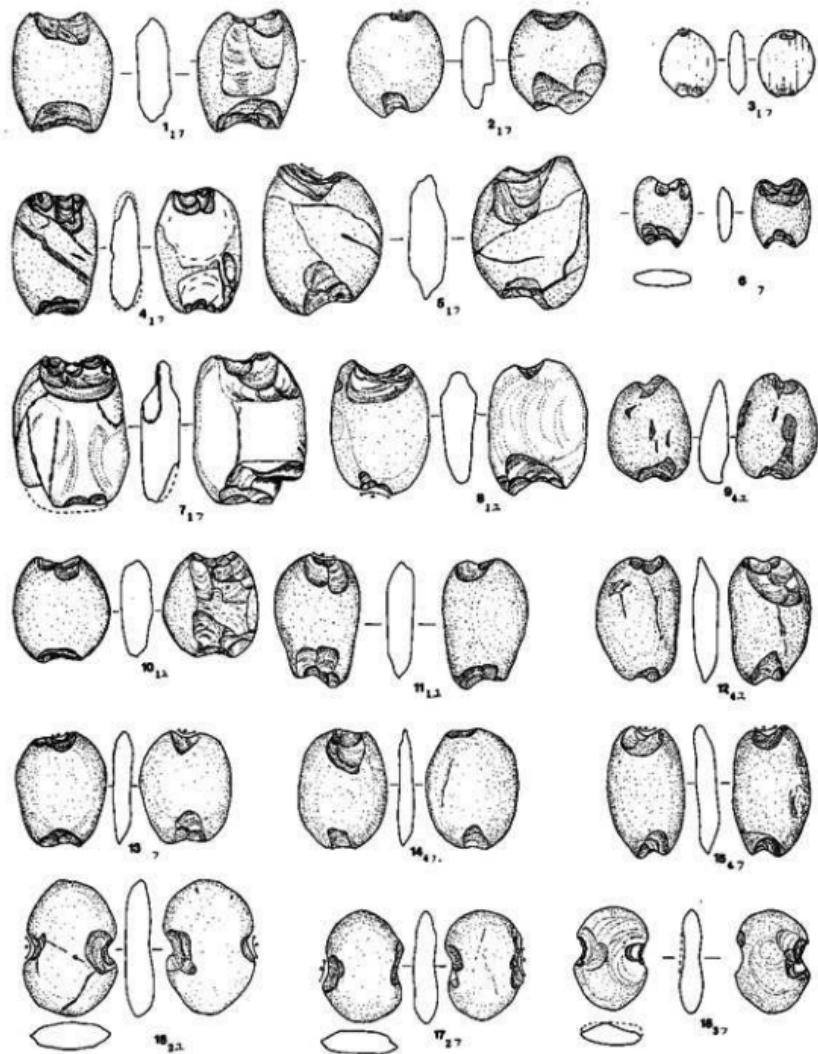
第45図 石匙実側図 ( $\frac{1}{3}$ ) ジ 磨滅を表わす

石質 分類 残存 状態	横 形							縦 形							小 計
	a		b		c		小	a		b		c			
	完形	破損	完形	破損	完形	破損	計	完形	破損	完形	破損	完形	破損		
硬砂岩	1		2	2	2	3	10			1		1		2	12
緑色岩類													3		3
砂岩			1		1		2					3	1	4	6
小計	1		3	2	3	3				1		7	1		
計	1		5		6	12				1		8	9	21	

第15表 大形粗製石匙分類表

のが目立つ。石質は硬砂岩、砂岩、緑色岩類の順となっている。緑色岩類は縦形のみに利用されているのは、石の物理的性質によるものであろうか。

第44図は横形のものである。全体に調整は粗雑である。5は唯一のa類である。b・c類は



第46図 石鰯実測図 ( $\frac{1}{3}$ ) ジ 磨滅を表わす

大割剝片を用い、縁辺に刃部をつけるものが普通である。

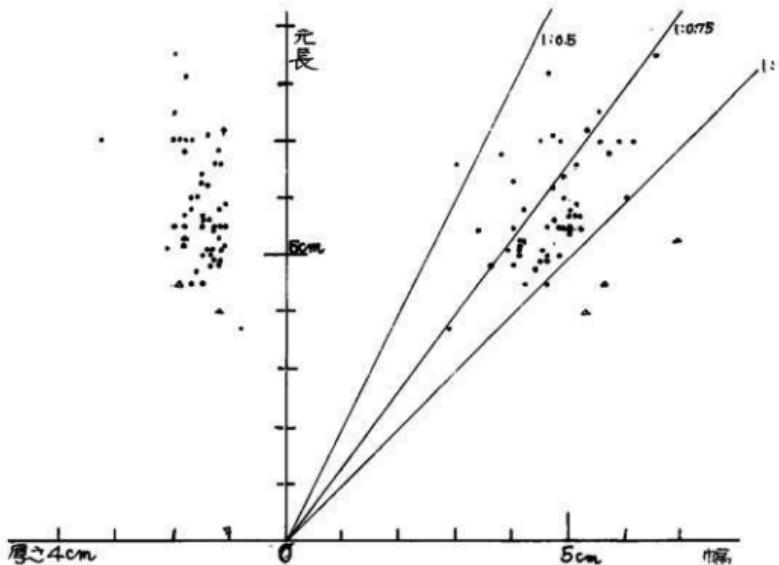
第45図9～13は縦形のものである。a種ではなく。横形同様大割り剝片を用いたものが多い。1, 2, 3, 9の抉入部の片側及び両側に磨滅した痕がみられる。これは製作時において生じたものと考えられ、製作技術を物語るものである。後出する石錐において述べることとする。小形精製石匙が1点出土している(14)黒曜石製で刃部を欠く。

#### 6 石錐(第46図第16～18表)

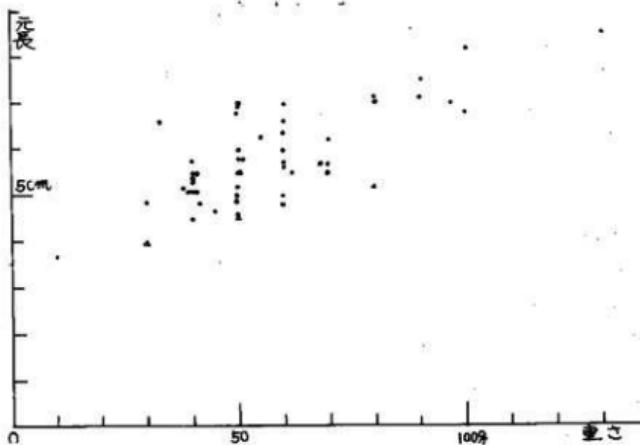
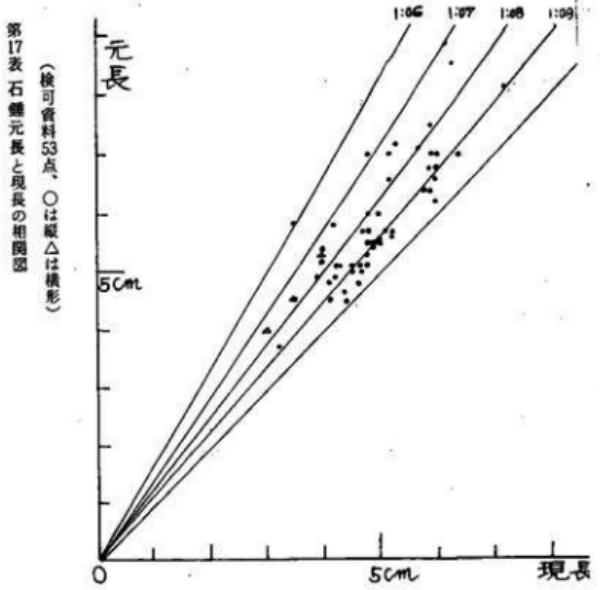
石錐は全部で59点発見されている。すべて縦石錐で切目石錐はない。抉入部が長軸にあるものを縦形、短軸にあるものを横形とすると縦形が圧倒的に多く、横形のものは3点のみである。

石質は図表9からもわかるとおり硬砂岩が多く48点を数え、砂岩が7点、緑色岩類・泥岩がそれぞれ2点ずつとなっている。

第16～18表は後可資料53点を図表化したものである。第16表は石錐の元長と幅と厚さの関係をみたものである。元長とは原石の長さを想定したものである。なお抉入部のある方を長さとしている。元長と幅の関係をみると1:1～0.75のものが一般的であるがなかには1:05を超すものもみられる。長さは4～6cmを示すもの、幅は4～5cmに集中する傾向がみられる。



第16表 石錐元長と幅と厚さの相関図(後可資料53点。○は縦△は横)



第18表 石錆元長と重量相関図 (検可資料53点、○は縦△は横形)

厚さは1~2cmに集中しており、長さと幅とはあまり関係しないようである。中には3cmを超す厚いものもみられる。

第17表は元長と抉入の度合いをみたものである。現長とは抉入部の長さを測ったもので、図表に見るとおり全体の1割内外の抉り込みを示すものが一般である。ときは3割、4割を超すものもある。

石錐の重量については、第18表にみるとおり、40~60gが一般的で軽いものは10g、重いものでは130gを超すものもある。重量は長さだけでなく、厚さ、幅とも関係するため、長さとの比例関係はみられない。

石錐の量は、市内赤穂地区の同時期の遺跡にくらべて多い。これは石錐の用途を考える上で重要なことで、天竜川に面した立地条件と併せ考えると漁業との関連が最も妥当と思われる。今後天竜川における漁具との比較研究が必要となるであろうし、また天竜川水系における石錐の分布状態などの研究が重要な課題である。※1

石錐については、茨城県大洗町おんだし遺跡において多方面からの研究がなされている。この中で、2・3・5・8・11・13・15・16・17にみられる抉入部片側の刃つぶれ状態については、「これは調整のための打撃で、直接打撃法という単純行為の中に秘められた意図が剥離面に表われていると思われる」と述べ、石錐の製作実験も行っている。さらにその結果をもとにしてつぎのように論及している。「注目されるのは……打撃痕は製作実験の石錐のみならず遺跡出土の石錐にも共通して認められる。前述したように打撃痕は割れ口の形を整えるだけなく、糸かけの機能までも意図したものであろう。」

前項の石匙にみられたとどうような刃つぶれ状態も直接打撃によるものと考えられる。ただし石錐にみられる糸かけの機能をも果したかは今後の問題である。

今回の発掘において石錐と同様な形状の自然石が多く発見されている。これらは打ち欠きを持たなくともある程度の機能を果していたものなのか、打ち欠きを持つ石錐の素材として採集されたものなのであろうか。石錐の機能にふれる問題である。

※1 おんだし遺跡調査団「茨城県おんだし遺跡」日本核燃料開発株式会社・茨城県大洗町教育委員会 昭和50年

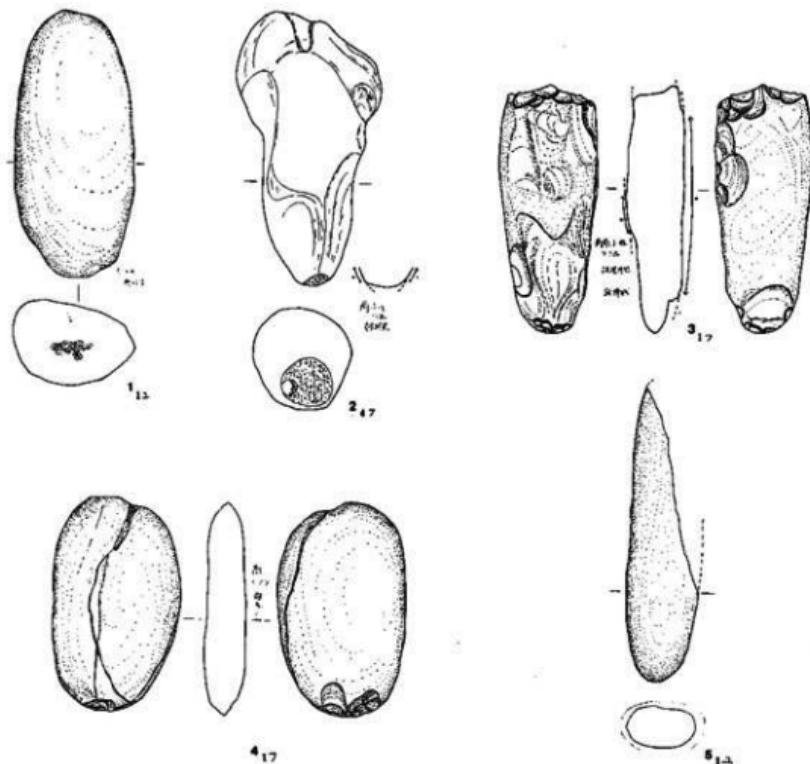
## 7 敗打器（第47~49図、表19~21）

敗打器と呼ばれるものには様々なものがある。ここでは一応たたく・するなど作用をするものを敗打器とし、形態などからa・b・c類の三つに分けてみた。

a類は細長い自然縫を用い、その一端あるいは両端を使用したもので、打撃痕・使用痕などはb・c類に比べて顕著でない。

第47図はa類であるが、2はb類に入るものかも知れない。

石材は第19表にみる通り硬砂岩19点、緑色岩類24点、砂岩1点である。大きさはさまざまであるが10cm前後のものが普通である。重量も60gから790gまでとやはりバラエティーに富んでいる。



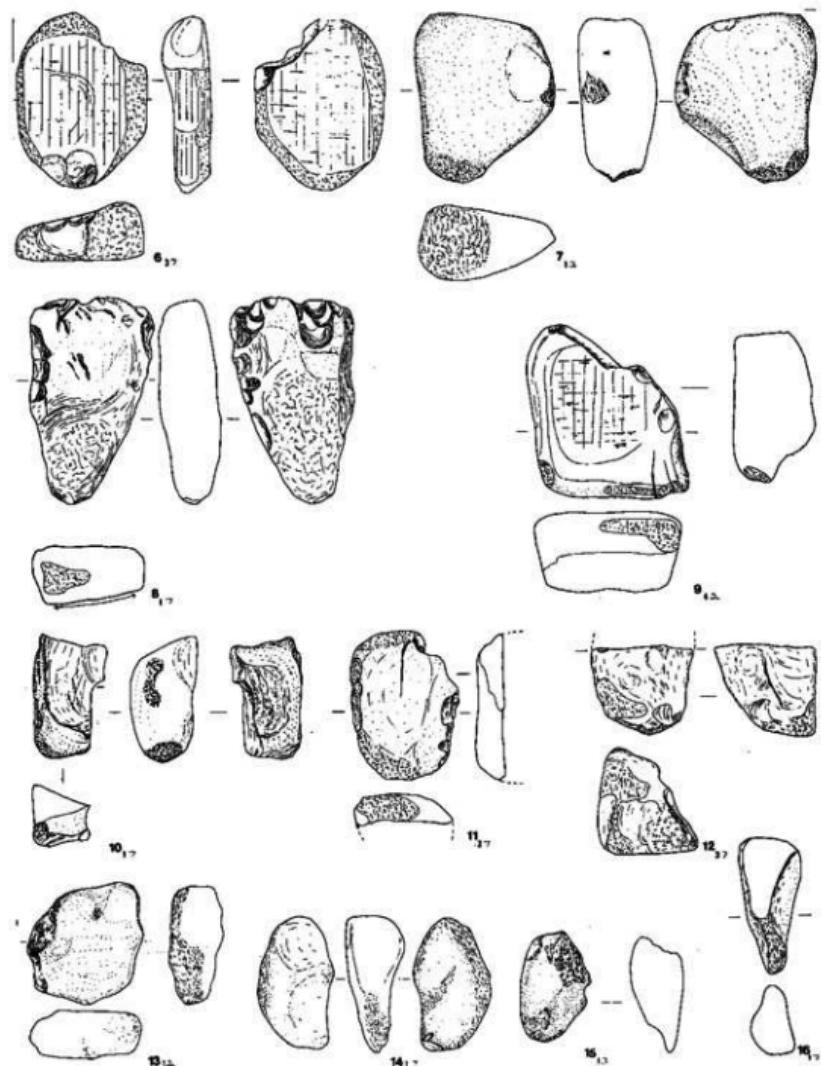
第47図 敲打器(a類)実測図(1/3)

b類は不定形の自然礫の端部や側辺に打撃痕の認められるもので、多くは2~3箇所に打撃痕がみられる。打撃痕は非常に明瞭でa類のそれとは明らかに性格を異なる。また第48図7のように棱を持つものもみられる。6・9は片面に磨きがみられる。後述する特殊敲打器に類似する。

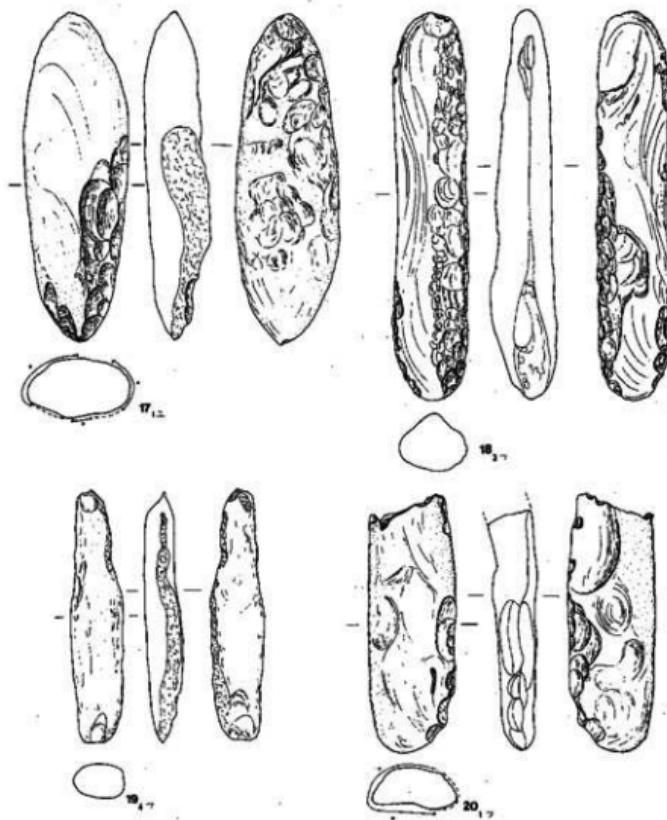
石質は第20表にみるとおり、緑色岩類がほとんどで安山岩が2点あるのみである。

c類は細長い自然礫の側辺部に打撃痕の認められるものである。b類同様打撃痕は顕著である。

石質は第21表にみられるようにすべて緑色岩類である。a・b類に比べて欠損品が多いのは使用方法に違いがみられるのではないだろうか。



第48图 敲打器(b)类实测图(1/3)



第49図 敲打器( c類 )実測図( 1/3 )

さてこれらの敲打器の使用方法はいかなるものであろうか。

a類は從来敲石と呼ばれていたものである。これについては、最近橋口尚武氏が「民俗資料からみた敲石の再検討」と題して論究している。氏は杣の実の種皮を剥ぐ民俗例を取りあげている。その方法について次のように述べている。「……とり出した実を台石上におさえ、長めの敲石で軽く敲いて種皮を剥ぐ。……種皮を敲くにもコツがあるって敲石の打圧が垂直に實に伝わると破碎されるので、打圧が外に逃げるように敲いている。従って敲石で台石を敲くことがほとんどない。剥げた種皮は自然に周りに落ちるように丸味を持った台石が使われ、埼玉県

大瀧村三峰では百年近く使っている台石に使用痕が全くついていない。」さらに「さて、先にみた敲石の民俗例から縄文中期に敲石が多用される点に注目したい。通常敲石は長めの石の両端か一端が利用され、その部分が打滅しているケースが多い。この種のものは発掘中にすぐ目にとまるが、短期間だけしか利用されなかった敲石には打痕は残らない。……」とされている。

当遺跡の敲打器 a 類も同様な使用方法がされていたものであろうか。今後の研究課題である。

b 類の敲打器は、あまり類例をみないものである。<sup>※2</sup> a 類に比べると打撃度の顕著さが非常に目立つ。また形態的にも a 類とは異なったものがあり、機能も当然別のものを考える必要がある。

旧石器に比べれば縄文時代の石器製作技術の解明がまったくなされていないと言える現状においては、色々と問題があると思われるが、敲打器の b 類は石器製作上の加工用具と考えたい。

今回発見された原石・石核・豊富な剥片からしてここにおいて打石器を中心とした石器製作が行われていたと考えることはほぼ問題がないであろう。そうした中で他の遺跡にあまり出土数が見られない b 類敲打器が多量に発見されたことは、石器製作と切り離して考えるべきではないだろう。さらに石質からみると 2 点の安山岩を除けば、すべて緑色岩類で占められていることも道具としての齊一性を裏付けるものである。石器製作の技術解明がはっきりしない現在、どの行程に使用されたかは難しいが、調整用具と考えたい。ちなみに知り合いの石屋さんによると、「三峯川の青石なら方法には研究の余地はあるにせよ硬砂岩を加工することは可能ではないか。」とおしえられた。

c 類も b 類同様類例をあまり知らない。細身の自然礫の側面に打撃痕がみられる。また先に述べた半折れのものが多いなどからすると後述するハンマーと同様の使用方法を考えるのが妥当であろう。18については、乳棒状の磨製石斧の加工段階のものとも考えられる。

※1 橋口尚武「民族資料からみた敲石の再検討」季刊どるめん12号所収昭和52年

※2 中央道関係の発掘例に類例をみることができると飯島町尾越遺跡・高森町増子新切遺跡など

第19表 敲打器( a 類 ) 実測表 単位cm・g

出 土	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	出 土	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
1住覆	緑色	9.0	5.2	5.7	660	1住床	緑色	7.4	5.1	1.9	140
1住覆	"	15.0	5.8	3.1	320	1住覆	"	15.0	12.2	4.7	660
1住床	"	5.8	5.3	2.6	150	1住覆	"	5.8	3.3	2.7	60
1住覆	"	6.8	4.0	2.8	100	1住床	硬砂	13.5	6.5	4.3	540
1住覆	硬砂	9.9	5.4	2.6	290	1住床	緑色	(15.4)	4	2.4	(180)
1住覆	緑色	12.4	6.5	5.8	800	1住覆	"	11.5	8.6	3.5	660
1住床	"	15.2	3.8	2.3	190	1住床	硬砂	13.5	6.4	4.2	540
1住覆	硬砂	11.0	6.6	2.5	200	1住覆	"	10.8	5.6	1.1	230
1住覆	"	11.5	5.5	2.6	240	2住覆	"	9.6	7.8	3.4	400
2住床	緑色	7.4	6.4	5.7	400	2住床	緑色	8.3	4.3	2.9	160
2住覆	"	12.2	4.5	3.1	180	2住覆	"	11.7	6.1	4.3	440

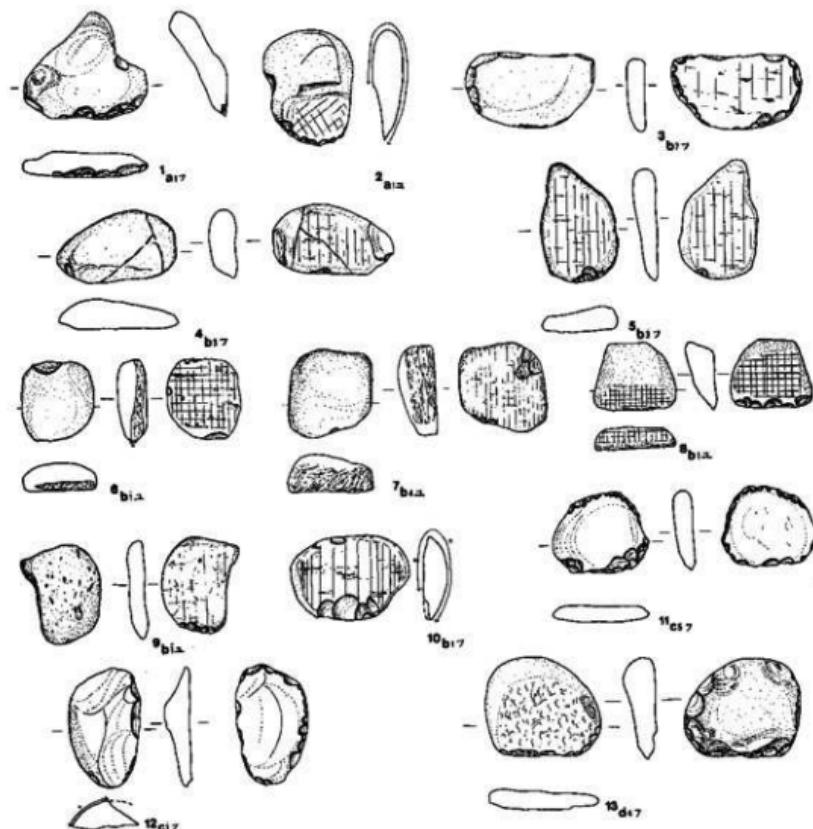
3住覆	緑色	10.2	3.3	2.2	110	3住覆	硬砂	8.6	3.4	2.8	130
3住覆	硬砂	10.0	5.9	2.5	230	4住覆	"	10.3	5.2	2.6	150
4住覆	緑色	12.1	3.7	2.1	160	4住床	緑色	11.8	3.3	2.8	209
4住床	硬砂	10.4	10.2	2.8	440	4住覆	硬砂	13.0	5.1	4.3	590
4住覆	"	15.4	5.0	3.8	360	5住覆	"	8.5	4.8	2.0	130
5住覆	"	7.9	4.2	1.6	90	7住覆	緑色	(7)	5	6.8	(145)
7住覆	緑色	16.4	5.2	4	510	7住覆	"	9.0	4.4	3.2	230
7住床	"	10.5	3.3	1.6	90	8住覆	"	8.4	5.5	2.1	78
9住覆	硬砂	13.5	7.9	5.1	760	9住覆	"	11.7	5.4	4.5	530
9住床	"	11.1	8.3	6.2	970	9住床	硬砂	9.1	7.5	4.1	410
9住床	"	15.4	4.9	2.8	350	9住床	砂岩	9.5	4.6	1.6	110

第20表 敷打器( b類 )実測表 単位cm・g

出 土	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	出 土	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
1住覆	緑色	14.3	6.3	4.0	480	1住覆	緑色	10.5	7.1	4.2	400
1住覆	"	9.3	7.5	3.0	320	1住覆	"	9.4	6.2	3.2	330
1住覆	"	3.9	7.0	3.0	110	1住床	"	6.7	5.6	2.1	160
1住覆	"	3.9	5.8	2.8	70	1住床	"	5.7	7.5	3.1	230
1住床	"	7.1	8.3	4.0	400	1住覆	"	4.3	5.9	3.0	110
1住床	"	7.2	8.2	4.0	400	1住覆	"	3.7	5.9	3.2	100
2住床	"	11.0	8.6	5.2	640	2住床	"	8.2	4.5	5.6	320
3住覆	"	11.1	6.1	3.2	240	3住覆	"	7.7	4.4	2.4	170
3住覆	"	8.8	7.1	3.5	330	4住覆	"	14.0	7.4	4.8	740
4住床	"	6.8	5.2	4.2	230	4住覆	"	8.9	5.8	4.2	263
4住覆	"	10.3	6.0	2.0	190	4住床	"	7.1	4.0	3.7	230
4住床	"	9.0	7.2	3.8	350	4住覆	"	7.8	4.9	3.8	225
4住床	"	10.6	4.7	3.1	180	4住床	"	8.9	7.8	4.6	490
5住覆	"	6.0	4.0	1.5	50	5住覆	"	14.0	6.0	4.7	510
5住覆	"	8.4	6.6	4.4	380	5住覆	"	9.5	7.2	4.6	490
5住覆	"	8.3	5.4	5.2	400	5住覆	"	9.5	6.7	3.5	360
5住覆	"	6.7	5.9	3.4	230	5住覆	"	6.6	4.2	3.8	175
5住覆	"	7.6	4.1	5.0	155	7住覆	"	10.5	8.5	5.2	580
7住覆	"	10.9	8.7	5.1	600	8住覆	"	9.8	4.9	5.2	360
8住覆	"	10.6	7.1	4.3	600	8住覆	"	8.9	5.7	4.3	315
9住床	"	12.2	7.7	5.6	740	9住床	"	8.2	5.1	2.6	185
9住覆	"	9.7	5.1	2.2	210	9住覆	安山	5.8	7.1	2.8	150
9住覆	安山	8.1	5.8	2.1	170	9住覆	緑色	4.7	4.2	3.2	115

第21表 斧打器(c類)計測表 単位cm・g

出土	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	出土	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
1住覆	緑色	12.5	5.3	2.7	270	1住床	緑色	17.0	5.5	3.3	450
1住覆	" (13.0)	4.5	2.2	(250)		3住覆	"	20.0	3.6	3.5	380
4住覆	" (11.5)	3.8	3.0	(210)		4住床	"	13.0	2.8	2.0	120
4住覆	" (10.6)	3.1	2.3	(122)		5住床	"	10.4	4.5	4.5	340



第50図 特殊敲打器実測図(1/3)

### 8 特殊敲打器（第50図）

小形で使用痕・打撃痕のあるものを適切かどうかは別として特殊敲打器として採りあげた。断面三角形あるいは台形状の小形の自然石を利用したものが一般的であるが、様式から4つに分けてみた。

- a類 まったくの自然石を利用したもの（1, 2）
- b類 平坦面あるいは一面を磨いてあるもの（3～10）
- c類 片面は割られているもの（11, 12）
- d類 片面割られた部分に磨きがみられるもの（13）

第9表にみる通り総数84点のうちa類10点、b類55点、c類13点、d類6点となっており、b類がもっとも卓越している。石質は硬砂岩が最も多く種類によって石質に制限がみられるようなことはない。

手元にある文献をみるとこの種の石器は類例がほとんどない。種類によって機能の差はみられないと思われるが、磨きのあるものは、それ自体機能として持っていると考えるべきである。

機能についてはまったく不明であるが、当遺跡の特殊性からすれば石器の調整具と考えるのが妥当であろうか。

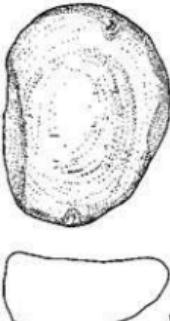
### 9 石皿（第51図）

出土した石皿は、第1号住居址から出土したもの1点だけである。材質は硬砂岩で若干全体がくぼむ程度のものである。

当遺跡からの石皿の出土は1点のみで少ない。市内赤穂地区における縄文中期の遺跡、大城林・北方I・富士山遺跡などでも同様な傾向を示している。これらからみて地域性の問題も想起させるところである。ところが、当遺跡からわずか西に位置する丸山南遺跡からは、石皿が多く出土している。またこの丸山南遺跡は大城林遺跡とはほぼ同時期の聚落であり、地域性・時代性もこれらからすると考えにくくなる。今後の課題である。

\*1 県営は場整備事業大田切地区（昭和47・48年度分）埋蔵文化財緊急発掘調査報告書「大城林・北方I・II・湯原・射殿城・南原・横前新田・塩木・北原・富士山」1974駒ヶ根市教育委員会

\*2 昭和52年に発掘調査を行った。報告書は現在作製中であるが、井戸尻期の後半から曾利期前半にかけての大聚落で、ほぼ聚落の全貌が明らかとなった。発見された住居址は全部で53軒、石器も多量に発見されている。



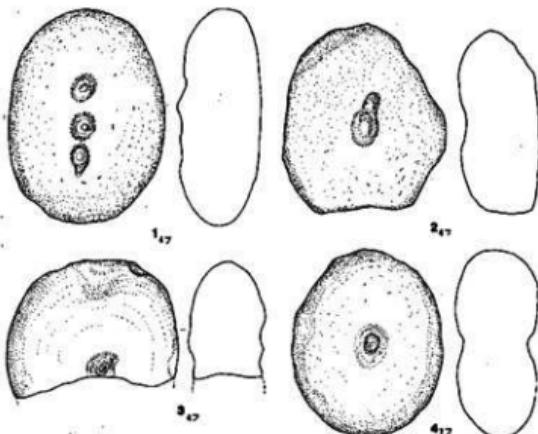
第51図 石皿実測図  
(1/3)

### 10 凹石（第52図）

凹石は4点の出土をみている。すべて覆土より出土したもので、4号住居址より3点、7号住居址より1点である。

石質は全部花崗岩である。

石皿のところで述べた大城林・北方I・富士山・丸山南遺跡においても凹石の出土は少ない。地域性の問題であろうか。



第52図 凹石実測図 (1/3)

### 11 磨石（第53図）

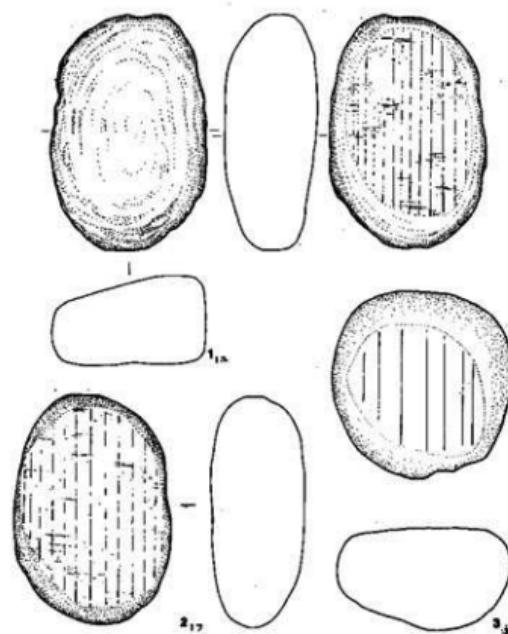
磨石は全部で17点出土している。

第53図の3点以外はほとんどが破損品でなかには、残程度のものもみられる。

全体をすりあげ、3点とも片面を平坦に磨きあげている。

石質は3点とも花崗岩である。全体的にも17点のうち花崗岩が12点と多い。ついで硬砂岩・砂岩2点、綠色岩類1点となっている。

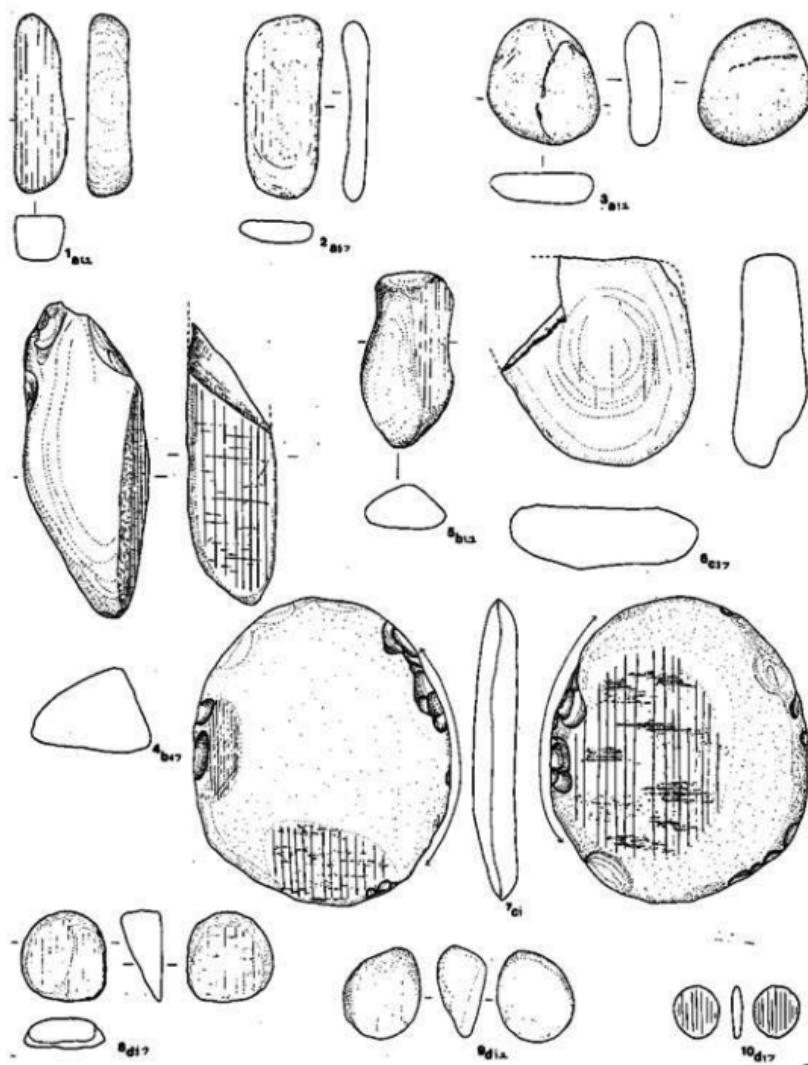
石皿と磨石をセットとするならば、磨石に比べて石皿の少ないのが目立つ。



第53図 磨石実測図 (1/3)

### 12 磨き石（第54図）

従来磨石の一種とされていたものを別に取り出して4種にわけて磨き石とし、区別した。



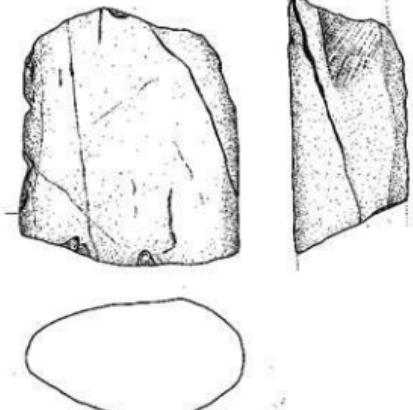
第54図 磨き石 (a～d類) 実測図 (1/3)

区別は次のとおりである。

- a種—総体に小柄な自然石の平坦面に磨きがみられるもの（1～3）。
- b種—自然石の平坦でない一面を磨くもの（4、5）。
- c種—大きな自然石の一部を磨くもの（6、7）。
- d種—小さな自然石の全体を磨くもの（8～10）。

各種とも機能は定かでない。c種は平盤石皿の可能性もある。

総数で127点出土しているが、a種が67点で最も多く、d種が30点、b種が18点、c種が12点となっている。



第55図 石棒実測図 (1/3)

石質は硬砂岩が最も多く利用され、ついで緑色岩類となっており、種別による石の利用差はあまりみられない。

### 13 石棒（第55図）

石棒は第4号住居址から2点出土している。2点とも欠損品で1点は残欠である。

第55図は楕円形を呈し、胸部のため有頭かどうかは不明である。石質は花崗岩である。

2点とも覆土よりの出土のため直接住居址に伴うものかは不明である。

石棒と同様な用途を持つと思われる立石は、遺構の所で述べたように、第1号・第3号住居址より発見されている。

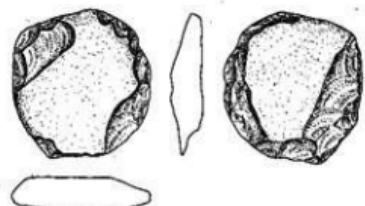
### 14 石核状石器（第56図）

やや厚ぼったい平盤な自然礫の縁辺に打撲痕及び調整痕のみられるものである。

図示したもの1点のみの出土で、2号住居址床面より発見された。

石質は硬砂岩である。

これ自体で石器の機能を持つのか、ある種の石器の加工途上なのかは不明であるが、前者の可能性が強いと思われる。



第56図 石核状石器実測図 (1/3)

### 15 ハンマー（第57図）

石器加工用具として素材を作成する上での大割り用ハンマーと思われるものが2点出土して

いる。ともに第1号住居址よりの出土で、1は床面より、2は覆土よりの出土となっている。

1は緑泥片岩製で、細長い自然縫を用い片面に打撃痕がみられる。完形品で重量は1620gを量る。

2は凝灰岩製で、基部は欠損する。断面三角形の稜を使用しており、1と同様である。全体につぶれ状の打撃痕がみられる。現重量は1670gである。

1、2ともかなりの重量を持ち、ハンマーとしての機能は十分はたせるであろう。

#### 16 石核（第58図）

石核は全部で30点出土している。

これを形態、石質より3種類に分類してみた。

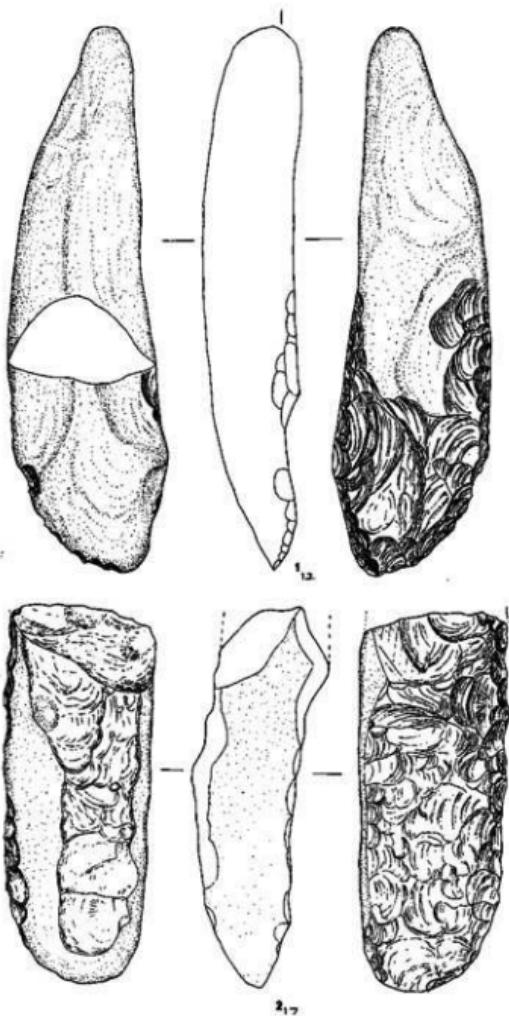
a種一原石から石器を作出するに適當な素材を大割りによって求めるものである（1～3）。石質はすべて硬砂岩である。

b種一石質は緑泥片岩で横剥ぎ技法による薄い剥片を作出するものである（4）。

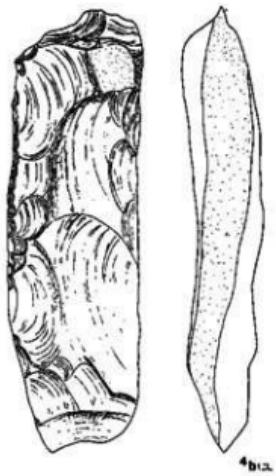
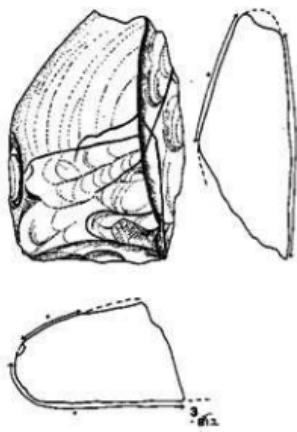
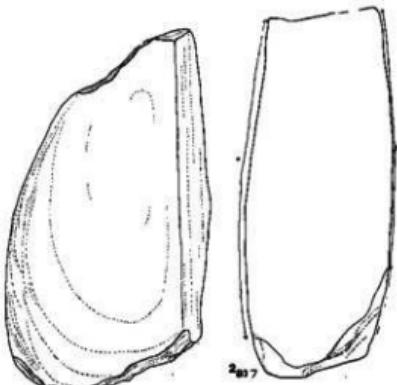
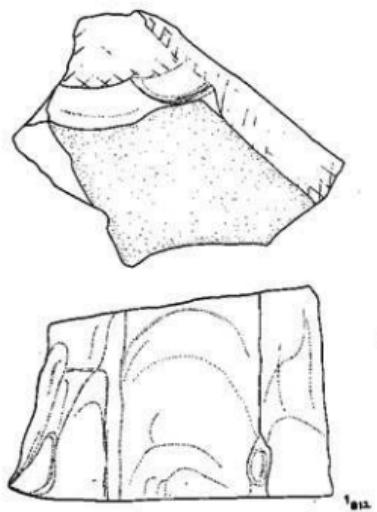
c種一本種は剥片の一種あるいは石器加工中とも考えられるもので、数か所からの打撃がみられるものである（5～7）。石質はすべて硬砂岩である。

種別数量はa種が最も多く15点、ついでc種が14点、b種は1点のみである。

石器製作における石核の問題は、打製石斧・石匙の製作において関連を持つものと考えられる。



第57図 ハンマー実測図（1/3）



第58図 石核 ( b . c 頭 ) 実測図 (1/3)

これは石器製作方法と非常に密接にかかわる問題である。

縄文時代中期における石器は製作の方法は大きく礫石器と剥片石器とに分けることができる。礫石器はある種の石器のために選択した原石をそのままに生かして作出されるもので、石皿・印石・磨石・石錐などは典型的なものである。

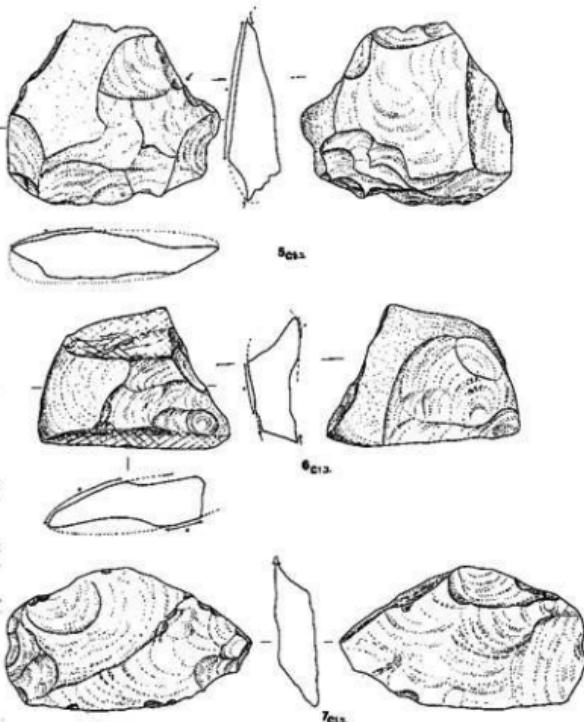
剥片石器は打製石斧・石匙の一部そして横刃型石器がそれである。

しかしながら打製石斧・石匙については剥片石器とともに礫石器の性格も強く持つことはすでに各項において述べてきたところでもあります。

石核 a・b種をこの面から見直してみると、剥片を作出したと思われるものは、1・4であり、2・3は原石を大きく割ったもので礫石器になりうるものである。打製石斧・石匙のa種のなかにはこの種の素材から作出されたものも多くあると思われる。

c種のうち5・6は礫石器の残核あるいは礫石器の加工中と考えられる。

硬砂岩であるa種が15点出土していること、また遺構内に残された原石などから考えると石器製作が行われたことを十分に裏付けるものである。



第59図 石核(c類)実測図(1/3)

### 17) 横刃型石器と剥片 (第60・61図、第22表)

第9表にみるとおり多量の剥片が発見されている。全部で616点を数え、石器総数中約半分を占めている。このうちいわゆる横刃型石器と呼ばれるものは79点で剥片中1割強である。

このように多量に剥片が出土することは極めてまれなことで、今まで発掘した市内の同時代の遺跡においては、わずかな横刃型石器を除いては剥片の出土はほとんどみられなかった。また県内においてもこのような例は初見と思われる。

横刃型石器は剥片を利用するものであり、形態的には同じものと考え、同一の分類を試みてみた。分類方法は打製石斧・石匙の分類と同じに礫表皮の残存状態から5種類にわけること

とした。

a種 片面全面に礫表皮の残るもの。また一部には剥離のさいの打撃痕のみられるもの(1)もある。

b種 a種同様全面に礫表皮がみられるが、一端ないし二端が切断または破損しているものである。この場合、破損したものか、石核状態がそうであったかは明瞭にしがたい。

c種 磨表皮のみられる面に大きな剥離痕がみられるものである。

d種 测辺部に自然面を残すものである。

e種 まったく自然面を残さないものである。

当遺跡から出土した横刃型石器を含めた剝片を以上のように分類してみたが、はたして当を得たものであるかは疑問である。ここに述べる硬砂岩、緑色岩類は、黒耀石などに比べて剥離痕の観察が非常に難しいことが一因である。

a～e種を大別すれば、a～d、e種とに分けることができる。礫表皮を持つか持たないかは打製石器の製作における技術的問題と深く係りを持つものである。

住居址 種別	1号住		2号住		3号住		4号住		5号住		7号住		8号住		9号住		計	
	横刃剝片																	
a種	2	35	1	5	7	13	5	98	4	23	3	10	1	2	6	13	29	199
	37		6		20		103		27		13		3		19		228	
b種	3	23	4	6	5	4	7	27	1	14	0	14	0	8	1	15	21	111
	26		10		9		34		15		14		8		16		132	
c種	0	27	2	4	0	12	0	6	0	6	1	10	0	0	1	20	4	85
	27		6		12		6		6		11		0		21		89	
d種	4	13	2	4	0	2	3	12	1	15	1	4	1	5	0	4	12	59
	17		6		2		15		16		5		6		4		71	
e種	1	13	1	3	1	3	8	34	1	7	0	9	1	1	0	13	13	83
	14		4		4		42		8		9		2		13		96	
計	10	111	10	22	13	34	23	177	7	65	5	47	3	16	8	65	179	537
	121		32		47		200		72		52		19		73		616	

第22表 住居址別横刃型石器と剝片一覧表

種別	a	b	c	d	e	計	
横刃	29 36.7	21 15.9	4 4.5	5.0 16.9	12 13.5	13 16.5	79 12.8
剝片	199 37.1	111 84.1	85 95.5	15.8 83.1	59 86.5	11.0 15.4	83 87.2
計	228 37.0	132 21.4	89 14.5	71 11.5	96 15.6	616	

第23表 横刃型石器と剝片の比率表

種別 石質	a	b	c	d	e	計
横刃	23 36.5	17 27.0	2 3.1	11 91.7	10 76.9	63 79.7
剝片	5 35.7	4 19	2 50.0	0 91.7	3 23.1	14 17.8
その他	1 50.0	0 3.4	0 8.3	1 50.0	0 25	2 2.5
計	29 36.7	21 26.6	4 5.0	12 15.2	13 16.5	79
硬砂岩	158 37.4	90 21.4	72 17.1	44 74.6	58 69.9	422 78.6
緑色岩類	23 31.1	15 20.3	11 14.9	9 12.1	16 19.3	74 13.8
その他	18 43.9	6 5.4	2 24	6 10.2	9 10.8	41 7.6
計	199 37.1	111 20.7	85 15.8	59 11.0	83 15.4	537
総	181 37.2	107 22.1	74 15.3	55 11.3	68 14.0	485 78.7
硬砂岩	28 31.8	19 21.6	13 14.8	9 10.2	19 21.6	88 14.3
緑色岩類	19 12.3	6 14.4	2 14.6	7 12.7	9 19.8	43 7.0
その他	19 44.2	6 4.5	2 22	7 9.8	9 9.4	43 7.0
計	228 37.0	132 21.4	89 14.5	71 11.5	96 15.6	616

第24表 横刃型石器と剝片石質別比率

第22表は住居址毎に横刃型石器と剝片の数量を表したものである。住居址によつて数量のバラツキがみられる。4号住居址が最も多く、横刃型石器も多くみられる。

第9表にみるとおり、覆土の出土のものがかなりの比率を占めているため、住居址毎の数量の多い少ないがそのまま住居址に生活した人間が生じた剝片量とは一致しないと考えねばならない。とりわけ剝片は石器製作によって生じるものでおおかたのものは不必要であり当然廃棄を考える必要がある。

住居址毎は別として全体的な比率をみたものが第23表である。

種別的には、a種が最も多く、a～d種の礫表皮を持つものが85%弱となっている。c種を除いては横刃型石器の比率もほぼ同様な傾向をみせている。

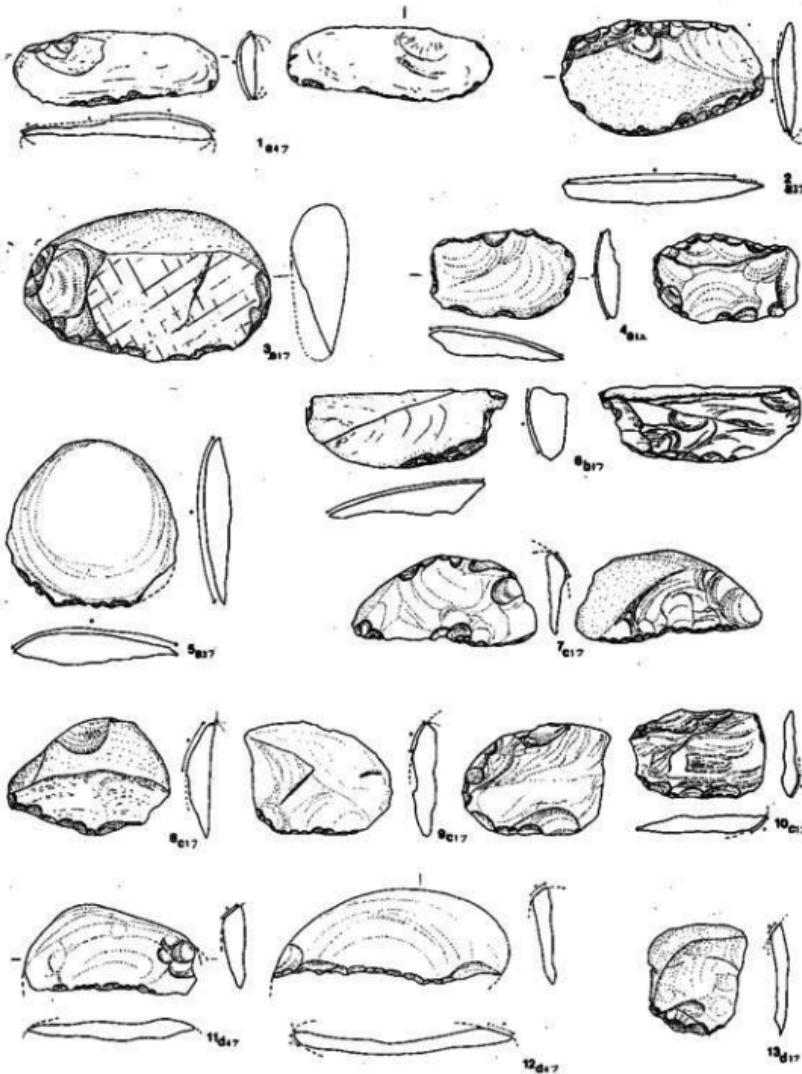
全剝片中に占める横刃型石器の比率は全体で12.8%，c種の4.5%を除けばすべてほぼ同数値が上回っている。

ここで問題となるのは、横刃型石器が、作意的に作出されたものかどうかである。

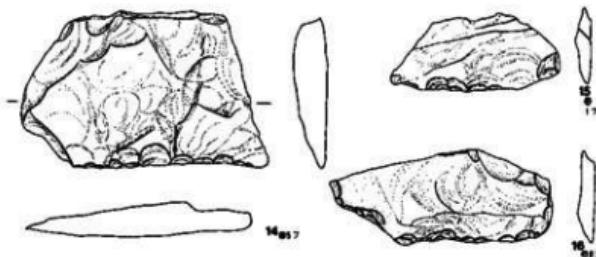
礫表皮を持つものが85%弱を占めそのうち片面すべてに礫表皮を持つa種が多く、また剝片が大形であるなど考えるとある程度横刃型石器用の剝片を意識して作出された可能性も強く感じられる。

このことは剝片はないが横刃型石器は出土する遺跡の存在からも裏付けられるであろう。

つぎに石質についてであるが、これは打製石器の石質と大きな関わりを持つものである。全体的にみると硬砂岩が約8割を占めている。この傾向は横刃型石器においても同様である。



第60図 横刃型石器実測図 (1/3)



第61図 横刃型石器実測図 (1/3)

第60・61図は横刃型石器である。形態的には様々なものがみられる。機能的相違については、今後の課題としたい。

#### 18 小結

石器について種類別に述べてきたが、最後に若干の問題点にふれておわりとしたい。

最も注目すべきことは、この遺跡における石器のあり様である。すでに各項においてふれてきているが、石器の製作場の性格を強くうかがわせることである。

打製石器製作時に生じる剝片がぼう大に発見されたこと、さらに原石の存在、加工工具の存在がそれを裏付けるものである。今回石器を機能面より製作手法面に重きをおいたのはその故である。

石器の素材からみれば礫石器と剝片石器とに分けることができることは、すでに述べてきている。打製石器である打製石斧・石匙にはその両面を持ち合わせていることもまた事実である。当遺跡より発見されたぼう大な量の剝片は、打製石器製作時において生じたものであり、このことからみれば、打製石斧・大型粗製石匙を主体とした石器の加工がなされていたものと考えるのが妥当である。

石器製作において最も重要なことは、原石が多量に入手できるかどうかである。当遺跡の打製石器の石材は硬砂岩を主体とし、緑色岩類がついでいる。この两者とも三峠川流域を主産地とするもので、天竜川西側には存在しないものである。

現在では各地にダムもでき、往古の姿とは天竜川も形をかえてしまったが、縄文時代においては、天竜川に三峠川からの岩石が流入していたことは十分考えられ、天竜川においては比較的大く原石が入手できたものと思われる。天竜川を眼下にのぞむ当遺跡は絶好の立地条件をもっていたものといえる。さらに言えば、わざわざこの地を選んで住居を設けたものといつても過言でないだろう。集落の規模もあまり大きくなり一時期二軒ほどの住居の存在を考えると石器製作のための出村と考えることができるが、早計であろうか。

さて大量に製作された石器はどうしたのであろうか。これについて武藤雄六氏と林茂樹氏の

指摘をあげておきたい。

武藤氏は、井戸尻遺跡周辺の遺跡における石器の中にその付近ではみられない石材を使った石器があることに注目し、ある特定地区より移入された可能性が強いとされている。<sup>※1</sup>また林氏は伊那地方から出土する土器の中に調整・焼成が特にすぐれたものがみられることからやはり移入説をとなえられている。<sup>※2</sup>この両氏の指摘は当遺跡の存在を考える上に重要なことである。

ある目的のための出村の存在、生産活動における分業化は縄文時代中期においては、明確にされていないことであり、問題がないとは言えない。しかし南原遺跡の性格はこのように考えることによってのみ解明されるものと考えられるものである。

今回の石器報告をまとめるにあたり、樋口昇一氏、武藤雄六氏を始め、多くの皆さまからご教示をいただいたことに対し、心から感謝申し上げるとともに、皆さまの期待に応えることができなかつたことをおわびする次第であります。以上（気賀沢 進）

※1 ※2 ともに直接話を伺ったもので誤りがあれば筆者の責任であります。

## 第 IV 章 ま と め

天竜川の段丘は大小の河川によって浸蝕された台地を形成している。これらの台地には、大小多数の遺物包含遺跡が残存していることは、周知のことである。

これら遺跡群は、明治～大正期の開墾によってその姿を変えてきている。ところが、昭和も後半に入ると、経済の向上とともに大規模のは場整備事業、工場団地・住宅団地等の造成が盛んになり、埋蔵文化財の調査もひんぱんに行われるようにならなかった。駒ヶ根市も同様ここ数年各地区の調査が行われ、地域毎の遺跡の特性が次第に明らかになってきた。

今回調査された南原遺跡は、位置図に示されているように、駒ヶ根市赤穂地区の東南端に当たり、天竜川第一段丘上に所在する遺跡である。発掘調査の詳細な記録は前章で既に述べられているので、ここではくり返すことにして、二・三特筆すべき事項を述べまとめとしたい。

本遺跡は、狩猟時代にあって全くことのできない石器の原石が、ごく近くの天竜川から得られるという好条件に恵まれている遺跡である点注目しなければならない。このことは、天竜川沿岸地域に分布する諸遺跡に本遺跡のような性格をもった遺跡が所在することがあるなれば、今後石器製作の研究になんらかのプラスとなれば幸いである。

今後の調査地区からは、あまり広くない範囲に、縄文時代中期の住居址が9軒発見された。これら住居址は、小結すでに述べられているように、一時期二軒単位の石器製作の出村ではなかったかという意見もあり、周辺諸遺跡からも製作技法がまったく類似した石器が発見されているをみると、今後周辺の遺跡から発見される石器と対比して、この研究を進める必要を深く痛感するものである。

本調査で特に注目したいことは、多量の出土をみた剥片石器は石器製作により生じたものであることからして、打製石斧、大型粗製石匙を主体として石器の加工がなされていたものと考えられ、その製作過程の分析は、高く評価してもよいと思う。まだまだ多くの問題は残るにしても、その努力は長野県における中期縄文研究を飛躍させる役割を担うことができれば幸である。

(調査団長 友野良一)



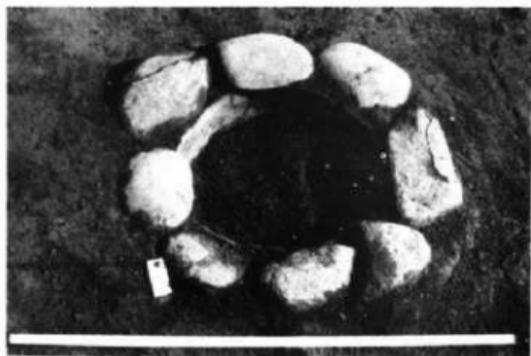
図版1 南原遺跡遠景



図版2 発掘風景



图版3 第1号住居址



图版4 同 炉



图版5 同炉内埋设土器





1



35



36



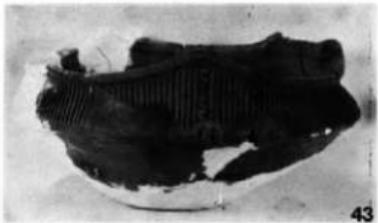
39



40



41

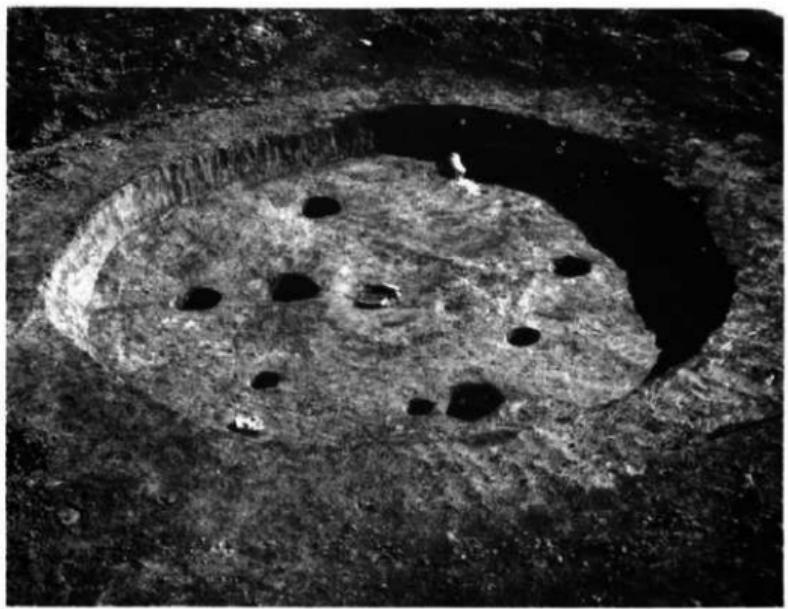


43



44

图版6 第1号住居址出土土器

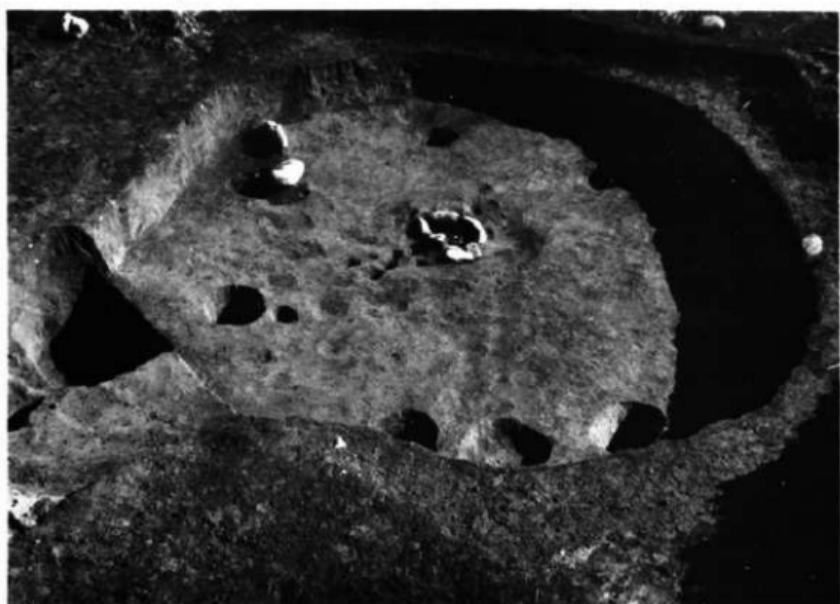


图版7 第2号住居址



31

图版8 同炉内埋设土器



图版9 第3号住居址



图版10 同 炉



图版11 同出土土器



図版 12 第 4 号住居址

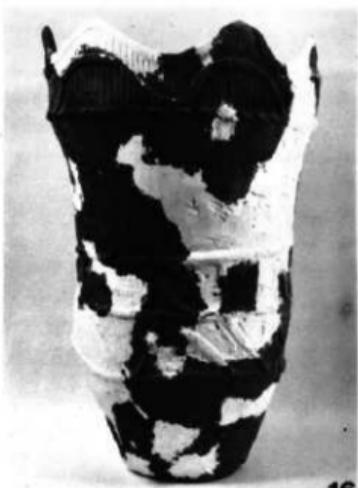


13

図版 13 焚炉と炉内埋設土器



1



16



15



17



14

图版 14 第 4 号住居址出土土器



图版 15 第 5 号住居址



图版 16 同 灶



图版 17 同 杈 内埋设土器



13



14

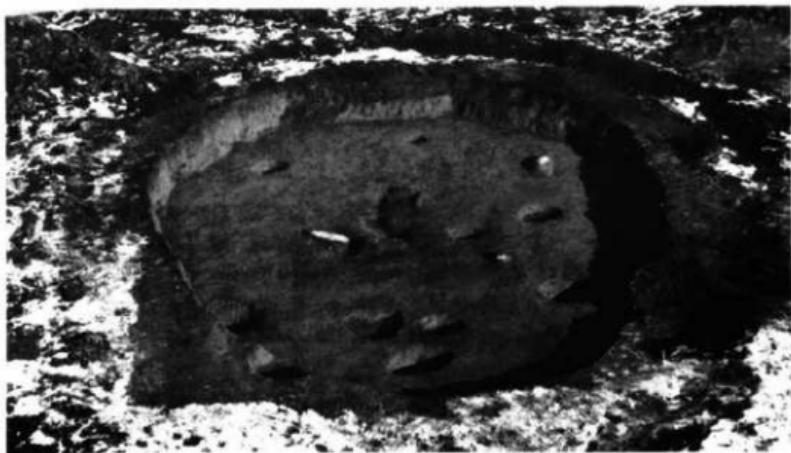


18

图版 18 第 5 号住居址出土土器



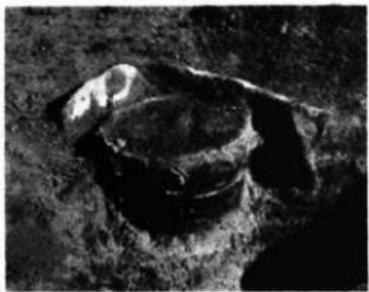
图版 19 第 7 号住居址土器出土状態



圖版 20 第 7 號住居址



圖版 21 同 廈



圖版 22 同爐內埋設土器



2



4



6



7

图版 23 第 7 号住居址出土土器



图版 24 第 8 号住居址



图版 25 第 9 号住居址



图版 26 禁掘参加者

## 南原遺跡

### —緊急発掘調査報告書—

昭和52年2月20日印刷

昭和52年2月25日発行

編集 駒ヶ根市赤穂2423-6 市立博物館内

県営は場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会

発行 伊那市青木町伊那合同庁舎内

南信土地改良事務所

駒ヶ根市赤穂10780-2

駒ヶ根市教育委員会

印刷 伊那市大字美篠上大島

みすず創美社 6-0727

